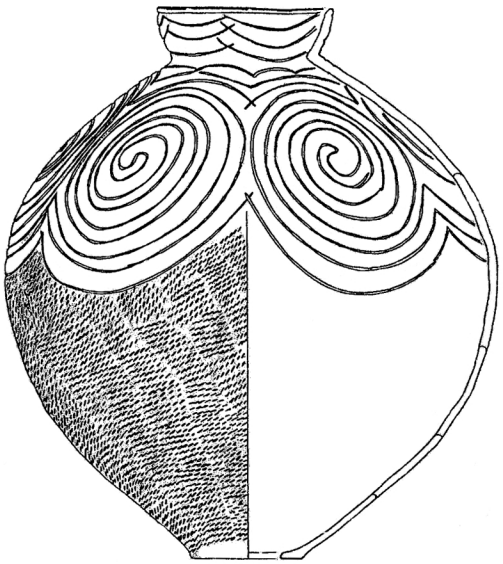
福島県文化財調査報告書第191集

国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告Ⅵ

一ノ堰A・B遺跡
（会津若松市）



１９８８年３月

福島県教育委員会

福島県文化財調査報告書第191集

国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告Ⅵ

一ノ堰Ａ・Ｂ遺跡
（会津若松市）

序　　文

国営会津農業水利事業は，会津盆地の基幹農業用水施設整備のための国営灌漑事業であり，会津北部地区事業、会津南部地区及び会津宮川地区事業の３事業に分かれております。総受益面積は，1,350haで会津盆地平坦部のほとんどを包含し，関係市町村は，会津若松市外１市４町５村に及びます。

福島県教育委員会は，当事業地域内の埋蔵文化財の保護を目的として，昭和56年度に，ダムに伴う水没地域，幹線用水路建設予定地を対象として，分布調査を実施し，52ヵ所の遺跡の所在を確認いたしました。その結果にもとづき，東北農政局会津農業水利事務所と保存協議を重ね，昭和58年度より新宮川ダムの水没地内に所在する６遺跡について発掘調査を実施し，昭和60年度に終了いたしました。続いて、昭和61年度より南部地区の幹線用水路にかかる遺跡の発掘調査を実施しております。本報告書は，昭和62年度に財団法人福島県文化センターに委託した会津南部地区会津若松市所在の一ノ堰Ａ遺跡と一ノ堰Ｂ遺跡の２遺跡の発掘調査概要を「国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告Ⅵ」としてまとめたものです。

今回の調査の結果，一ノ堰Ｂ遺跡において東日本最大級の土坑墓群が発見され，弥生土器をはじめ管玉・勾玉などの膨大な遺物が出土いたしました。本書が，考古学・歴史学など学術的研究のみならず学校教育・社会教育においても活用され，文化財保護活動の普及・啓蒙に役立ちますならば幸いに存じます。

最後に，この調査に御協力いただいた東北農政局会津農業水利事業所，会津若松市教育委員会及び地元の方々に感謝の意を表しますとともに，調査を行った財団法人福島県文化センター職員の御尽力に心から感謝申し上げます。今後とも埋蔵文化財の保護につきまして一層の御理解と御協力をお願いいたします。

昭和63年３月

福島県教育委員会

教育長　佐　藤　昌　志

例　　言

1．本書は，昭和62年度国営会津農業水利事業（門田幹線用水路建設）に伴う下記の遺跡の発掘調査報告書である。

(1)　一ノ堰（いちのせき）A遺跡　　会津若松市門田町面川字根岸（調査面積1,900㎡）

(2)　一ノ堰（いちのせき）B遺跡　　同　　上　　（調査面積1,400㎡）

2．昭和62年度の発掘調査費は，国庫補助金，東北農政局負担金と県費からなる。

3．福島県教育委員会は，発掘調査を財団法人福島県文化センターに委託した。

4．財団法人福島県文化センターでは，事業第二部遺跡調査課の次の職員が調査にあたった。

(1)　一ノ堰A遺跡

副　主　査　石本　　弘　　文化財主事　芳賀　英一

(2)　一ノ堰B遺跡

文化財主事　芳賀　英一　　文化財主事　小林　雄一

文化財主事　丹野　隆明

(3)　一ノ堰B遺跡の調査にあたっては，下記の職員が一部協力した。

文化財主査　熊谷　金一　　文化財主事　長島　雄一

副　主　査　橋本　博幸　　文化財主事　本間　　宏

副　主　査　石本　　弘　　文化財主事　飯村　　均

文化財主事　高橋　信一　　菅谷　通保（東大文学部）

5．報告書にあたっては，事業第二部長前山　豊，遺跡調査課長目黒吉明の指導のもと，調査職員で協議し，第一編を芳賀英一，飯村均，第二編を芳賀英一，小林雄一，丹野隆明が執筆した。

6．一ノ堰B遺跡の弥生土器挿図作成にあたっては，遺跡調査課の多くの職員の協力があった。

7．本書の８Ｐ，12Ｐに使用した地形図は，建設省国土地理院長の承認を得て，同院発行の二万五千分の一，五万分の一の地形図を複製使用したものである。（承認番号：昭63東複，第96号）

8．調査に関する記録及び出土品は，福島県歴史資料館（福島県文化センター内）で保管している。

9．発掘調査及び報告書作成にあたっては，次の機関の助言，協力を得た。（敬称略）

会津若松市教育委員会，福島県立博物館，明治大学考古学博物館，会津武家屋敷

凡　　例

1．本報告書は調査員が分担執筆した。執筆者名を文末に記載した。

2．用字・用語については統一を計ったが，時間的な制約から細部に不統一な点がある。

3．報告書執筆の基準は次のとおりである。

(1)　実測図中の方位は磁北を示し，本文中に記した方位角度は磁北からの偏度である。

(2)　実測図中および本文中のP_1・P_2…は，１号ピット・２号ピット…を表す。

(3)　遺構実測図は原則として$^1/_{20}$・$^1/_{40}$縮尺で採録し，各々にスケールを付した。

(4)　遺物実測図は原則として土器を⅓・¼，管玉を原寸，拓影を⅓で採録し，各々にスケールを付した。

(5)　遺物写真は任意の大きさでレイアウトした。

4．各編での引用文献については執筆者の敬称を省略，参考文献は紙面の関係上割愛した。

5．本文中で使用した遺構の略号は次の通りである。

SI……竪穴住居跡　　SK……土坑墓・土坑　　SD……溝　　跡

6．発掘調査の資料は次の略号の組み合わせにより整理した。

市町村略号

会津若松市……AW

遺跡略号

一ノ堰Ａ遺跡……INS・A　　一ノ堰Ｂ遺跡……INS・B

目　　次

序　　章 …… 1
第1節　会津農水事業関連発掘調査の推移 …… 1
第2節　昭和62年度事業の調査経過 …… 3

第1編　一ノ堰A遺跡

第1章　遺跡の位置 …… 7
第2章　遺構と遺物 …… 7

第2編　一ノ堰B遺跡

第1章　調査の経過 …… 13
第1節　遺跡の位置 …… 13
第2節　調 査 経 過 …… 14
第3節　調査の方法 …… 14
第2章　Ⅰ区の調査 …… 15
第1節　層　　序 …… 15
第2節　遺構の分布 …… 16
第3節　弥生時代の遺構と遺物 …… 17
1．竪穴住居跡 …… 17
2．土　坑　墓 …… 19
第4節　弥生時代以降の遺構と遺物 …… 208
1．遺　　構 …… 208
2．遺　　物 …… 209
第3章　Ⅱ区の調査 …… 212
第4章　小　　結 …… 213
第1節　弥生時代の遺構について …… 213
第2節　弥生土器について …… 217

写 真 図 版

挿図・表目次

〔挿　図〕

序　　章

第１図　一ノ堰Ａ・Ｂ遺跡調査の位置---------- 4

第１編　一ノ堰Ａ遺跡

第１図　遺構（近世遺跡）配置図---------- 7
第２図　遺跡の位置---------- 8
第３図　一ノ堰Ａ遺物の出土遺物----------10

第２編　一ノ堰Ｂ遺跡

第１図　遺跡の位置----------12
第２図　調査区----------13
第３図　層　序----------15
第４図　Ⅰ区全体図----------16
第５図　１号住居跡出土弥生土器----------17
第６図　１号住居跡----------18
第７図　土坑墓群全体図---------- 折り込み
第８図　１～３・41～44号土坑墓----------61
第９図　４～９号土坑墓----------62
第10図　10～14・16号土坑墓----------63
第11図　17～23号土坑墓----------64
第12図　15・24～27・65号土坑墓----------65
第13図　28～34・36号土坑墓----------66
第14図　35・37～40号土坑墓----------67
第15図　45～47，103～105号土坑墓----------68
第16図　48～51・81号土坑墓，113号土坑 ----------69
第17図　52～56号土坑墓----------70
第18図　57～61・80号土坑墓----------71
第19図　62～64・66・67・69号土坑墓----------72
第20図　68・70～73・75号土坑墓----------73
第21図　74・76～79・99号土坑墓----------74
第22図　82～87・107号土坑墓 ----------75
第23図　88～92・100号土坑墓 ----------76
第24図　94～98・101号土坑墓 ----------77
第25図　102・106・108・109・111・112号土坑墓 -------78
第26図　114～119号土坑----------79
第27図　杭列・溝跡----------80
第28図　弥生土器実測図(1)---------- 折り込み
第29図　弥生土器実測図(2)---------- 折り込み
第30図　弥生土器実測図(3)---------- 折り込み
第31図　弥生土器実測図(4)---------- 折り込み
第32図　弥生土器実測図(5)----------81
第33図　弥生土器実測図(6)----------82
第34図　弥生土器実測図(7)----------83
第35図　弥生土器実測図(8)----------84
第36図　弥生土器実測図(9)----------85
第37図　弥生土器実測図(10)----------86
第38図　弥生土器実測図(11)----------87
第39図　弥生土器実測図(12)----------88
第40図　弥生土器実測図(13)----------89
第41図　弥生土器実測図(14)----------90
第42図　弥生土器実測図(15)----------91
第43図　弥生土器実測図(16)----------92
第44図　弥生土器実測図(17)----------93
第45図　弥生土器実測図(18)----------94
第46図　弥生土器実測図(19)----------95
第47図　弥生土器実測図(20)----------96
第48図　弥生土器実測図(21)----------97
第49図　弥生土器実測図(22)----------98
第50図　弥生土器実測図(23)----------99
第51図　弥生土器実測図(24)---------- 100
第52図　弥生土器実測図(25)---------- 101
第53図　弥生土器実測図(26)---------- 102
第54図　弥生土器実測図(27)---------- 103
第55図　弥生土器実測図(28)---------- 104
第56図　弥生土器実測図(29)---------- 105
第57図　弥生土器実測図(30)---------- 106
第58図　弥生土器実測図(31)---------- 107
第59図　弥生土器実測図(32)---------- 108
第60図　弥生土器実測図(33)---------- 109
第61図　弥生土器実測図(34)---------- 110
第62図　弥生土器実測図(35)---------- 111
第63図　弥生土器実測図(36)---------- 112
第64図　弥生土器実測図(37)---------- 113
第65図　弥生土器実測図(38)---------- 114
第66図　弥生土器実測図(39)---------- 115
第67図　１号土坑墓出土の弥生土器（壺）---------- 116
第68図　１号土坑墓出土の弥生土器（壺）---------- 117
第69図　１号土坑墓出土の弥生土器（壺）---------- 118
第70図　１号土坑墓出土の弥生土器（壺）---------- 119

第71図　1号土坑墓出土の弥生土器(壺)---------120
第72図　1号土坑墓出土の弥生土器(壺・鉢・甕・蓋)---121
第73図　2号土坑墓出土の弥生土器(壺)---------122
第74図　1・2・3号土坑墓上面出土の弥生土器-----123
第75図　1・2・3号土坑墓上面出土の弥生土器-----124
第76図　3・4・5号土坑墓出土の弥生土器----125
第77図　5・7号土坑墓出土の弥生土器---------126
第78図　7・9・10号土坑墓出土の弥生土器-------127
第79図　10・12・13号土坑墓出土の弥生土器----128
第80図　13・14号土坑墓出土の弥生土器---------129
第81図　14号土坑墓出土の弥生土器----------130
第82図　15号土坑墓出土の弥生土器----------131
第83図　16号土坑墓出土の弥生土器(1)----------132
第84図　16号土坑墓出土の弥生土器(2)----------133
第85図　16号土坑墓出土の弥生土器(3)----------134
第86図　16号土坑墓出土の弥生土器(4)----------135
第87図　17・18号土坑墓出土の弥生土器---------136
第88図　18・19号土坑墓出土の弥生土器---------137
第89図　20・21・22・23・24号土坑墓出土の弥生土器----138
第90図　27・28・29号土坑墓出土の弥生土器----139
第91図　30号土坑墓出土の弥生土器----------140
第92図　31・32号土坑墓出土の弥生土器---------141
第93図　32号土坑墓出土の弥生土器----------142
第94図　34号土坑墓出土の弥生土器----------143
第95図　35号土坑墓出土の弥生土器----------144
第96図　36・37号土坑墓出土の弥生土器---------145
第97図　38・39号土坑墓出土の弥生土器---------146
第98図　39・40号土坑墓出土の弥生土器---------147
第99図　45・46号土坑墓出土の弥生土器---------148
第100図　47号土坑墓出土の弥生土器----------149
第101図　48・49号土坑墓出土の弥生土器---------150
第102図　50号土坑墓出土の弥生土器----------151
第103図　51・52号土坑墓出土の弥生土器---------152
第104図　53・54号土坑墓出土の弥生土器---------153
第105図　55・56号土坑墓出土の弥生土器---------154
第106図　57号土坑墓出土の弥生土器----------155
第107図　58・59号土坑墓出土の弥生土器---------156
第108図　60号土坑墓出土の弥生土器----------157
第109図　61号土坑墓出土の弥生土器----------158
第110図　62号土坑墓出土の弥生土器----------159
第111図　63号土坑墓出土の弥生土器----------160
第112図　64・66号土坑墓出土の弥生土器---------161
第113図　66・67号土坑墓出土の弥生土器---------162
第114図　68・69号土坑墓出土の弥生土器---------163
第115図　70号土坑墓出土の弥生土器----------164
第116図　71号土坑墓出土の弥生土器----------165
第117図　72・73号土坑墓出土の弥生土器---------166
第118図　73号土坑墓出土の弥生土器----------167
第119図　74号土坑墓出土の弥生土器----------168
第120図　75・76号土坑墓出土の弥生土器---------169
第121図　76号土坑墓出土の弥生土器----------170
第122図　77号土坑墓出土の弥生土器----------171
第123図　78号土坑墓出土の弥生土器----------172
第124図　79号土坑墓出土の弥生土器----------173
第125図　80号土坑墓出土の弥生土器----------174
第126図　82・83号土坑墓出土の弥生土器---------175
第127図　83号土坑墓出土の弥生土器----------176
第128図　84号土坑墓出土の弥生土器----------177
第129図　85号土坑墓出土の弥生土器----------178
第130図　86・87号土坑墓出土の弥生土器---------179
第131図　88号土坑墓出土の弥生土器----------180
第132図　89号土坑墓出土の弥生土器(1)----------181
第133図　89号土坑墓出土の弥生土器(2)----------182
第134図　90号土坑墓出土の弥生土器----------183
第135図　91・92号土坑墓出土の弥生土器---------184
第136図　92号土坑墓出土の弥生土器----------185
第137図　93号土坑墓上面出土の弥生土器---------186
第138図　94・95号土坑墓出土の弥生土器---------187
第139図　96・97号土坑墓出土の弥生土器---------188
第140図　98・99号土坑墓出土の弥生土器---------189
第141図　100・101号土坑墓出土の弥生土器-------190
第142図　104・105・107号土坑墓出土の弥生土器-------191
第143図　110・111号土坑墓出土の弥生土器-------192
第144図　112・113号土坑墓出土の弥生土器-------193
第145図　61号土坑墓上面出土の弥生土器(1)-------194
第146図　61号土坑墓上面出土の弥生土器(2)-------195
第147図　62・63号土坑墓上面出土の弥生土器(1)-----196
第148図　62・63号土坑墓上面出土の弥生土器(2)-----197
第149図　66号土坑墓上面出土の弥生土器---------198
第150図　77号土坑墓上面出土の弥生土器---------199
第151図　78号土坑墓上面出土の弥生土器---------200
第152図　95号土坑墓上面出土の弥生土器---------201
第153図　C区西半集中出土の弥生土器(1)---------202
第154図　C区西半集中出土の弥生土器(2)---------203
第155図　C区西半集中出土の弥生土器(3)---------204
第156図　C区西半集中出土の弥生土器(4)---------205
第157図　管　玉----------206
第158図　管玉・勾玉・弥生土器----------207
第159図　中近世の遺物----------211
第160図　古代・中世の遺物----------212

〔表〕

表1　国営会津農業水利事業関連遺跡発掘調査の一覧--------2
表1　一ノ堰B遺跡出土の弥生時代以降の遺物集計表------210

序　　章

第 1 節　会津農水事業関連発掘調査の推移

国営会津農業水利事業は，会津盆地及び周辺の地域の農業経営近代化をめざし，安定した用水確保を目的として農水省東北農政局が実施する農業水利事業である。事業内容は，会津盆地北部に位置する喜多方市を中心とする約4,645haを対象とする会津北部地区，会津若松市を中心とする盆地南部の約4,250haを対象とする会津南部地区，盆地西南部の会津高田町を中心とする約4,540haを対象とする会津宮川地区の３地区に安定した用水を確保するために，会津北部では熱塩加納村の濁川上流に日中ダム，会津地方南部の宮川上流にある会津高田町松坂地区に新宮川ダムを建設し，さらに，大川・宮川・大塩川・田付川等の関係地域の河川に頭首工を新設して，幹線用水路を新設・改修するものである。さらに，国が行うこの事業に関連して，県営事業による付帯灌漑排水事業・圃場整備事業が実施されている。事業は会津盆地の２市９町村に及び受益面積は13,435haに達する一大事業である。

県教育委員会は，当事業地域内の埋蔵文化財の保護を目的とし，昭和56年度に，ダム築造に伴う水没地域と幹線用水路建設予定地を対象として，埋蔵文化財の分布調査を実施した。調査は，財団法人福島県文化センター(事業第二部遺跡調査課)に委託し，関係市町村教育委員会の協力を得て同年５月11日～６月６日，11月24日～27日に実施した。この結果52ヵ所の遺跡の所在を確認した。

昭和56年６月，北会津村・会津坂下町に建設される富川幹線水路予定地内丶発見された一ノ坪・稲荷宮両遺跡が工事に伴い緊急に調査する必要ば生じたため，関係機関と協議すると共に，調査を福島県文化センターに委託して６月８日から同月17日までに両遺跡の発掘調査を実施した。調査は，緊急を要するため予備調査(試掘)を省略して分布調査（踏査）の結果をもとに発掘調査を実施した。また喜多方市・北塩原村に建設される八方幹線水路予定地内に発見された，喜多方市東山遺跡については，同年10月15・16日に工事中立会を行い少量の縄文土器が発見されたものの，遺跡の中心が用水路予定地より北東方向へずれていることを確認した。

昭和57年度は，『国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告書Ⅰ』(福島県文化財調査報告書第111集)で詳報したように会津高田町下堀際遺跡の調査を実施している。下堀際遺跡は，高橋右岸幹線用水路建設予定地内で発見されたもので，発掘調査は，国庫補助金及び県費と東北農政局の負担金をうけ，調査を財団法人福島県文化センター(事業第二部遺跡調査課)に委託した。調査は，同年５月17日から６月24日まで実施され，弥生式土器，平安時代の集落跡，近世陶磁器等が検出

され，会津地方の古代集落の貴重な資料を数多く摘出した。昭和57年度には，当初下堀際遺跡の調査と，新宮川ダム水没予定地内にある北ノ前遺跡の発掘調査を実施する予定であったが，北ノ前遺跡については地権者との交渉が難行したため調査はできなかった。

昭和58年度は，57年度実施できなかった北ノ前遺跡を含め，新宮川ダム水没地域内の５遺跡の予備調査と，北ノ前遺跡，下谷ヶ地平Ａ遺跡(一部)の発掘調査を実施し，『国営会津農業水利事事業関連遺跡調査報告書Ⅱ』(福島県文化財調査報告書第135集)として結果を報告した。

昭和59年度の調査は，新宮川ダム水没地域内の道上遺跡と前年度一部調査を実施した下谷ヶ地平Ａ遺跡と,下谷ヶ地平Ｃ遺跡の予備調査を行い『国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告書Ⅲ』(福島県文化財調査報告書第149集)として報告した。

昭和60年度の調査は，新宮川ダム水没地域内の腰巻遺跡，下谷ヶ地平Ｂ・Ｃ遺跡の調査を実施した。当初予定では，下谷ヶ地平Ｂ遺跡の一部と下谷ヶ地平Ｃ遺跡の調査が昭和60年度の事業であったが，下谷ヶ地平Ｂ遺跡が，予備調査によって本調査が必要とされた地区から全く遺構が検出されず，遺物も下谷ヶ地平Ｃ遺跡寄りで若干出土しただけで，調査期間が極端に早まったため腰巻遺跡の調査も実施した。下谷ヶ地平Ｃ遺跡の調査では，晩期終末の集落が検出され，また編年的にも基準となる一括資料の出土があった。これらについては『国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告Ⅳ』(福島県文化財調査報告第164集)として報告した。この３遺跡の調査により，会津高田町松坂地区内に建設される新宮川ダム水没地域内の遺跡については全て調査終了した。

昭和61年度は，会津若松市に建設される門田幹線用水路に係る清水上遺跡，新鶴村に建設される佐賀瀬川幹線用水路に係る中江聖の宮遺跡の調査を実施した。清水上遺跡では，平安時代の建物跡，中江聖の宮遺跡では，縄文中期の集落跡が調査され，『国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告Ⅴ』(福島県文化財調査報告書第177集)として報告した。　(芳賀)

表１　国営会津農業水利事業関連遺跡発掘調査一覧

遺跡名	調査面積(㎡)	調査原因	調査年度	報告書
一ノ坪	250	富川幹線用水路に伴う調査	S56年度	Ⅲ
稲荷宮	230	同上	S56年度	Ⅲ
下堀際	1,300	高橋右岸幹線用水路建設に伴う調査	S57年度	Ⅰ
北ノ前	5,700	新宮川ダム建設に伴う調査	S57年度	Ⅱ
下谷ヶ地平Ａ	300	同上	S58年度	Ⅱ
道上	2,600	同上	S59年度	Ⅲ
下谷ヶ地平Ａ	2,200	同上	S59年度	Ⅲ
下谷ヶ地平Ｂ	3,800	同上	S60年度	Ⅳ

遺　跡　名	調査面積(㎡)	調　査　原　因	調査年度	報告書
下谷ヶ地平C	1,100	同　　上	S60年度	Ⅳ
腰　　巻	1,700	同　　上	S60年度	Ⅳ
清　水　上	1,100	門田幹線用水路建設に伴う調査	S61年度	Ⅴ
中江聖ノ宮	1,100	佐賀瀬川幹線用水路建設に伴う調査	S61年度	Ⅴ
一ノ堰A	1,900	門田幹線用水路建設に伴う調査	S62年度	Ⅵ
一ノ堰B	1,400	同　　上	S62年度	Ⅵ

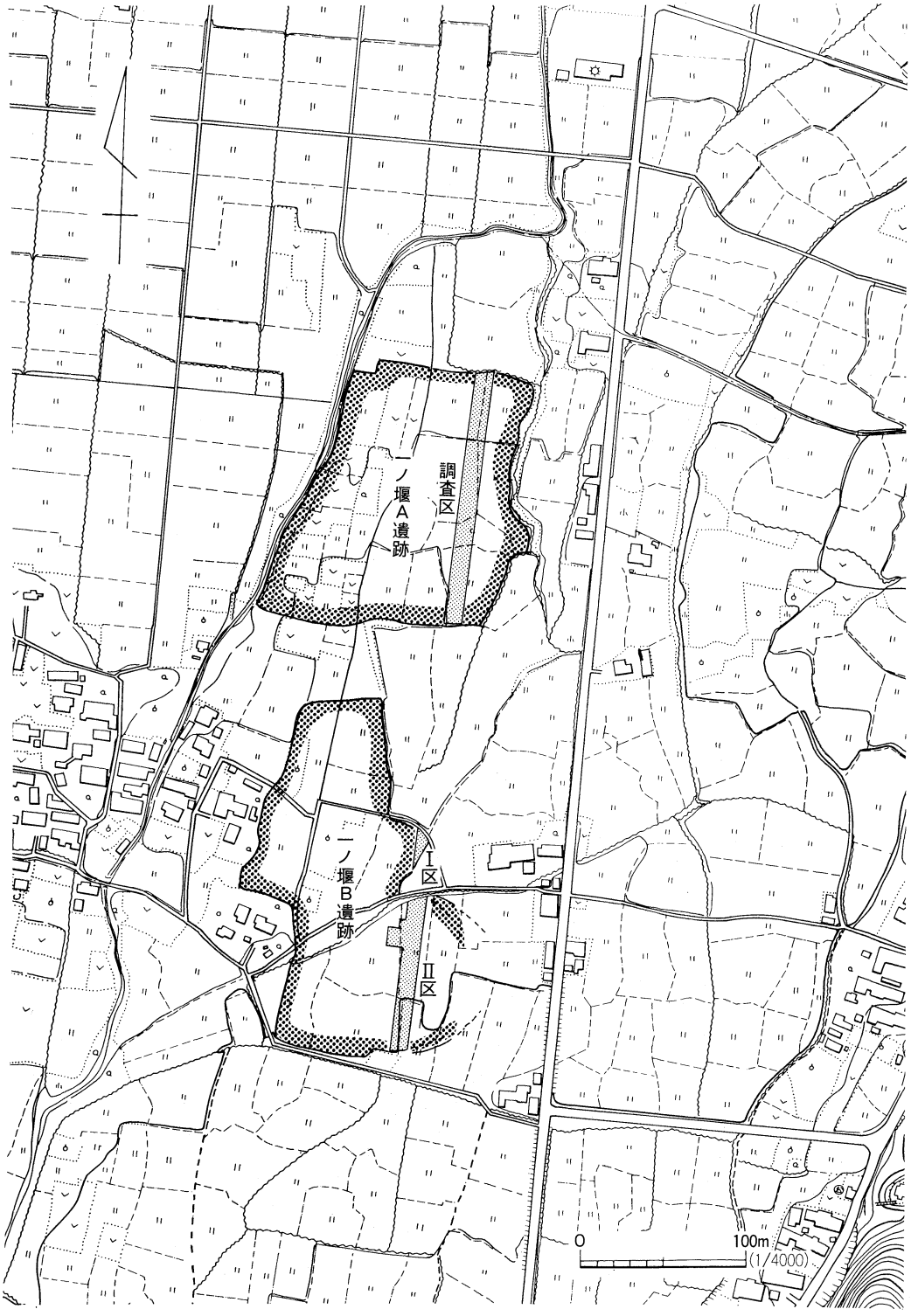
（註）　報告書の記号は　福島文化財調査報告書『国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告』の『Ⅰ』～『Ⅵ』をそれぞれ示している。

第 2 節　昭和62年度事業の調査経過

昭和62年度の調査は，会津若松市門田町地内に建設される門田幹線用水路予定地内の，一ノ堰A・B遺跡を調査実施することで進められた。当初計画では，一ノ堰A遺跡1,719㎡，一ノ堰B遺跡281㎡の合わせて2,000㎡を調査するものであった。まず5月18日より一ノ堰A遺跡の調査に着手した。水田下の調査であり，田植の時期とも重なり，たびたび出水に悩まされ，また水田下の調査ということで，畑地や台地上での調査と違って遺構確認作業に手間取りはしたが，目立った遺構・遺物の検出もなく，予定を早めて6月19日で調査を終了した。

一ノ堰B遺跡については，2ヵ所に調査区が分かれており，それぞれⅠ区，Ⅱ区とした。一ノ堰A遺跡の調査日程後半から作業員を一部Ⅱ区に移して調査を進めた。6月10日になり，Ⅰ区の北側の水路建設予定地内の耕した水田上に多くの弥生土器の散布がみられ，関係機関と協議の上，新たにこの地区も調査対象として表土剝ぎを実施した。Ⅱ区では，ほとんど遺物の出土も認められず，6月26日で調査を終了した。Ⅰ区は，6月29日より本格的な調査を実施したが，北半部で弥生中期の東日本でも有数の土坑墓群が発見され，この地区を重点的に調査することになった。土坑墓群は狭い範囲から検出され，しかも土器を覆土中に多く含んでいる特殊性から，困難を極め，7月中旬から8月下旬までは，ほとんど平常の勤務時間を大幅に越えて，朝早くから日没まで調査を実施した。8月中旬からは，調査区周囲を大型重機が動きまわるという騒然とした中で調査を進め，9月11日に予定された地区の調査を全て終了した。

調査終了後，出土遺物・図面等を㈶福島県文化センターに持ち帰り整理作業を進めた。弥生土器は一時期の量としては東日本有数のものであり，その後の作業の進行が今まで以上に厳しいものであったが，昭和62年度末に全ての事業を終了した。　（芳賀）



第1図　一ノ堰A・B遺跡調査地区の位置

第1編　一ノ堰（いちのせき）Ａ遺跡

遺跡記号	ＡＷ－ＩＮＳ・Ａ
所在地	会津若松市門田町面川字根岸
時代・種別	縄文～近世－散布地
調査期間	昭和61年５月18日～６月19日
調査員	石本　弘　　芳賀英一
協力機関	会津若松市教育委員会

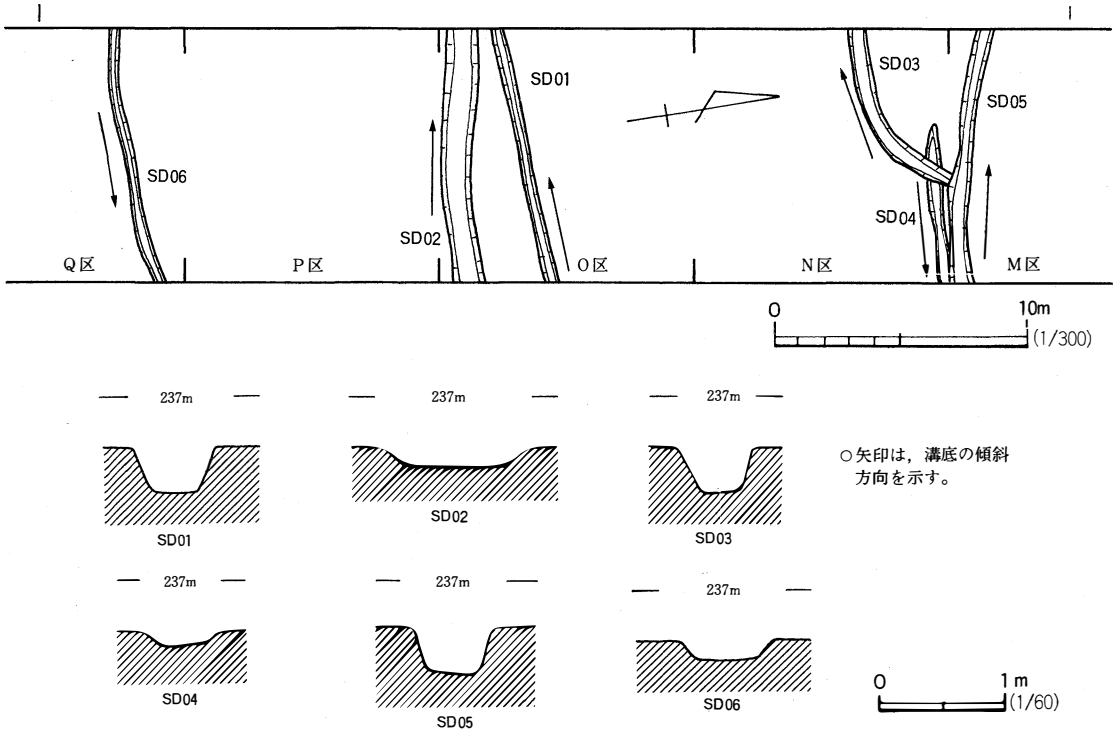
第１章　遺跡の位置

一ノ堰Ｂ遺跡は，会津若松市門田町面川字根岸に所在する。遺跡は，昭和56年度に福島県教育委員会が実施した国営会津農業水利事業(門田幹線用水路建設)の分布調査によって発見，登録された。発見の際に字名を誤認したため根岸という地名を遺跡名とすることができなかった。当初遺跡の散布する地区は，今回調査地区の西北側の狭い範囲であったが，昭和60年度に再踏査を行い，今回調査地区まで範囲が広がっていることを確認した。

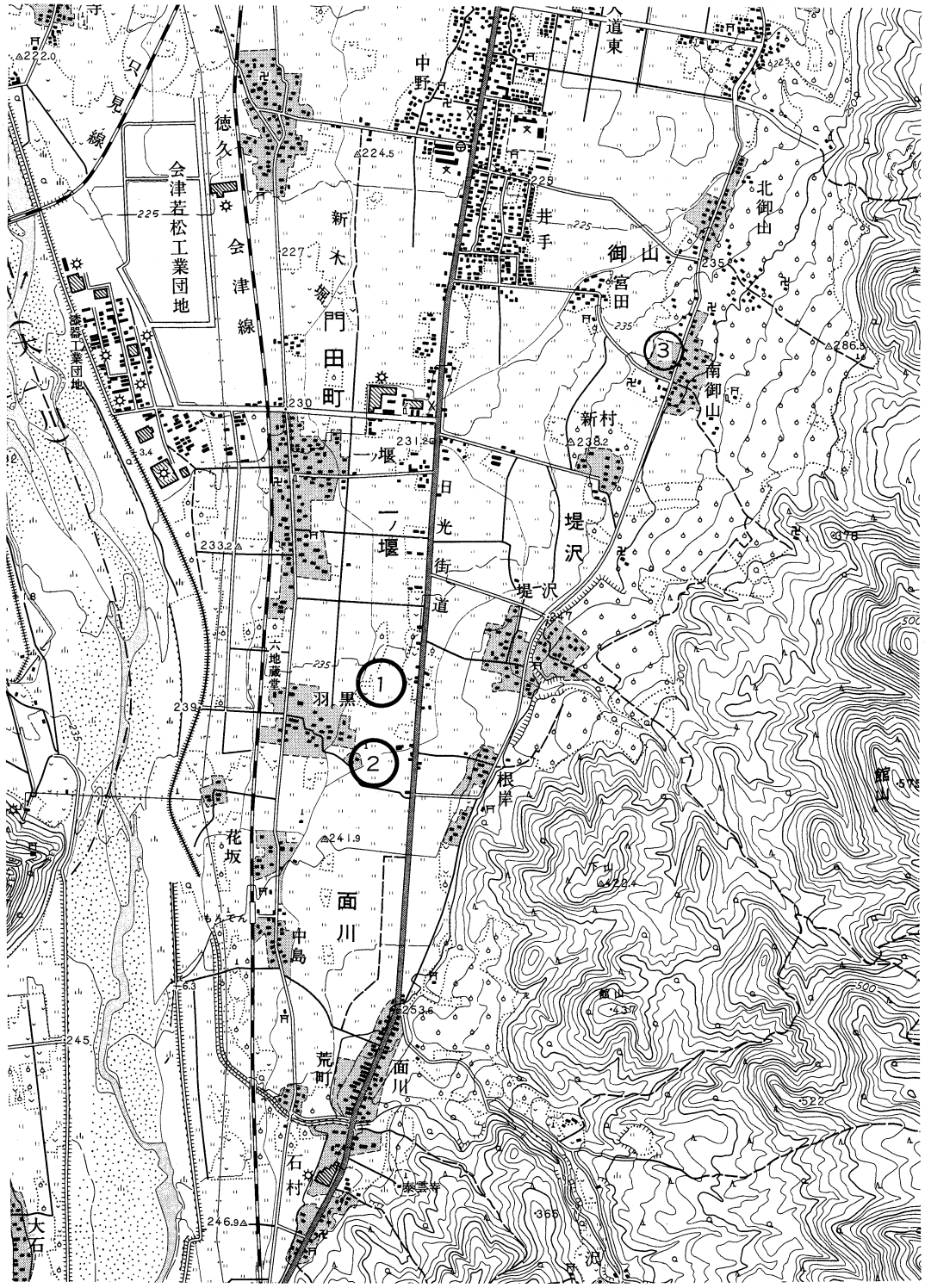
遺跡は，大川(阿賀川)の東岸に形成された氾濫原上にあり，ほぼ平坦な地形を呈し，現在は水田として利用されている。

第２章　遺構と遺物

発掘調査調査面積は，水路工事幅の10ｍ，広さ約1,900㎡であった。表土の水田耕作土が約30㎝ほど堆積し，その下位の黒褐色土層中に縄文～近世の遺物が散布し，また遺構確認面となってい



第１図　遺構(近世構跡)配置図



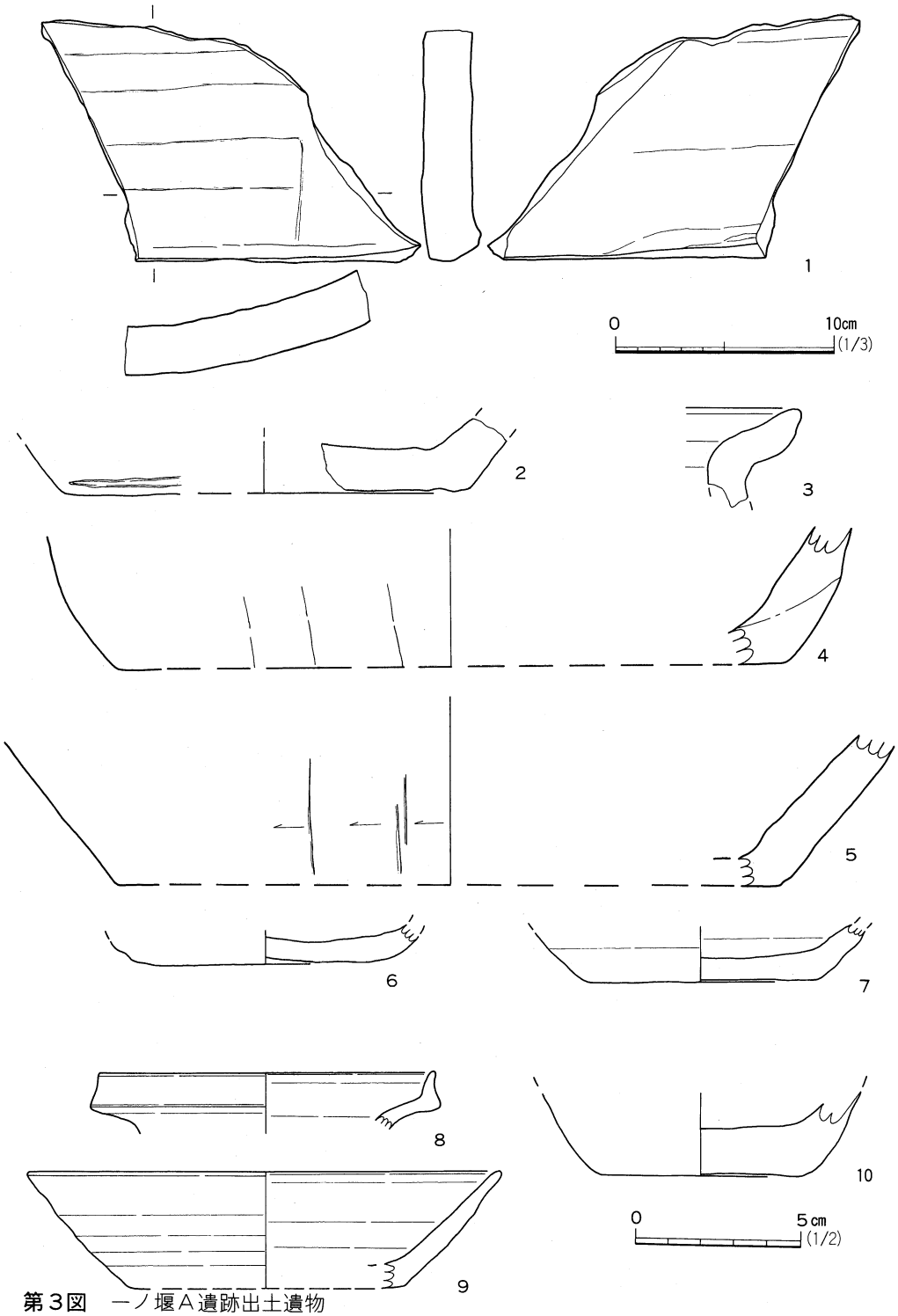
第２図　一ノ堰Ａ遺跡の位置（１．一ノ堰Ａ遺跡　２．一ノ堰Ｂ遺跡　３．南御山遺跡）〔1/2.5万　若松使用〕

る。調査は，北端部から10×10ｍ四方のグリッドを設定し，それぞれＡ区～Ｓ区として実施した。遺物は散発ながら各区から出土したが，調査区南半の方が多く，北半では極めて少ない。遺構は，Ｍ区からＱ区にかけて近世と思われる溝跡が６条発見された。溝跡は，LⅡ上面で検出されたが，各溝とも遺物が少なく時期を確定できないが，近世の陶器が一部の溝から出土しており，また明治17年の地籍図上にこれらの溝が記載されておらず，明治初期以前のものと考えてよかろう。溝は，現在の水田区画線と約20～30°ほどずれており，また溝底をもとにした水の流れの方向も現在のものと逆方向のもの（１～３，５号溝）が認められ，現在の水田区画から古代の条里跡があると判断されているこの地域の今後の調査に，大きな問題を提起するものと考えられよう。

出土遺物はほとんどLⅡ層の出土である。近世のものは細片であり図化できなかったが，在地産のものと推定される。中世のものとしては瓷器系陶器の片口鉢・甕・壺・皿・平瓦が出土している。片口鉢(2)は底部片でロクロナデ調整され，内面は使用のため摩滅している。体部下端に紐状の圧痕があり，製作に関わる痕跡と考える。甕・壺（４・５）は外面ヘラケズリ，内面は横方向の荒いナデ調整がなされている。口縁部は内外面ロクロナデ調整が丁寧になされている。Ｌ字形の未発達な口縁部形態の特徴(3)等から13世紀前半と推定される。皿(6)は底部片で判然としないが，ナデ調整が観察される。平瓦(1)は凹，凸両面ヘラケズリ調整したもので，外面は褐色を呈し，断面は青灰色を呈し，肥厚であり，胎土・焼成とも前述の陶器と通有であることから中世の可能性を指摘したい。いずれも胎土から大戸窯の製品と推定される。他に土師質土器皿(6)の底部片が出土しているが，ロクロ調整で底部回転糸切りである。丸味を持つ立ち上がりで底部の切り残しが少ないなどの特徴から喜多方市新宮城跡例に類似し，13世紀の年代が推定される。

古代のものとしては須恵器が多く，甕，坏，瓶が出土している。坏(9)は直線的な体部で，ロクロ調整されている。瓶(8)は口縁部破片であるが，ロクロ調整されＬ字形に屈曲した口縁部形態である。いずれも大戸窯の製品と推定される。坏はＭ25窯例より先行的である。また瓶はＭ19窯例より後出的である。土師器として図化できたのは１点(10)で，摩滅が著しく，調整は不明である。また小破片ながら縄文後期前半の資料も散見された。

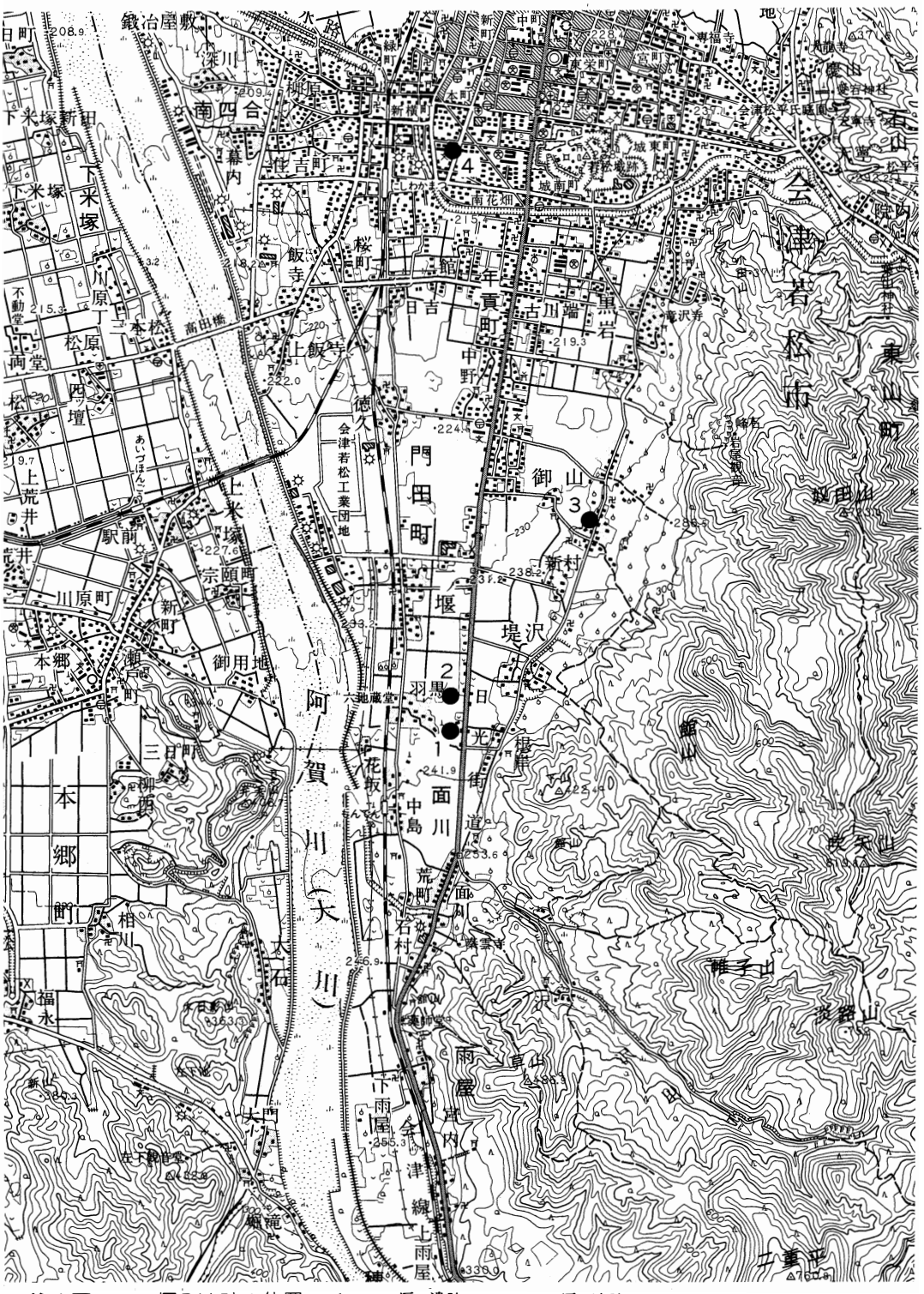
以上の出土遺物の様相から，近世・中世・古代において，本遺跡の周辺が集落として利用された可能性が推定される。特に中世では，13世紀前半と推定される大戸窯の製品等から，周辺に該期の村落が存在しただろう。また，古代においても９～10世紀の大戸窯と推定される須恵器の出土から，周辺に該期の集落があることが指摘できる。また，古代・中世を通して本地域が大戸窯と密接な関係をもっていたことも指摘できる。今後の本遺跡周辺の調査によって，こうした推測を明らかにできるものと考える。　（飯村・芳賀）



第３図　一ノ堰Ａ遺跡出土遺物

第2編　一ノ堰（いちのせき）Ｂ遺跡

遺跡記号	ＡＷ－ＩＮＳ・Ｂ
所在地	会津若松市門田町面川字根岸
時代	弥生時代，平安時代 鎌倉時代，江戸時代
調査期間	昭和62年６月８日～９月11日
調査員	芳賀英一　　小林雄一 丹野隆明
協力機関	会津若松市教育委員会



第１図　一ノ堰Ｂ遺跡の位置・（１．一ノ堰Ｂ遺跡　２．一ノ堰Ａ遺跡　３．南御山遺跡　４．川原町口遺跡）〔1/5万 若松使用〕

第１章　調査の経過

第１節　遺跡の位置

一ノ堰Ｂ遺跡は，会津若松市門田町面川字根岸に所在する。昭和56年度の国営会津農水事業に関連する遺跡分布調査によって発見されている。昭和60年度に一部再度踏査をし，今回調査地区までの表面での遺跡範囲が把握されている。分布調査の際には，今回調査地区の北東の住宅地区の周辺に集中して弥生時代から中世にかけての遺物が散布していることが判明している。さらに遺跡の多くは現在水田となっているが，水田の用水路や畔のところに遺物の散布が認められる。今回調査した部分は，大川（阿賀川）の東岸に形成された低位河岸段丘の端部で，北西に氾濫原が広がっている。調査地区の平均標高は，約239ｍである。

遺跡の東側には，国道121号線が南北に走り，その東側には，吹矢山，奴田山などの山々から発する小河川によって形成された扇状地や，大川によって形成された河岸段丘がみられ，その端部に根岸・堤沢などの集落が形成されている。付近には，北東２㎞のところに学史的にも著名な南御山遺跡，北方4.4㎞のところには，川原町口遺跡，さらにその北側には二ツ釜遺跡などの本遺跡と関係する弥生時代の遺跡が分布している。（芳賀）

第２図　調査区

第２節　調査経過

一ノ堰Ｂ遺跡の発掘調査は，Ⅱ区を６月８日～６月26日，Ⅰ区を６月29～９月11日の日程で実施した。一ノ堰Ｂ遺跡の調査後半から作業員の一部をⅡ区に移して調査を実施したが，散発的に，古代，中世の遺物が出土する程度であり，６月26日で全ての調査を終了した。Ⅰ区については当初，今回調査したＧ区により以南が調査対象区であったが，６月10日になり，この地区の北側で弥生土器の散布がみられ，急遽関係機関と協議の上，新たに調査区域に組み入れられ，６月29日より調査を実施することになった。調査区北半部では，水田耕作土直下より，多量の弥生土器の出土があり，精力的に調査を進めるうち，この遺物集中地区が，弥生中期の土坑墓群であることが判明した。７月中旬からは，土坑墓群の調査に精力を傾けた。土坑墓が狭い面積の部分に集中しており，また実測，掘り込み等高い精度の要求される内容であったため，調査にあたっている職員の仕事量が，一般の調査に比べて甚だ多く，夕方作業員を帰宅させた後も，夕暮まで調査を進めたり，盆の休日も返上して調査を進めるなど，悪条件の中ではあったが，８月下旬には大方の掘り込みを終了し，その後，実測作業を進め，９月11日で全ての現地での調査を終了した。なお，８月１日には，現地説明会を実施し，多くの研究者，市民の見学があった。　（芳賀）

第３節　調査の方法

発掘調査は，調査範囲が水路工事部分の幅10ｍに限定されていたため，北端部から10×10ｍ１単位のグリッドを設定して行った。グリッドの軸線はN11°Wである。グリッドは北からＡ区Ｂ区Ｃ区……水路が屈曲する部分の拡張部をＸ，Ｙ区と呼称した。また10×10ｍの１グリッド内に北西端を基点として，１ｍごとに東へE_0，E_1，E_2……，南へS_0，S_1，S_2……と各ラインを呼び，遺構実測の際に活用した。本遺跡は，試掘調査を行っておらず，そのため表土除去の前に各所に坪掘りを実施してから重機による表土（無遺物）の除去を実施した。住居跡の調査にあたっては，４分割法で実施し，土坑墓・土坑については，２分割法で調査した。土坑墓は，上面で遺物分布を実測し，さらに掘り込みながら土器の出土状況を図面化し，最後に完掘後に平面・断面形の実測を実施した。土坑墓の図面は，1/10で図化した。土坑内の堆積土については玉類・骨等の微細な遺物が含まれているものと判断されたため，全て，篩にかけた。土坑内出土土器については，完形品以外でも当初番号をつけて取り上げを行ったが，煩雑さから途中からは割愛した。写真は，35㎜フィルムのモノクロ・カラーリバーサルで同一アングル同一コマ数を撮影し，一部ブローニー判のフィルムを用いて撮影している。　（芳賀）

第２章　Ⅰ区の調査

第１節　層　　序

本遺跡の基本土層は，段丘礫層までのⅥ層である。各土層について以下説明を加える。

LⅠ……表土，耕作土である。黒褐色のシルト層である。Ⅰa，Ⅰbに細別され，Ⅰaは，現在，農耕機械によって耕されている部分である。約15cm堆積している。Ⅰb層は，水田の床土を形成しているもので，黒褐色のシルト層であるが鉄分を多量に含む。

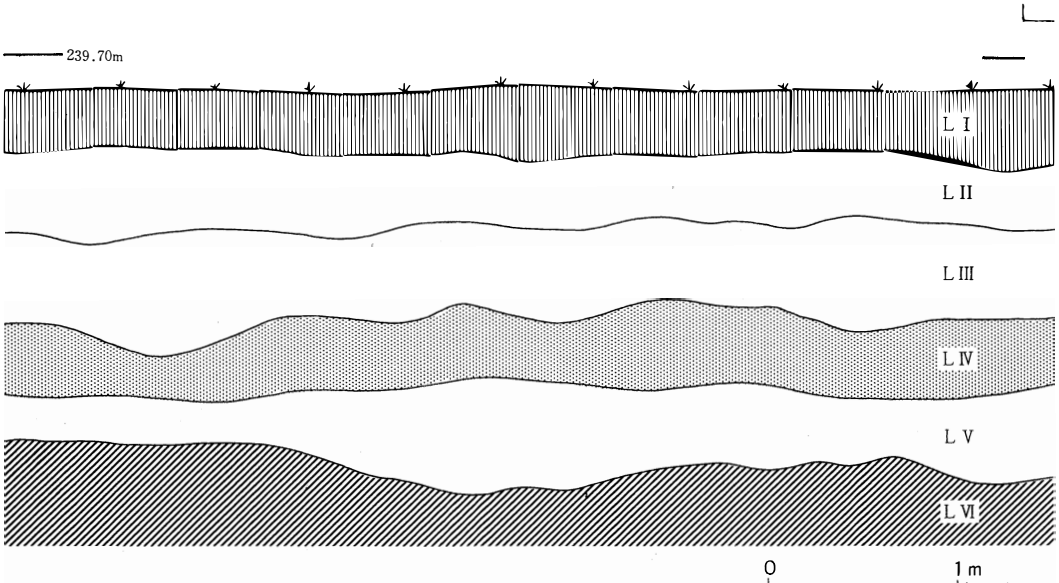
LⅡ……黒褐色のシルト層である。パミス粒をわずかに含み粘性強い。この上面が弥生中期の土坑墓群の検出面となる。

LⅢ……茶褐色土層で，パミスを多量に含む。LⅡ下部からは縄文中期の資料が若干検出されており，これから判断すると，沼沢火山を供給源とする沼沢パミスと思われる。

LⅣ……暗茶褐色のシルト層である。この層以下では遺物の検出はなかった。

LⅠ……黄褐色シルト層，小礫が混入している。

LⅥ……段丘礫層である。人頭大やこぶし大の礫がまじり，上層部では砂と礫が交互に入りまじっている。LⅣは，南へ行くにしたがい,表土からの深さが浅くなり,１号住居跡では，床面で段丘礫層が露出していた。　　（芳賀）

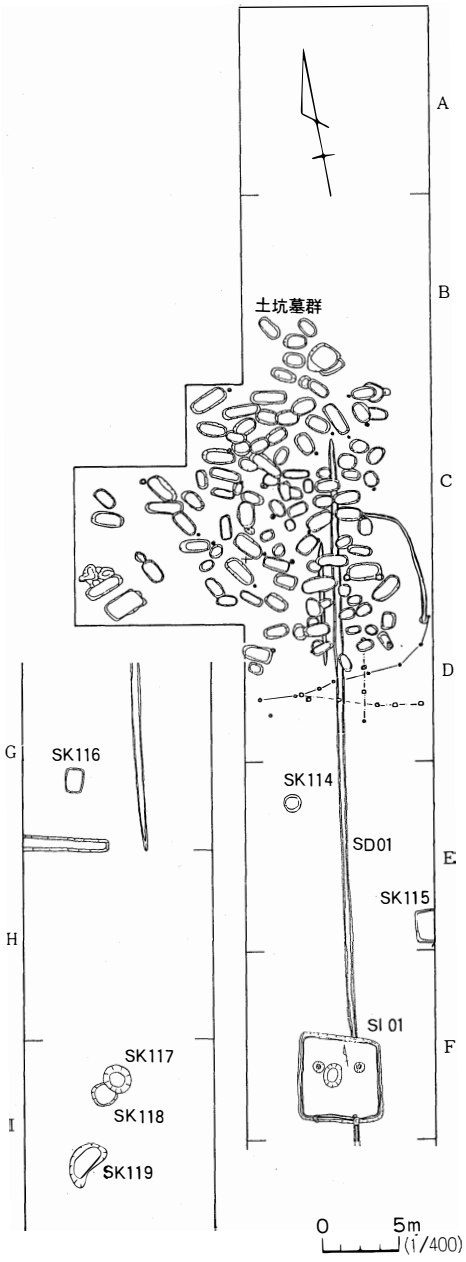


第３図　層　序

第２節　遺構の分布

本遺跡Ⅰ区で検出された遺構は，住居跡１棟，土坑墓112基，土坑７基，溝４条である。住居跡・土坑墓が弥生時代中期である他は，中～近世の遺構と考えられる。

土坑墓群は，Ｂ～Ｄ区，Ｘ，Ｙ区の約20ｍ四方の範囲に形成されている。土坑墓群の東南・北の未端については，今回の調査によっておさえられたが，西側の部分については，工区外まで遺構が広がっており不明である。工事に対処するため，西側の部分にサブトレンチを設定して，耕作土下の遺物・遺構の有無を確認しているが，その結果調査区西端から約５ｍ西側まで遺物の散布が認められた点を付記しておく。土坑墓群が形成されている地区は，河岸段丘の末端部であり，土坑墓群の北端から，約15ｍで段丘崖線となる。東側の部分では，地形的に東へ行くにしたがい低くなる傾向があり，工区外へのサブトレンチによる調査でも，LⅡ上面が下がっていく傾向が認められる。土坑墓群は，大川の氾濫原に突出した部分に形成されているものと判断される。住居跡は，土坑墓群の南へ約17ｍ離れたところで検出されている。中近世の土坑は，一部113，114号土坑のように土坑墓群に隣接しているものもあるが，調査区中央から南半にかけて散発的に発見されている。遺物は，ほとんどが，土坑墓群付近から発見され，それ以外に散布の個所を発見することはできなかった。　（芳賀）



第４図　Ⅰ区全体図

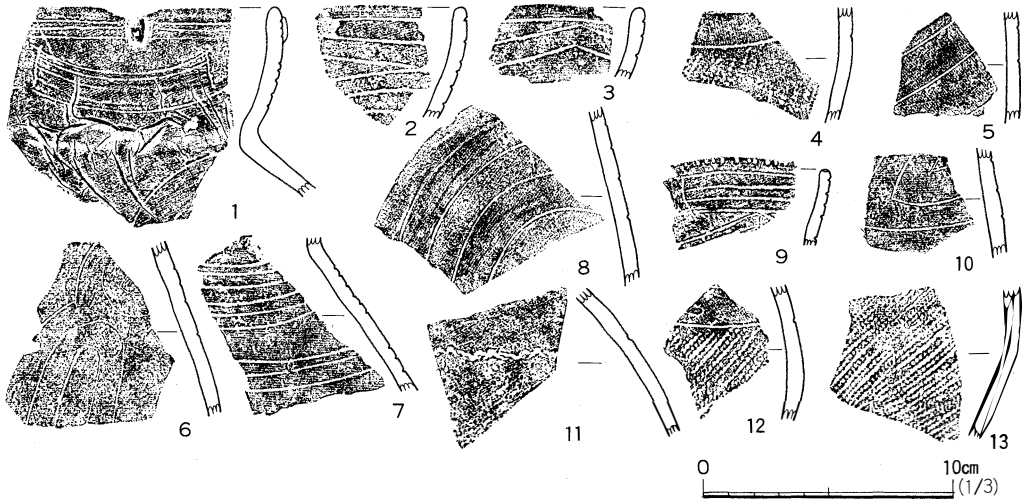
第３節　弥生時代の遺構と遺物

１．竪穴住居跡

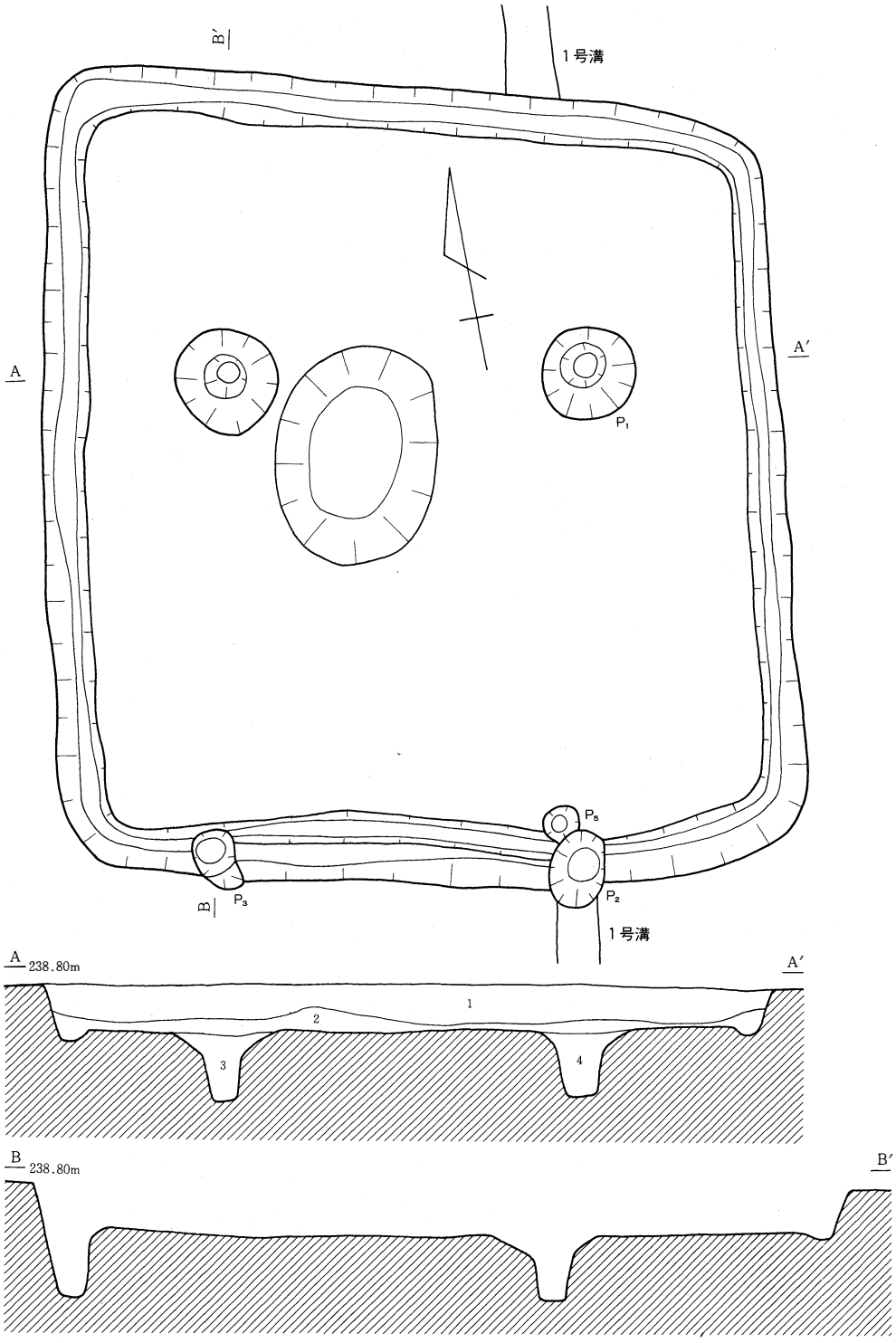
１号住居跡　（第６図）

Ｆ区ほぼ中央部に検出された弥生時代の竪穴住居跡である。平面形は方形で，南辺4.35ｍ，東辺4.35ｍ，北辺4.20ｍ，西辺4.65ｍを測る。西辺が他に比べて長い特色がある。住居跡の東部上層に近世と考えられる１号溝がある。遺構検出面は，水田耕作土直下であり，確認面から床面までの深さは，25～30㎝ほどである。床面の各所には，礫が露出している部分が各所に認められる。この礫は，断ち割りによって断丘礫層が露出しているものと判断された。中央やや西寄りには，1.25×0.90ｍの楕円形を呈する深さ３～５㎝ほどのくぼみの部分が認められた。炭化物が多く混入しており炉跡と考えられるが，焼土の堆積は観察されなかった。柱穴は，５ヵ所検出されたが，P_5は他の４ヵ所と比べて浅く，主柱穴４本の住居跡と考えられる。柱穴の配置をみてみると住居跡の南側に片寄する傾向があり，P_2，P_3は南壁に接していて特色ある柱穴位置を示している。各壁側には，周溝がめぐっている。

住居跡からの出土遺物は，全てℓ2からで，弥生土器が32点出土している。このうち73号土坑墓と出土したものは，住居跡南東隅の床面から出土したもので第73図に示した。第５図に示したものは１号住居跡出土の弥生土器で，９が鉢口縁部の他は壺の破片である。１～３の口縁部には沈線による連弧文が施文され，交互に区画内を磨いている。壺の体部には渦文が施文されている。弥生土器は全て二ツ釜式土器であり，住居跡もこの時期と考えられる。　（芳賀）



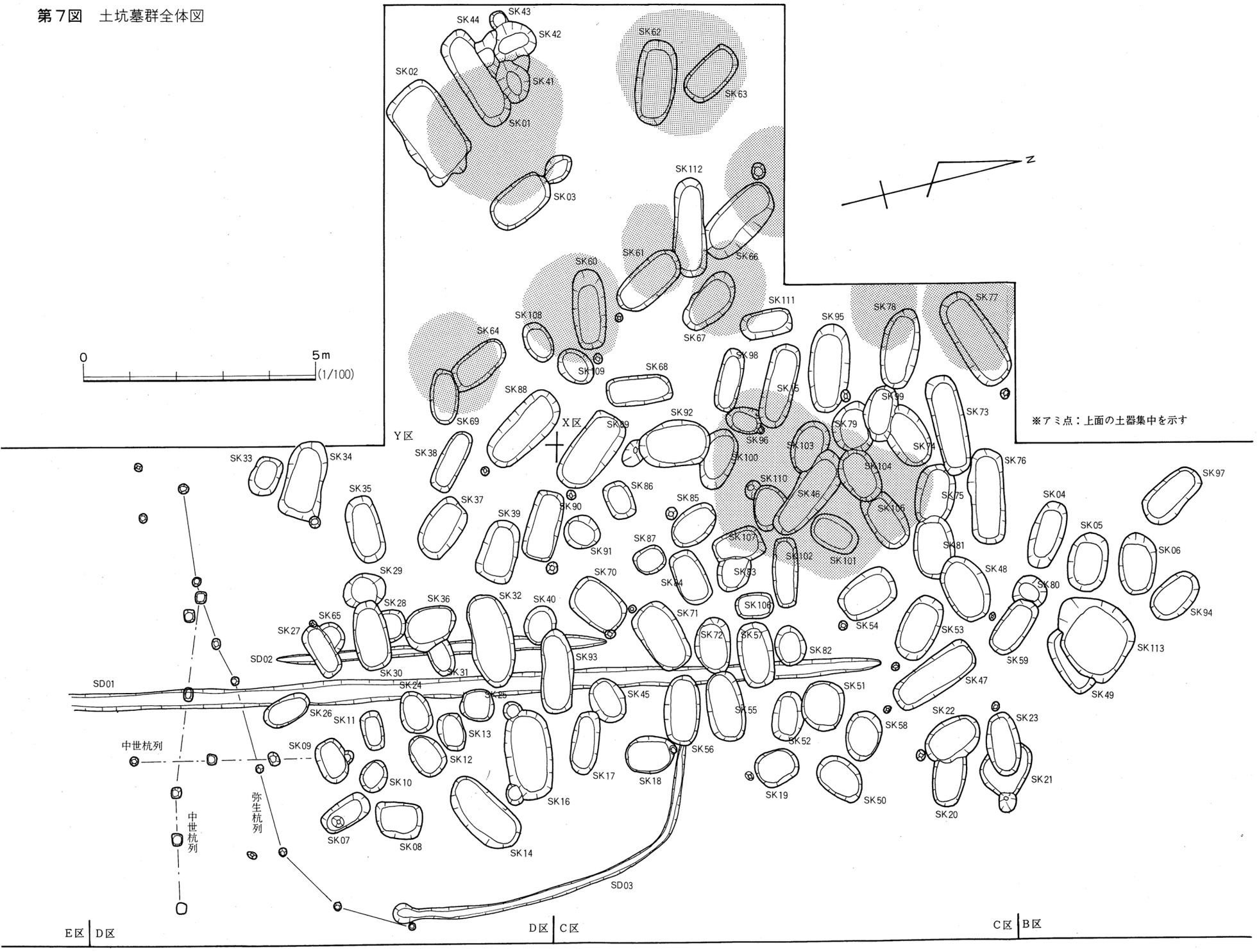
第５図　１号住居跡出土の弥生土器



第６図　１号住居跡

0　1m (1/40)

第７図　土坑墓群全体図


0
5m
(1/100)
N
※アミ点：上面の土器集中を示す
X区
Y区
SK01
SK02
SK03
SK04
SK05
SK06
SK07
SK08
SK09
SK10
SK11
SK12
SK13
SK14
SK16
SK17
SK18
SK19
SK20
SK21
SK22
SK23
SK24
SK25
SK26
SK27
SK28
SK29
SK30
SK31
SK32
SK33
SK34
SK35
SK36
SK37
SK38
SK39
SK40
SK41
SK42
SK43
SK44
SK45
SK46
SK47
SK48
SK49
SK50
SK51
SK52
SK53
SK54
SK55
SK56
SK57
SK58
SK59
SK60
SK61
SK62
SK63
SK64
SK65
SK66
SK67
SK68
SK69
SK70
SK71
SK72
SK73
SK74
SK75
SK76
SK77
SK78
SK79
SK80
SK81
SK82
SK83
SK84
SK85
SK86
SK87
SK88
SK89
SK90
SK91
SK92
SK93
SK94
SK95
SK96
SK97
SK98
SK99
SK100
SK101
SK102
SK103
SK104
SK105
SK106
SK107
SK108
SK109
SK110
SK111
SK112
SK113
SD01
SD02
SD03
中世杭列
弥生杭列
中世杭列
E区
D区
D区
C区
C区
B区

２．土 坑 墓

弥生時代中期の土坑墓群は，調査区北端部のＢ～Ｄ区，Ｘ，Ｙ区に112基検出された。以下各土坑墓について説明する。

１・41～44号土坑墓（第８図，第28～第30図１～４，第67図～第72図，第157図１～65）

Ｙ区西端で，５基切り合って検出された土坑墓である。１号土坑墓は，上面が長軸2.11ｍ，短軸0.71ｍの不整長方形を呈している。確認面から床面までの深さは43㎝である。長軸は，およそ東西に延びている。床面は，長軸1.84ｍ，短軸0.57ｍの不整長方形で，東側から西側に傾斜しており、壁は緩やかに立ち上がっている。土坑基内土層は一層で，黒褐色土でパミス粒が含まれている。確認面上面は，人為的に破砕された土器によって覆われており，床面上25㎝の地点まで，非常に密集して，重なり合っていた。床面上では，中央より東側の部分で，管玉が65点，集中して検出された。41号土坑墓は，上面が長軸0.91ｍ，短軸0.61ｍの不整楕円形を呈し，南側を１号土坑墓に切られている。深さは，72㎝である。床面は長軸0.52ｍ，短軸0.30ｍの楕円形を呈し，壁が緩やかに立ち上がっている。長軸は東西に延び，ほぼ１号土坑墓と併列をなし，東側床面がやや高く傾斜している。確認面上面は，土坑墓プランを覆うように破砕された土器が検出された。土器の集中は，土坑内ではまばらになっている。42号土坑墓は，上面が長軸推定値0.96ｍ，短軸0.83ｍの不整楕円形を呈しており，南側と西側で，それぞれ43号土坑墓と44号土坑墓を切っている。深さは42㎝である。床面は長軸推定値0.67ｍ，短軸0.31ｍの不整楕円形を呈する。長軸が南東から北西に延び，北西側床面が高く傾斜している。確認面上面には，破砕された土器が，土坑墓プランを覆い隠しており，土坑墓内では床面上５㎝地点まで，非常に密集して，重なり合っている。特に南東側に集中が見られ，長頸壺の大型破片が折り重って検出されるなど，大きな破片のまとまりが見られた。床面直上からは，１号土坑墓のような管玉は検出されなかった。43号土坑墓は，上面が長軸推定値0.60ｍ，短軸0.36ｍの不整楕円形を呈している。長軸が東西に延び，東側が42号土坑墓によって切られている。深さは13㎝である。床面は長軸0.55ｍ，短軸0.32ｍの不整楕円形である。上面には破砕された土器が集中しており，床面まで土器の出土が見られた。また，壺の口縁部が，２個体横位と正位の状態で，床面上で検出された。44号土坑墓は，上面が短軸0.64ｍの不整楕円形を呈していると考えられる。長軸上南側を１号土坑墓に切られ，北端を42号土坑墓に切られている。上面は破砕された土器の集中が見られるが，土坑基内はややまばらである。深さは41㎝である。各土坑墓は，土坑墓間の切り合いと，確認面上の状況から44号土坑墓，43号土坑墓，42，41号土坑墓，１号土坑墓の順に新しくなると考えられる。第28図１～９は，長頸壺形土器である。口縁部は，連弧文による文様が施され，その連結部に瘤を有するもの（１・４・９）がある。口縁部文様帯は，５単位(4)，６単位（３・９），７単位（１・７），９単位(2)と，

奇数割りつけが多い。頸部は，横走する集合沈線により文様が施文され，その間を磨いている（１・３・６～８）。また横走する集合沈線を２本の短い弧線で３分割していたもの（２・４），２単位の相対する雷文(5)，５単位の渦文(7)を施すものもある。５と７は，沈線による区画内に１つおきに赤彩が施され，それ以外のところはミガキがかけられている。１～９の体部上半には，相対する渦文が施されているものが多い。文様帯は６単位が多く（１～３，５～７），５単位(4)，７単位(8)もある。奇数単位の施文は，８のように１単位だけ特殊な施文状態をとるものが多い。渦文を２単位一組で相対させるため，余った１単位を上下で相対させたものと考えられる。９は同じ円に孤文が上下に４段，広がるように施されている。弧文は赤彩され，その間はミガキがかけられている。長頸壺の中で，赤彩が施されていると確認できたものは，１・４・５・８・９である。これらは，口縁部文様帯により，体部上半の沈線文様において，１つおきに赤彩されているという規則性がある。また，赤彩されていない部分は，すべてミガキがかかっている。赤彩されていない２・３・６・７においても，口縁部から体部上半部までの各区画内は，交互にミガキ・ナデとなっている。体部下半は，縄文が施されており，縄文原体は直前段多条の縄文LRである。第28図10・11，第29図１～７，第30図４は，無頸壺である。口縁部は横走する沈線，連弧文が施されている。連結部は，瘤をもつもの（第28図10，第29図１・３・４・６）が多い。文様帯は，４単位（第29図１・７），５単位（第28図11），６単位（第29図２・４～６），７単位（第28図10）がある。口縁部直下の括れ部に，横走する集合沈線を施すものも見られる（第28図10・11，第29図１～３・６）。多くは，３本の平行沈線で，縦の２本の弧線で３分割されている。第29図５は，集合沈線を２組もっており，短頸様を呈している。体部上半には，相対する渦文が施されている。単位は，５単位（第28図５，第29図４・６），６単位（第28図11，第29図１・２），７単位（第29図３・５・７）である。１間隔をおいて赤彩されているものがあり，その他はミガキがかけられている。渦文と渦文の間に，Ｖ字状（第28図11，第29図２～４），三角状（第28図10，第29図１・５・７），両者の組み合わせ（第29図５）がある。体部下半は，直前段多条の縄文LRが施されている。第29図９は甕で，口縁部から頸部にかけて，集合沈線による連弧文が２段に施され，２段目の連結部に瘤が付けられている。体部はすべて縄文（直前段多条の縄文LR）が施されている。第30図１は大型の甕である。頸部付近に，３段の結節縄文が施されている。第30図２は，口端に縄文が施される。頸部から体部上半にかけて，２線の横走する集合沈線が施され，その部分にミガキがかけられている。縄文施文部と沈線部の境は，結節縄文によって区切られる。第67～72図には，１号土坑墓から出土した弥生土器を示した。第67～72図８までは，各種の壺である。壺には大きく分けて，口縁部が受口状を呈し，体部が丸みをもつ長頸・短頸の壺，第72図３～８のように，口縁「く」状に外反し，体部上半に平行沈線，あるいは結節縄文を施した広口の壺がある。第72図９～18は鉢，19～26は体部上端に結節した甕，27～30は蓋である。底部資料を観察すると，第71図９を代表す

るように，外側からの穿孔が多く観察される。

１号土坑墓の，東端部の床面からは，65点の細型の管玉が出土している。すべての管玉は，太さが２～３㎜と細く，淡緑色の碧玉質の石材を用いて作られている。穿孔は，両側から行われており，一部に欠損も観察されるが，これは埋葬に際しての人為的な打ち欠きではなく，発掘調査時の欠損と判断されるものである。床面・覆土中にベンガラ等の散布はなかった。　（丹野）

２号土坑墓　（第８図，第30図５～８，第31図，第73図）

Ｙ区南端で検出された土坑墓である。長軸1.94ｍ，短軸1.27 ｍの長方形を呈する。確認面から床面までの深さは約28㎝を測る。土坑墓内南側にピットが１個存在する。土坑墓内床直上から確認面にかけては，人為的に破壊された土器片が密集して発見された。しかしそれらは，土坑墓の中央部のみに限られている。更に土坑墓上にも，人為的に破壊された土器の散布が観察された。第30図５・７は，無頸壺の体部である。体部上半はともに，相対する渦文により施文されている。渦文は交互に，ミガキとナデが行われている。７は渦と渦の間に瘤が付いている。体部下半は直前段多条の縄文LR（３本撚り）によって施されている。これらの点は，ほとんどの渦文の土器に言えることである。８は長頸壺で，頸部上端と下端は平行沈線が横走し，その間はミガキが行われている。体部上半は相対する渦文，体部下半は直前段多条の縄文LRが施文されている。第31図１～５は，無頸壺である。１・２は口縁部に横走する１本の沈線と連弧文，体部上半に相対する渦文，体部下半に直前段多条縄文LRが施されている。２の拓本は，体部上半における粘土帯の接合した部分で，爪による刻みがある。４の体部上半は，「こ」の字と渦文の組み合わせによって構成されている。３は体部上半が相対する渦文により施文され，体部下半は直前段多条の縄文LRが施されており，渦文と縄文の間に横走する沈線が３本走り，上下を分けている。５は，口縁部に横走する１本の沈線と連弧文，体部上半は相対する渦文，体部下半は植物茎（カナムグラ）の回転を上に，直前段多条の縄文LRが施されている。この土器も，渦文と縄文の間に横走する沈線が施されている。また２・３は，渦と渦の間に「Ｖ」字状の文様を，３・５は，三角文を施文して空間を埋めている。第73図は壺の破片資料である。１～４は口縁部で，横走沈線・連弧文が施され，３は瘤が貼り付けられている。５～23は体部である。24・25は体部下半から底部で，底部は布痕を有している。　（小林）

３号土坑墓　（第８図，第32図１・２，第76図１・２）

Ｙ区の中央で発見された長軸1.30ｍ，短軸0.81ｍの隅丸方形を呈する土坑墓である。確認面から床面までの深さは40㎝を測る。長軸方向は，南東――北西である。床面は，長軸1.21ｍ，短軸0.74ｍであり，ほぼ平坦である。土坑墓南端部では，床面より約10㎝浮いたところで，中型の壺体部下半部資料が２点，底部を上にして並んで発見されている。この２点は，第32図の１・２に示した。２点の壺の下位には，大型壺の体部下半の大型破片が発見されている。土坑墓の北西に

は，深さ10㎝ほどの張り出し部が検出されている。この部分からも弥生土器の破片資料が検出されているが，別の土坑墓の可能性もある。第32図１には，体部下半の側面に外側からの穿孔がみられる。同図２の，体部上半には細かい縄文，下半部には荒い縄文と２種類の縄文が施文されており，縄文の原体は，ともに直前段多条の縄文LRである。２例とも，底部には布痕を有しており，２の上部の割れ口は，摩滅している。（丹野）

４号土坑墓　（第９図，第76図３～10）

Ｂ区南端部で検出されたもので，上面の長軸1.38ｍ，短軸0.71ｍ，確認面から床面までの深さ46㎝を測る長楕円形を呈する土坑墓である。床面は，東から西へ向って傾斜している。弥生土器は，覆土上半から若干出土しており，第76図３～10に，その一部を示した。全て壺の体部資料である。６の沈線間には，植物茎(カナムグラ)の回転施文がなされている。（芳賀）

５号土坑墓　（第９図，第76図11～32，第77図１～23）

Ｂ区南端部で４号土坑墓に隣接して発見された長軸1.20ｍ，短軸0.86ｍ，深さ46㎝の楕円形を呈する土坑墓である。床面はほぼ平坦であるが，やや東側に向って高くなっている。覆土上面より弥生土器が出土している。第76図11～15は，短頸壺の口縁部であり連弧文・平行沈線文が施され，13のように文様交点には瘤が付加されている。13の口端には，キザミが付けられている。同図16～32，第77図１～12・15は体部上半の資料で，渦文・重三角文(20・30)，雷文(24)が施文されており，沈線区画は交互にナデ，ミガキとなっている。第77図16～18は底部資料であるが，底面には布痕を有し，外側からの穿孔が焼成後行われているのが観察される。（芳賀）

６号土坑墓　（第９図）

Ｂ区南端部で，５号土坑墓，94号土坑墓間に発見された土坑墓である。長軸1.28ｍ，短軸0.82ｍ，確認面から床面までの深さ22㎝を測り，楕円形を呈する。他の土坑墓と比べて浅い特徴があり，多くの土坑ではLⅣの中ほどまで掘り込んで床面としているが，５号土坑墓は，LⅢ(パミス層)の中ほどまで掘り込んで床面としている。覆土は，パミス粒を含む黒褐色土であるが，遺物は，微細な弥生土器が数片出土しただけであった。（芳賀）

７号土坑墓　（第９図，第77図24～33，第78図１～５）

Ｄ区南西部で検出した土坑墓で，土坑墓群の最南東端に位置する。長軸1.10ｍ，短軸0.54ｍ，深さ37㎝を測り，隅丸長方形を呈する小型の土坑墓である。南東部の床面では，直径0.30ｍ，深さ12㎝のピットが存在する。土層観察によって床面のピットから伸びる杭等の痕跡は発見されなかった。弥生土器は，覆土上面に密集して発見された。壺の砂片が多く，体部文様には渦文が多用されている。第77図29は，体部上半に重三角文が施文されているもの，第78図９は，口縁部に横走する３本の平行沈線が施された蓋である。同図４の底部には穿孔を有する。（芳賀）

８号土坑墓　（第９図，第32図５）

Ｄ区東端で検出した上面の大きさは，長軸0.98ｍ，短軸0.67ｍの不整隅丸方形を呈する土坑墓である。深さは31㎝である。床面も，不整隅丸方形で中央部がやや窪み，やや高く傾斜している。また，南側の床面より10㎝上部に，完形の小型壺が，やや口縁を東に傾けた状態で発見された。土坑墓内からの弥生土器の出土は，第32図５の１点だけである。口縁部が欠失しているが，体部上端と中央に６本の平行沈線を施し，両者間には無文部を形成している。体部下半には，植物茎（カナムグラ）の回転施文を施している。底部は布痕を有している。（丹野）

９号土坑墓　（第９図，第33図２，第78図６～12）

Ｄ区南東部で検出した不整の方形を呈する土坑墓で，長軸0.87ｍ，短軸0.69ｍ，深さ27㎝を測る。北側にピットが存在するが，これは南側から伸びる中世と思われるピットであろう。床面は，東側が高く傾斜しており，その床面に完形の小型壺が，倒位で発見された，東側の壁は，直線的に立ち上がっているのに対し，西側の壁は，緩やかに立ち上がっている。床面から発見された小型壺は，第33図２に示したが，無文で丁寧な横方向のミガキがなされている。底部は，布痕はなくヨコナデが施されている。（丹野）

10号土坑墓　（第10図，第78図13～25，第79図１～11）

Ｄ区東端で検出した不整楕円形を呈する土坑墓であり，長軸0.68ｍ，短軸0.59ｍ，深さ21㎝を測る。土坑墓中央部からは弥生土器が集中して出土しており，床面から８㎝上まで密集している。弥生土器は，第78図（13～25），第79図（１～11）に示した。第78図（13～25）は，壺の頸部体部上半の資料である。体部上半には渦文が施文され，15・24の頸部には，沈線間に植物茎の回転施文がなされている。20・24では，渦文の接する部分の上下に三角形区画文が施文されている。第79図（10・11）の底部には，布の圧痕を有する。床面からは，勾玉が１点出土している。濃緑色のヒスイ製の勾玉で，長さ0.91㎝，厚さ0.38㎝で２㎜の孔が両側からあけられている。（芳賀）

11号土坑墓　（第10図）

Ｄ区中央よりやや東側で検出した。上面は，長軸0.74ｍ，短軸0.49ｍの不整方形を呈している。長軸は，ほぼ東西に延びている。深さは24㎝である。床面は，長軸0.53ｍ，短軸0.36ｍの隅丸方形で，西側の壁が，床から緩やかに立ち上がっている。（小林）

12号土坑墓　（第10図，第79図12～25）

Ｄ区北東部で検出した。上面は，長軸0.89ｍ，短軸0.70ｍの不整楕円形を呈している。長軸は北東から南西に延びている。深さは22㎝である。床面も不整楕円形で，北東側がやや高く傾斜している。壁は南西側が緩やかに立ち上がっている。破砕された土器は，北東側上面に密集していた。第79図（12～25）に，弥生土器を示した。大型壺が多く，渦文は一つおきにミガキが施されている。25は底部で，穿孔されている。（丹野）

13号土坑墓　(第10図，第32図６，第79図21～31)

Ｄ区北東部で検出した。上面は，長軸0.78ｍ，短軸66㎝の不整楕円形を呈している。長軸はほぼ東西に延びている。深さは20㎝である。床面も不整楕円形で，東側がやや高く傾斜している。壁は床面から緩やかに立ち上がっている。土坑墓上面中央に土器が密集し，床面から約８㎝のところまで重なっている。第32図６，第79図(26～31)，第80図(１～４)に弥生土器を示した。第32図６は中型壺で，体部２段の三角文と，横走する平行線によって施文されている。ミガキは１つおきに施されている。口端は縄文を有する。口縁は３本の横走する集合線が施されている。集合線間はミガキを有する。第80図４は，底部で穿孔がなされている。　(丹野)

14号土坑墓　(第10図，第32図14，第33図13，第34図１～４，第80図５～36，第81図)

Ｄ区東北部で検出したもので，16号土坑墓に隣接している。長軸1.80㎝，短軸0.94㎝，確認面から床面までの深さ47㎝を測り，長楕円形を呈している。床面は礫層の上部を掘り下げて造られており，壁面下部や床面には大小の礫が露出していた。床面は，北東へ向ってやや高くなっている。遺物は，弥生土器が床面，覆土上部から出土した。第39図３は，床面の中央部やや北西寄りで横倒して出土した完形の鉢である。高さ9.4㎝で，ヘラ描きによる２本の沈線による連弧文が３単位口縁部を巡っている。２本の沈線間はナデ，その上下の区画内はナデののちヘラミガキが加えられている。第32図14，第34図１～４，第80図５～36，第81図は覆土中から出土した資料である。第81図５～16は，壺の口縁部であり，ヘラ描き沈線による連弧文のモチーフを有している。同図14，15，22では，体部文様帯下端に，植物茎(カナムグラ)の回転施文が行われている。第34図１は，無頸の大型壺である。体部上半に相対する渦文が施文され，体部下半には直前段多条の縄文が施文されている。同図２は，短頸の大型壺の頸部から体部上半にかけての資料で頸部に平行沈線を有し，体部上半に弧状の区画文，渦文が施文されている。弧状区画の外側には，刺突列点が充填され，一部に小突起が付加されている。区画内に刺突を充填する資料は，今回調査資料の中では唯一の例である。同図３は壺の口縁部から体部上半にかけての資料，同図４は，体部下半の資料で底部に穿孔を有している。第32図７は，体部上半の資料で頸部の区画文外には植物茎の回転施文がなされている。体部には渦文のモチーフを有し，沈線区画内は，交互にミガキ・ナデとなっている。第33図４は，口縁部「く」状に外反し，体部が丸味をもつ鉢で，口端は小波状につくられ，体部上半は平行沈線，それ以下には沈線が施文されている。また口縁内面への施文も認められる。同図５は，長頸壺の口縁部，頸部資料で，口縁は無文となり横方向のナデが施されている。　(芳賀)

15号土坑墓　(第12図，第82図)

Ｘ区東端中央部で検出している。96号土坑墓と東端を切り合っている。上面は，長軸1.64ｍ，短軸0.64ｍの細い長楕円形を呈している。深さは37㎝である。長軸は東西に延びている。床面は

長軸1.44ｍ，短軸0.49ｍの隅丸方形を呈し，東部がやや高く傾斜している。破砕された土器は，その東部と中心よりやや西に寄った位置の２ヵ所に集中しており，床面より約10㎝上の地点まで重なり合って存在している。第82図は出土遺物である。１～３・６は口縁部で，横走する沈線と連弧文が施されている。４は長頸壺の頸部で，５本の横走する平行沈線を有する。５は頸部で２本の沈線を有する。７～25・29は体部上半である。渦文は一つおきにミガキを施す。７・13・18・20・23は，渦文と渦文の間が三角文で埋められている。26～28・30は体部下半で，直前段多条の縄文LRを有する。31～34は底部で穿孔を有する。底部直上の側面はミガキを有する。　（丹野）

16号土坑墓　（第10図，第33図６，第35図１・３，第83図，第86図１～20・23）

Ｄ区北端の14号土坑墓，93号土坑墓間に位置するものである。長軸1.77ｍ，短軸0.97ｍ，深さ28㎝を測る。床面はほぼ平坦であるが，西から東へ向って緩やかに高くなっていく。東南，西南コーナーには，直径0.40ｍほどの円形の張り出し部を有している。張り出し部床面と，土坑墓床面との比高差は約12㎝を測る。土坑墓内から出土した遺物は弥生土器だけであるが，多量に出土している。弥生土器の出土状況は，北東部コーナー付近に中型壺の完形品が１点床面から出土している。他は覆土中から出土であり，特に上層部では密集して出土している。第33図６は，床面から出土の中型壺である。受口状の口縁を有し，口縁部には６本の沈線が巡っている。体部中央に最大幅を有し，体部上半に５単位の渦文を有する。体部下半には直前段多条の縄文が施文され，底部には布の圧痕を有する。第34図５，第35図１・３は，口縁部から体部上半にかけての広口の長頸壺である。第34図５は，口縁部に５単位の連弧文を有し，その交点には瘤を貼り付けており，頸部には２段に４本ずつの平行沈線が施文されている。第35は１は，長頸壺の口縁部から体部上半の資料である。口縁部，頸部に平行沈線を巡らし，体部上半には渦文を有する。同図２は，体部下半の資料で，底部はヘラケズリによって調整され，焼成後の穿孔を有する。第83図～第86図は，覆土中から出土した弥生土器である。第83～85，第86図１～20・23は，壺の破片である。ほとんどが，受口状の口縁部を有する長・短頸・無頸壺であるが，第85図22・23・28・29は，口縁「く」状に外反し，体部上半に平行沈線を巡らした壺である。これ以外の壺の場合には，口縁部に連弧文・平行沈線部，頸部に雷文・平行沈線文，体部上半に渦文が施文されている。第83図17，第85図25～27・30～32では，口縁部の沈線区画内に，縄文・植物茎（カナムグラ）・回転文が施文されている。その他底部資料の場合には，穿孔されているものが多い。第86図21・22・25・26は鉢，24は甕，27は蓋である。　（芳賀）

17号土坑墓　（第11図，第70図ウ～20）

Ｃ区南東端で検出された。上面が長軸1.25ｍ，短軸0.64ｍの細い不整楕円形を呈する土坑墓であり，長軸は東西に延びる。45号土坑墓を切っている。深さは31㎝である。床面は長軸1.02ｍ，短軸0.43ｍの不整楕円形で，東が高く傾斜している。東面の壁が急に角度をつけて立ち上がって

いる。破砕された土器の集中は，上面では西側に近寄っているが，土坑内ではややまばらになりながらも，床面より10㎝の地点まで，ほぼ均等に存在している。第70図（１～20）は出土遺物である。１～６・17は口縁部である。１・６は連弧文を有し，連結部に瘤をつける。１の口端には縄文，６には太目のキザミ文を有する。２は４本の平行沈線文が施され，頸部近くに穿孔を有する。７の口端にもキザミが施される。４・５は無文のヨコナデを有する。８・10・13は壺の頸部である。10・13は渦文と渦文の間に重三角文を有する。８は４本の横走する平行沈線を有し，間を磨いている。９・11・12・15は体部上半である。いずれも渦文を有し，区画内を交互にミガキ，ナデとしている。14・16～20は体部下半である。14は体部中央の資料で，植物茎による回転圧痕文を有する。16～20の縄文は，すべて直前段多条の縄文LRである。（丹野）

18号土坑墓　（第11図，第87図21～37，第88図１～15）

Ｃ区南東端で検出した上面は長軸1.13ｍ，短軸0.78ｍ，深さ10㎝の楕円形を呈する土坑である。長軸は南北に延び，北端部に上面径12㎝のピットがある。ピットの深さは，床面から16㎝で先端が先細りになっている。床面は長軸1.02ｍ，短軸0.69ｍの楕円形で，北側がやや高く傾斜している。壁面は床から緩やかに立ち上がっている。破砕された土器の集中は，上面を覆いつくすように存在し，土坑墓内床面５㎝上まで存在する。床面にも，数点土器片が検出された。第87図21～37，第88図１～15は出土遺物である。21・32は口縁部である。21は無文でヨコナデを有する。口唇部には，ミガキが施されている。32は口唇部にミガキを有し，外面には連弧文が施されている。第87図24・28～30・36は頸部である。28・30は横走する４本の沈線が施文されその間に磨きを有する。29は雷文を有し，一間隔にミガキを施す。36は横走する４本と６本の平行沈線を２段に有している。平行沈線は縦に走る２本の平行沈線で区切られている。沈線間はミガキが施されている。第87図25は体部上半で，上下に向い合うＣ字状文が，３段に同心円的に施文されている。その間にはミガキが施されている。第87図34，第88図３～５は雷文が施文される。これも一つおきにミガキを有する。第88図11は蓋の裾部である。３本の横走する平行沈線を有する。第88図９・15は鉢である。９は４条の集合沈線による連弧文，15は横走する４本の平行沈線を有する。第88図12は底部で，体部下端の無文部にはミガキを有する。（丹野）

19号土坑墓　（第11図，第33図７～10，第35図５～６，第88図16～41）

Ｃ区中央やや東寄りで検出されたもので52号,50号土坑墓に隣接しており,土坑墓の東南にピットを有している。長軸0.95ｍ，短軸0.78ｍ，確認面からの深さ28㎝を測り，楕円形を呈している。ピットは，土坑墓の東南に約５㎝離れて発見されており，上面径17㎝の円形を呈し深さは15㎝を測る。先端部に行くにしたがい細くなる形状をしている。ピット方向を規準とした軸線の方位はN10°Eである。弥生土器は覆土上層部を中心に出土している。第33図８は受口状の口縁部を有する無頸壺，同図９は，長頸壺で，12縁部無文で頸部に２段にわたって平行沈線が施されている。

同図10は，口縁「く」状に外反する壺で，口端には縄文が施文されている。第35図５，７も口縁「く」状に外反する壺であり，体部上半の無文部に２段ヘラ描きの平行沈線をめぐらしている壺で，５の平行沈線文帯には３本のヘラ描き沈線が鋸歯状に配置されている。第33図７は蓋，第35図６は甕であり口端に縄文を施文し，口縁部には横方向のナデが施され，体部には直前段多条の縄文が施文され，体部上端には，結節回転施文がなされている。第88図16～29は，壺の口縁部，体部破片であり，28・29は，植物茎(カナムグラ)の回転施文がなされている。同図30～38・41は体部に縄文が施文され，結節回転を有する甕である。（芳賀）

20・22号土坑墓　(第11図，第33図12，第89図１～４)

Ｃ区北東端近くで検出されたもので，20号土坑墓を22号土坑墓が切って作られている。22号土坑墓は，長軸1.25ｍ，短軸0.85ｍ，深さ43㎝で楕円形を呈し，南辺に接してピットを有している。床面は，北から南へ向って高くなっており，南西コーナー付近の床面から第33図12の完形鉢が出土している。20号土坑墓は，西側の部分が22号土坑墓によって切られているが，長軸の長さは，22号土坑墓とほぼ同じ位と考えられる。破砕面からの深さ21㎝，短軸の長さ0.71㎝を測る。第33図は，22号土坑墓床面から出土された鉢で，口縁径16.3㎝，高さ9.5㎝を測り，口端にキザミを有し，体部には，平行沈線文帯間に６単位の連弧文を施文している。沈線を充填している部分は，ミガキがかけられ，それ以外の空白部はナデの部分となっている。体部下半には，植物茎(カナムグラ)の回転施文を行っている。底部には布痕を有する。12Ｂに示したように口端から体部下半にかけて，ヒビが入っている。これを補強するために１対の補修孔を設けているが，孔は貫通していない。さらに割れ口に沿って漆状の付着物があり，補修が行われていたものと考えられる。第89図１～４は20号土坑墓出土弥生土器で，20は台付鉢である。７～15は，22号土坑墓出土の弥生土器で，12が甕でそれ以外は壺である。13の沈線間には，植物茎の回転施文がある。（芳賀）

21・23号土坑墓　(第11図，第33図11，第89図５～６，16～27)

Ｃ区北端部で，22・23号土坑墓に隣接して検出された土坑墓であり，21号土坑墓を23号土坑墓が切っている。23号土坑墓は，長軸1.28ｍ，短軸0.81ｍ，確認面からの深さ45㎝を測る長楕円形を呈する。土坑墓長軸に沿った土坑墓の西側に直径20㎝，深さ28㎝のピットを有する。床面は西側から東へ向って高くなっている。21号土坑墓は，西側部分が21号土坑墓に切られているため正確には不明であるが，隅丸方形を呈すると思われ，長軸1.19ｍ，短軸1.02ｍ，確認面からの深さ13㎝を測る。東北コーナーに接して直径38㎝のピットがある。第33図11は，21号土坑墓出土の蓋である。第89図５～６は，21号土坑墓出土の口縁部，体部資料である。同図16～27は，23号土坑墓出土の弥生土器で，19は４本一組の沈線による連弧文を持つ小型鉢で，22は，重三角文のモチーフを有する壺で区画内は１本おきに縄文が充填されている。（芳賀）

24号土坑墓　（第12図，第36図１，第89図28）

Ｄ区中央部北寄りで検出された土坑墓である。１号溝に西側壁が切られている。長軸0.89ｍ，短軸0.67ｍで不整円形を呈する。確認面から床面までの深さは45㎝を測る。土坑墓の堆積土は黒褐色でパミス粒を含んでいた。床はほぼ水平である。遺物は，土坑墓西端の床直上で小型の長頸壺が出土した他，あまり出土していない。次に図示資料について説明を加える。第36図の１は小型の長頸壺の体部である。最大径は体部のほぼ中央部にもつ。無文で底部は布痕を有する。この壺の器形と近いものが39号土坑墓から出土している。器形の特徴からいわゆる南御山Ⅱ式の土器に属するものと思われるが，無文であるのは非常に珍しい。第89図では壺の口縁部で沈線の間に植物茎(カナムグラ)が回転押捺されている。　（小林）

25号土坑墓（第12図）

Ｄ区中央部北側で検出された土坑墓である。１号溝により西側の壁が切られている。長軸0.70ｍ，短軸0.67ｍのほぼ円形を呈する。確認面から床面までの深さは20㎝を測る。堆積土は黒褐色でパミス粒を含んでいる。長軸方向の床の傾きは，ほぼ水平だがやや東側が高く，西側が低くなっている。土坑墓内の遺物はほとんどみられなかった。　（小林）

26号土坑墓　（第12図）

Ｄ区南端で検出した上面が長軸1.01ｍ，短軸0.55ｍの不整楕円形の土坑墓である。長軸は，南東から北西に延びている。北西部の一部上面を１号溝が破壊している。床面は，長軸0.86ｍ，短軸0.44ｍの不整楕円形を呈し南東側が高く傾斜している。中心からやや南東寄りに，28㎝×19㎝の川原石が，検出された。深さは，25㎝である。遺物の出土はなかった。　（丹野）

27・65号土坑墓　（第12図，第90図１～15）

Ｄ区中央南寄りの地点で検出した65号土坑墓を27号土坑墓が破壊し，また，上面を２号溝が破壊している。27号土坑墓は，上面長軸1.13ｍ，短軸0.58ｍのやや歪な隅丸方形を呈している。65号土坑墓は，南部半分を切られているが，長軸0.97ｍ，短軸推定0.63ｍの不正楕円形を呈すると考えられる。深さは，27号土坑墓が33㎝，65号土坑墓が29㎝である。長軸は27号土坑墓が，東西に延び，65号土坑墓が南東から北西に延びる。床面は27号土坑墓の西部が高く傾斜し，65号土坑墓は北西部が高く傾斜している。破砕された土器の集中が，切り合い付近を中心に見られ，床面より約20㎝上までそれが見られる。また，27号土坑墓に付随していると考えられるピットが27号土坑墓西端にある。上面径は17㎝の不整円形で，内部は先細りになっている。土坑墓内の土層は，それぞれ１層である。27号土坑墓の土層は黒褐色土パミス粒を含み，65号土坑墓は暗褐色土砂質である。第90図１～15は27号土坑墓出土遺物である。１・10は口縁部が外反しており，ヨコナデが施されている。３・５は，体部中央付近の破片で，渦文と渦文の間を重三角文で埋めている。体部上半下半を，１本の横走する沈線で区切っている。14は底部に穿孔がなされている。残存部

には布痕が見られる。底部直上の無文部はミガキを有する。　（丹野）

28・29・30号土坑墓　（第13図，第36図３，第90図16～23，第91図）

Ｄ区ほぼ中央部で検出した土坑墓で28号土坑墓の南半分を30号土坑墓が破壊し，30号土坑墓の西端を29号土坑墓が破壊している。また，30号土坑墓の東半部の一部を２号構が破壊している。28号土坑墓は，上面短軸0.76ｍで不整楕円形と推定される。29号土坑墓は上面長軸0.84ｍ，短軸0.76ｍの不整楕円形である。30号土坑墓は，上面長軸1.37ｍ，短軸0.76ｍの東部がややふくれ気味の不整楕円形である。長軸は，それぞれ28号土坑墓が南北，29号土坑墓が南北，30号土坑墓が東西に延びている。深さは，28号土坑墓が36㎝，29号土坑墓が23㎝，30号土坑墓が38㎝である。土坑内土層は，すべて１層で，28号土坑墓，29号土坑墓が，黒褐色土パミス粒を含むのに対し，30号土坑墓は，黒褐色土砂質である。28号・29号土坑墓は，床面から緩やかに壁が立ち上がっているのに対し，30号土坑墓は，東部壁面は急であり，西壁面は緩やかに立ち上がっている。30号土坑墓の床は，東部が高く傾斜している。破砕された土器の集中は，29号・30号土坑墓上面に見られほぼ土坑内，床面より20㎝上まで均一に重なり合っている。特に，30号土坑内墓は，その中心から西寄りに，大型頸壺の頸部から口縁部の残存部が，２個体，倒位で検出された。このうち一個体は，頸部の部分に蓋をするかのように石が乗せられた状態で検出された。第36図３第90図16～23は28号土坑墓出土土器である。36図３は，やや小型の壺である。体部は，左右が向い合った「コ」状の区画文が４単位施される。体部下半分は，縄文で直前段多条の縄文LRである。第90図16・17は，体部上半で，渦文を有する。一つおきに，植物茎による回転圧痕文を充填している。19は，体部下半で，細かい縄文によって施文されている。縄文は直前段多条の縄文LRである。第90図24～29は29号土坑墓出土土器である。28は甕の口縁部である。口端に縄文が施される。第30図２・４～６，第91図は，30号土坑墓出土土器である。第30図２は小型壺である。口唇部，頸部，口縁内部にミガキが施されている。また，口縁内部は赤彩されている。頸部に５本の横走する平行沈線文を有する。４・６は，やや大型の壺で，４は長頸，６は無頸である。４は，口端に縄文を有し，５単位の連弧文が施文されており，その連結部に瘤を有する。６は，２本の横走する平行沈線と４単位の連弧文により口縁部が施文され，口端と連弧文部にミガキを有する。30は，中型の壺で，頸部に，７条と８条の横走する沈線文と２本の縦の沈線により柵状を呈する文様を３単位有する。体部は渦文で，６単位と推定される。第91図12・14・18は，甕で，頸部に結節縄文を有している。17は，体部上半で，Ｃ字区画文を同心円状に施している。　（丹野）

31・36号土坑墓　（第13図，第92図１～18）

Ｄ区ほぼ中央部で検出された土坑墓である。36号土坑墓が31号土坑墓を切った形で検出された。２号溝が両土坑墓を切った形で検出されているが浅いため，両土坑墓に影響は見られなかった。31号土坑墓は，長軸約0.86ｍ，短軸0.56ｍの楕円形を呈するものと思われる。確認面から床面ま

での深さは23㎝を測る。堆積土は黒褐色砂質土である。長軸方向における床面の傾きは，東側が高く西側が低くなっている。遺物は，人為的に破壊された土器片が床上10㎝から確認面まで埋められており，北東部に集中している。第92図の１～18は31号土坑墓から出土した弥生土器で，１は壺の口縁部，２～12は体部上半，13～18は体部下半である。体部上半は渦文が施され，体部下半は直前段多条の縄文LR（３本撚り）により施文されている。36号土坑墓は長軸1.15ｍ，短軸0.79ｍの不整楕円形を呈し，確認面から床面までの深さは36㎝を測る。堆積土は黒褐色土でパミス粒を含んでいた。長軸方向における床面の傾きは，ほぼ水平だがやや北側が高く，南側が低くなっている。遺物は，人為的に破壊された土器片が床面よりやや上から確認面にかけて埋められており，土坑墓中央付近に集っている。第38図４は壺の体下半で，直前段多条の縄文LRが施され，底部は穿孔，布痕がみられる。第96図の１～14は，36号土坑墓から出土した弥生土器で，１～３は壺の口縁部，４～９は壺の体部，10・11は甕の口縁部，12・13は甕の体部，14は底部である。２・10・11は口縁端に縄文の圧痕がみられる。14は，体部下端はミガキが施され，底部は穿孔されている。（小林）

32号土坑墓　（第13図，第35図８，第36図７～９，第37図１，第92図19～34）

Ｄ区ほぼ中央部北側で検出された土坑墓である。１号溝によって東側の壁が切られているが，SD02は浅く，土坑墓に影響はなかった。長軸1.93ｍ，短軸0.93ｍの長楕円形を呈し，確認面から床面までの深さは32㎝を測る。土坑墓の堆積土は黒褐色土でパミス粒を含むものであった。長軸方向における床面の傾きは水平に近いがやや東側の方が高くなっている。遺物は，人為的に破壊された土器片が床上約10㎝の所から確認面にかけて埋められており，土坑墓中央部から東側にかけて集中している。第35図８は無頸の壺で，口縁端に縄文圧痕，口縁部は平行沈線，体部は相対する渦文が施文されている。第36図７は蓋で，体部は直前段多条の縄文LR，口縁部は３本の平行沈線が施され，平行沈線の間と内面のミガキが施されている。８は小型の長頸壺で全体にミガキが施されている。９も長頸壺で，頸部の上端，下端に平行沈線が施され，また頸部全体に，ミガキが施されている。体部は相対する渦文が施文されている。第37図１は大型の壺である。口縁部に連弧文，頸部に横走する平行沈線，体上部は相対する渦文が施されている。体下部は直前段多条の縄文LRが施され，渦文と縄文の間には１本の横走沈線が入り，上下を区分している。口縁部から体部上半にかけての文様は，ミガキとナデが交互に施され，ナデの部分は赤彩されている。第92図19～34は，壺の口縁部から体部，第93図の１～５は壺の体部，６～９は甕の口縁部，10・24は壺の口縁部から体部にかけての破片資料である。（丹野）

33号土坑墓

Ｄ区西端で検出した土坑で，34号土坑墓に隣接している。長軸0.84ｍ，短軸0.65ｍ，深さ30㎝の楕円形を呈する。覆土中から，遺物の出土はなかったが，東北コーナー寄りの床面から４点の

半玦状勾玉が出土している。４点とも乳白色を呈し，部分的に淡緑色となるヒスイ製である。方柱体原石に孔を穿ったのち輪切りにし，さらに半截して２個の玉をつくり，単孔を両側からあけたのち，各面を研磨している。したがって刳り入みの凹部の面が他の研磨面より古い面となっている。４点とも長さ２㎝弱で，色調とも近似しており，同一原石からつくられた勾玉と考えられる。（芳賀）

34号土坑墓　（第13図，第36図10，第37図２～７，第38図１～３，第94図，第157図66～68）

Ｄ区西端部の33号土坑墓に隣接して検出されたもので，上面径は，長軸1.53ｍ，短軸0.82ｍ，床面までの深さは約44㎝を測る。床面は，西側が低く東側が高い。東北コーナーに直径20㎝，深さ36㎝のピットを有する。遺物は，東半部に多くの弥生土器が検出され，床面では，東壁から西へ25㎝離れた地点で３点の細型の碧玉質管玉が出土している。第36図10は覆土上面で出土した小型の鉢，もしくは台付鉢で，口端に刻みを有し，体部には相対する渦文が沈線によって施文されている。沈線間は交互にミガキ・ナデとなっている。第37図２は，口縁がく状に外反する壺の口縁部で，口端に縄文が施文され，体部には全面にわたって縄文が施文されていると思われ，体部上端には結節回転が施文されている。同図３は，受口状の口縁部を有する長頸壺，６は，壺体部上半で，相対する渦文が施文され，沈線間は交互に赤色塗彩されている。４・５は底部に外側からの穿孔を有するもの，７は大型壺の体部下半の資料で，直前段多条(LR)の縄文原体を用いている。第38図１は受口状の口縁を有する壺で，口縁上半に４本の平行沈線をめぐらし，小コブを５ヵ所貼り付けて５単位に分割している。その下位には，５単位の弧状区画文を施文している。２は，底部で布痕を有し，穿孔されている。３は中型の壺で体部上半には相対する渦文を有し，下半部には直前段多条の縄文が施文されている。渦文部には沈線間を交互にミガキ・ナデとしている。第94図１～28は，壺の破片資料であり，体部には沈線によって渦文が施文されている。沈線間はほとんど交互にミガキ・ナデとなっているが，62は，植物茎の回転施文がなされている。29・30は底部で布痕を有している。31・32は甕の体部で，31では結節回転を有している。33は口縁がやや内湾する深鉢で，斜め方向の条線が施されている。第157図66～68は，床面出土の碧玉質管玉である。３点とも淡緑色を呈し，66は，直径3.4㎜，最大長1.60㎝を測る。孔は両側から穿孔されている。（芳賀）

35号土坑墓　（第12図，第36図11，第39図１・２，第95図）

Ｄ区北西の34・37号土坑墓間で検出された土坑墓で，長軸1.26ｍ，短軸0.76ｍ，深さ56㎝の長楕円形を呈する。床面は平担であるが，西側から東側へ向ってゆるやかに高くなっている。弥生土器は覆土上部を中心に出土している。第36図11は南西端部上面に倒位で出土した甕である。口縁がく状に外反し，口端に植物茎の回転施文がなされ，体部には平行沈線間に５単位の連弧文が施されている。沈線間には植物茎の回転施文が行われており，口端，体部の植物茎を施文した沈

線区画内は，赤色塗彩がされており，口端から体部中央部までの炭火物の付着が著しい。第39図１は，体部上半に渦文を有し，体部下半には植物茎の回転施文を施した小型壺，同図２は長頸壺の頸部破片で，３段にわたり平行線がめぐり，全面的にミガキが施されている。第95図には35号土坑墓出土の破片資料を示したが，30・31は小型鉢で，それ以外は，壺の破片である。体部文様として渦文が多用されており，渦間は，交互にミガキ・ナデとなっている。35～39は底部である。底面に布痕を有し，35・37・39では，穿孔が認められる。（芳賀）

37号土坑墓　（第14図，第38図５，第39図３，第96図15～46）

Ｄ区北西部寄りで検出した上面が，長軸1.19ｍ，短軸0.83の不整方形土坑墓である。床面は，長軸1.04ｍ，短軸0.51ｍの楕円形を呈している。深さは44㎝である。長軸は南東から北西に延びている。床面は，南東部が高く傾斜しており，南東部の壁面は，鈍角に立ち上がっている。破砕された土器は，プラン検出面上より土坑墓内部まで，ほぼ均等に密集しているが，床面近くでは，稀薄となり，上面南東寄に，大型長頸壺の頸部が傾いた正位の状態で検出されている。また，南東部床面近くで，完形の小形長頸壺が，横位の状態で検出された。第38図８は，中型壺である。頸部に雷文を有し，体部には渦文を有している。覆土上部からの出土である。第39図は床面から出土した完形の壺で，口縁やや外反し平行沈線を巡らし，体部上半には，平行沈線を充塡した長方形区画文が３段施文されている。区画内はミガキがかけられているが，それ以外には，植物茎の回転施文がなされ，植物茎施文部は赤色塗彩がなされている。（丹野）

38号土坑墓　（第14図，第38図６，第39図４～７，第97図１～13，第158図17）

Ｄ区とＹ区にまたがって検出された。長軸は1.30ｍ，短軸0.53ｍの長楕円形を呈する。確認面から床面までの深さは42㎝を測る。堆積土は黒褐色土でパミス粒を含んでいた。長軸方向における床面の傾きは，東側が高く西側が低くなっている。第38図６は壺の体部上半で，この文様は，「こ」の字の重なりと渦文とが１つの単位を作る特異な文様である。渦と渦との間を三角文で埋めており，その三角文の底辺を作る沈線ともう１本の沈線により，体部下半の直前段多条の縄文LRとを区分している。また，沈線間はミガキとナデが交互に行われ，ナデの部分は赤色塗彩されている。第39図４は壺の体部上半で，口端に縄文の圧痕，体部上半に平行沈線，その下に結節縄文，直前段多条の縄文LRを施している。５は壺の口縁部で口端に刻が施されている。６・７は壺の体部下端で，底部は穿孔されている。第158図17は，東壁寄りの床面から出土したヒスイ製の勾玉である。（小林）

39号土坑墓　（第14図，第38図７・８，第39図８，第97図12～第98図11まで）

Ｄ区北東部で，37・90号土坑墓間に検出されたもので，長軸1.23ｍ，短軸0.85ｍ，深さ49㎝を測る隅丸長方形を呈する土坑墓である。東壁の幅に比べて西壁の方が狭く，やや台形状を呈している。弥生土器は，土坑内堆積土上部に集中して発見されたが，床面では，第38図７の完形小型

長頸壺が出土している。口縁受口状を呈し，植物茎の回転施文がなされ，頸部には，上下端に平行沈線をめぐらし，体部上半には，３単位の相対する雷文が施文されている。沈線区画内，及び体部下半には，植物茎の回転施文が施されている。口縁部，体部上半の偽似縄文部には赤色塗彩がされている。同図８は，口縁部から頸部にかけての資料で，口縁部に連弧文を有し，連弧交点にはコブが付けられている。頸部には，平行沈線をめぐらし，それを縦の沈線で切って方形区画文をつくっている。体部には渦文が施文されている。第39図８も同様に頸部に方形区画文を施文した壺であり，区画内は，ミガキがなされている。第97図14～17は，同一個体と思われる壺の口縁部，頸部破片で，口端にキザミを有し，口縁部には連弧文，頸部には方形区画文を施文している。その他，同図18～32，第98図１～４・９は壺，第98図５～８は，甕である。土坑墓床面からは第157図71～75に示した碧玉質の管玉が５点出土している。５点とも第38図７に示した完形土器付近からかたまって出土している。（丹野）

40・93号土坑墓　（第14図，第38図10・11，第98図12～34，第137図）

Ｄ区中央部北端で検出された土坑墓である。40号土坑墓が93号土坑墓の西側の壁を切っている。また，SD02が40号土坑墓の東の壁を切っているが，SD01は93号土坑墓の覆土を切っているにすぎない。40号土坑墓は，長軸0.77ｍ，短軸0.65ｍで，ほぼ円形を呈する。確認面から床面までの深さは31㎝を測る。堆積土は黒褐色土でパミス粒を含んでいた。長軸における床面の傾きは，東側が高く，西側が低くなっている。第38図10は壺の体部上半で，渦文が施されており，交互にミガキとナデが行われている。11は壺の口縁部付近で，口縁部に３本の平行沈線，頸部は４本の平行沈線を縦２本の沈線で区画している。その下は，有節の連弧文になるようである。第61図11は壺の胴上部で，有節の重菱形文が施されている。重菱形文は植物茎（カナムグラ）による充塡手法が行われている。第98図12・13・18は壺の口縁部である。14～17・19～32は壺の体部上半である。このうち，14～17・19～24は磨消縄文が行われた土器片である。33・34は壺の体部下端から底部にかけての土器片で，底部は穿孔され，布痕を有するものである。93号土坑墓は，長軸1.65ｍ，短軸0.70ｍの不整楕円形で，確認面から床面までの深さは33㎝である。堆積土は，黒褐色土で，40号土坑墓より，粗いパミスが含まれていた。長軸方向における床面の傾きは，ほぼ水平だが若干東側が高くなっている。遺物は確認面東側に集中して出土した。第137図１～４・６は壺の口縁部で，１は口縁部全体に植物茎（カナムグラ）が，回転押捺されている。５・７～11・13～24は壺の体部で，７・８・10・11は磨消縄文が行われている。12は壺の口縁部と思われる。25・26は体部下端で，底部穿孔され布痕を有する。（小林）

45号土坑墓　（第15図，第99図１～19）

Ｃ区南端部で17号土坑墓に接して検出されており，長軸0.87ｍ，短軸0.70ｍ，深さ28㎝を測る楕円形を呈する土坑墓である。弥生土器は，堆積土上層部で発見されており，第99図１～19に示

した。１・４・５は，植物茎の回転施文がされた壺口縁部，２・３・６・７は連弧文のモチーフを有し，２の沈線区画内には，植物茎の回転施文が行われている。（丹野）

46号土坑墓　（第15図，第40図１，第62図４，第99図20～30）

Ｃ区西端部で検出された土坑墓で，上面の長軸1.98ｍ，短軸0.76ｍ，深さ42㎝の隅丸長方形を呈する。103・104・110号土坑墓と切り合っており，いずれの土坑墓より古い，第40図１は土坑墓内堆積土上部から倒位で出土した大型壺上半の資料で，受口状の口縁には植物茎（カナムグラ）の回転施文され，頸部上下端には５本の沈線をめぐらし，体部には渦文を施文している。渦文は左右異方向巻きのもの一対で一単位となる相対渦文で，３単位６個の渦文が施文されている。体部文様は７単位に分割されており，余った１単位の部分には，図の正面のように，同心円文などを充塡している。口縁部及び体部の沈線間は１区画おきに赤彩されている。第62図４は，大型の甕で，一部に105号土坑墓出土のものが接合している。口縁く状に外反し，口端には棒状具による刻みがめぐる。体部上半には連弧文が施文されている。沈線区画内は，ミガキが加えられ，それ以外は，ナデとなる。口縁の屈曲部には，縦位の小突起が付加され，体部の一部には植物茎の施文が観察される。体部文様帯下端には結節回転がめぐり，体部下半には直前段多条の縄文（LR）が施文されている。第99図20は連弧文の施文された鉢，21は蓋，24は口縁部外反し，体部上半の無文部に平行沈線をめぐらした壺であり，29の底部では，布痕を有する底面に穿孔がなされている。（芳賀）

47号土坑墓　（第15図，第40図２～６，第100図，第157図69）

Ｃ区北部の53号土坑墓に隣接して検出された土坑墓である。長軸1.92ｍ，短軸0.70ｍ，深さ約33㎝を測る長方形を呈する。床面は北側から南へ南へ向うに従い浅くなっていく。南壁から約15㎝離れたところに上面径15㎝深さ27㎝のピットを有する。ピットの断面をみてみると先端へ向って細くなっている。第40図２は，無頸壺の口縁部，３は坩形を呈する鉢の体部下半部で連弧が施文されている。４は植物茎が施文された体部下半，５は蓋である。第100図１～21・23～25・29・32・38は壺，22・31は連弧文の施された鉢，26～30・33は，口端に縄文を有し，体部上部に結節回転を施文した甕である。土坑墓南壁付近の底面からは第157図69に示した１点の碧玉質の管玉が出土している。（芳賀）

48・81号土坑墓　（第16図，第39図９・10，第40図７～11，第53図１～８，第101図１～25，第125図）

Ｃ区北端部で検出された土坑墓で，48号土坑墓を81号土坑墓が切っている。48号土坑墓は，長軸1.39ｍ，短軸0.94ｍ，深さ37㎝の長楕円形，81号土坑墓は，長軸1.18ｍ，短軸0.85ｍ，深さ22㎝の長楕円形を呈し，75号土坑墓をも切って作られている。48号土坑墓の東壁から約10㎝離れて直径15㎝深さ27㎝のピットがある。48号土坑墓の床面は，東へ向うに従い高くなり底面東寄りでは，

第39図10に示した完形の小型壺が副葬されている。第39図９は蓋，10は床面出土の完形の小型壺で，口端にヘラ状工具による連続したキザミを有し，口縁部には，６本の平行沈線がめぐり，体部には，４本一組の沈線による連弧文が施文されている。また，底部には布の圧痕を有する。第40図７は，相対する渦文が施文された壺体部破片で，沈線間は１区画おきにナデののちにミガキが行われている。８は，重三角文が施文された壺で，沈線区画内は，１区画おきに縄文が充塡されている。９は，体部に結節回転を有する甕，11は体部上半の無文部に上下２段にわたって平行沈線を施文した壺である。第101図19・24・25は，連弧文の施文された蓋で，それ以外は壺の破片である。第53図１・２・４・５・７は受口状の口縁部を有する壺で，３・６・８は，く状に外反する短い口縁部を有する壺で，体部上半の無文部には，全周する平行沈線文が施されている。第125図には81号土坑墓出土の弥生土器を示した。12が蓋である他は壺の破片であり，体部には渦文が施文されている。（芳賀）

49号土坑墓・113号土坑　（第16図，第41図１～４，第61図３～５，第101図26～31，第144図18～32）

Ｂ区南端部中央で検出されたもので，49号土坑墓を113号土坑が切っている。113号土坑は，堆積土の状況から近世の土坑と考えられる。49号土坑墓は，長軸1.38ｍ，短軸は113号土坑に切られているため不明であるが，約0.8ｍほどと考えられ，床面までの深さは31㎝を測る。113号土坑は不整円形を呈し，長軸1.85ｍ，短軸1.52ｍ，深さ52㎝を測る。第41図１は，口縁径54㎝の大型甕で，口端に棒状具によるキザミを有し，口縁，及び内面には５本の平行沈線をめぐらしている。体部には直前段多条の縄文LRが施文され，体部上部には結節回転と２段の竹管端の圧痕列を有する。３の重三角文の施文された壺は48号土坑出土の第40図８と同一個体と考えられる。第61図３は，113号土坑出土の口縁部に沈線をめぐらした蓋，５は，渦文を有する壺である。第101図26～31は49号土坑墓出土の壺であり，30の底部には穿孔がなされている。第144図18～32は113号土坑出土の弥生土器であるが，28の甕では，口縁部に横方向のナデが行われ，体部は刷毛目調整が行われている。113号土坑から出土した弥生土器の中には49号土坑墓のものと接合するものが多く認められ，元々49号土坑墓中の弥生土器であったのが多いと思われる。（芳賀）

50号土坑墓　（第16図，第39図11・13，第41図５～８，第102図）

Ｃ区中央やや東寄りで検出された土坑墓で，19・58号土坑墓間に位置する。長軸1.04ｍ，短軸0.76ｍ，深さ41㎝を測り，長楕円形を呈する。長軸の南都延長状に直径17㎝，深さ26㎝のピットを有する。第39図11は，長頸壺で，口縁部にはヨコナデを施し，頸部には平行沈線をめぐらしている。13は体部に結節回転，縄文の施文された壺で，口縁内面には３条の沈線が施文されている。第41図５は，く状に外反する短い口縁部を有する壺で，口端に縄文が施文され，体部の無文部には，上端と，体部中央やや上に２段の沈線文帯を有する。６は，口縁部に平行沈線がめぐり，体

部に連弧文のモチーフを有する鉢である。７は，穿孔された底部資料，８は，口縁短く外反し，口端と体部に縄文を施文し，体部上端に結節回転を施文した甕である。第102図には破片資料を示したが，30～32が甕で，その他は壺と思われる。壺の体部モチーフとしては，渦文が多用されるが，10は重三角文，14は雷文のモチーフを有する。口縁部や頸部の区画文内や，体部１区画おきの沈線間にはミガキが加えられている。34の底部は穿孔されている。　（芳賀）

51号土坑墓　（第16図，第39図12・14～16，第41図９～11，第103図１～20）

Ｃ区中央部で検出され，52号土坑墓と一部切り合っている。51号土坑墓を52号土坑墓が切っている。長軸1.03ｍ，短軸0.86ｍ，深さ42㎝を測り，楕円形を呈している。弥生土器は，土坑内堆積土上半に多く，床面へ向うに従い少なくなる。東壁近くの床面から第39図14の完形小型壺が横倒の状態で出土している。高さ15.7㎝で，受口状の口縁部を有し，体部は球形となる。口端から口縁上部にかけて植物茎回転施文を行い，口縁部には３条の沈線をめぐらしている。体部上半には，３単位の重三角のモチーフを有し，沈線区画内は，一区画おきに植物茎（カナムグラ）の回転施文が行われている。体部下半にも植物茎の回転施文，底部には布痕を有する。口縁部，体部上半の文様帯部分の植物茎回転施文部は赤色塗彩されている。同図12・15は，沈線による連弧文のモチーフを有する鉢で，沈線施文部は，ミガキが施されている。第41図10・11は，ともに体部上半に渦文が施文された壺であり，沈線間は交互にミガキ・ナデとなり，ナデの部分には赤色塗彩が施されている。９は，口縁径28㎝ほどの甕で，口端，体部に直前段多条の縄文が施文され，口縁部はヨコナデ，体部上端には結節回転が施文されている。第103図１～20のうち，９・16は，体部に連弧文の施文された鉢，17は，体部上端に結節回転を施文した甕，19は，細い沈線で連弧文の施文された蓋であり，その他は壺の破片である。15では，体部上半に無文部を有し，結節回転を施文した壺で，く状に外反する短い口縁がつくと思われる。　（芳賀）

52号土坑墓　（第17図，第103図21～38）

Ｃ区中央で，前述の51号土坑墓と切り合って検出された土坑墓で，長軸0.94ｍ，短軸0.64ｍ，深さ31㎝を測り，長楕円形を呈する。遺物は，土坑墓内堆積土上部から弥生土器破片が若干出土している。第103図21～28は，52号土坑墓出土の弥生土器である。35が甕である他，壺の破片である。21は，受口状を呈する口縁部で，ヨコナデが行われている。27は，体部に同心円文が施文されたもので，沈線間は交互にミガキ・ナデとなっている。こうした沈線間の調整技法は，本遺跡出土弥生土器に共通する特色である。　（芳賀）

53号土坑墓　（第17図，第41図12・13，第104図１～16）

Ｃ区北端部中央で，47・54号土坑墓間で検出され，長軸1.33ｍ，短軸0.83ｍ，深さ34㎝を測り，長楕円形を呈する。長軸の延長の東南部，東南壁から約20㎝離れて，直径17㎝，深さ約20㎝のピットを有する。弥生土器は，土坑墓内堆積を覆うように発見されている。第41図12は，台付鉢、も

しくは高坏の台部で沈線による連弧文が施文されている。上部の割れ口は磨滅している。13は，鉢の体部下端で，沈線がめぐらされ，底部には布痕を有する。第104図１～16のうち，１は，甕の口縁部で，口端に縄文が施文され，口縁部にはヨコナデによる調整が行われ，体部上部には平行沈線がめぐらされている。10は，３条の平行沈線がめぐらされた蓋，13は，連弧文(交点を縦の沈線によって区切る)のモチーフを有する鉢，12は，口縁内湾する大型の鉢で，口縁部にヨコナデが加えられ，体部には直前段多条の縄文が施文されている。このような大型の鉢の場合，本遺跡例では片口付となること例が多く，本資料も片口が付く可能性がある。その他は壺の破片で，４・６・９・11は，同一個体と考えられ，体部上半のモチーフとして渦文ではなく，弧状文を組み合わせたモチーフと，重扇形文のモチーフを有し，沈線間は交互にミガキ・ナデとなり，ナデの部分は赤色塗彩が施されている。16の底部には，布痕を有し，穿孔の跡を示す剝離痕が観察される。（芳賀）

54号土坑墓　(第17図，第41図14，第104図17～36)

Ｃ区で53号土坑墓の西側に並ぶように検出されたもので，長軸1.28ｍ，短軸0.85ｍ，深さ43㎝を測る楕円形の土坑墓である。土坑の南東部に53号土坑墓と同様に，直径17㎝，深さ18㎝のピットを有する。ピットの断面形は逆三角形となる。規模や，形とも，隣接する53号土坑墓と大変似かよる。弥生土器は，土坑内堆積土の上部に集中して発見され，床面から約10㎝上までは全く遺物が発見されなかった。第41図14は，く状に外反する短い口縁部を有する壺で，口端，体部下半には縄文(直前段多条LR)が施文され，口縁の屈曲部及び内面の上部には，ヨコナデが施されている。体部上半の無文部には，上下２段にわたって５条の平行沈線がめぐらされ，平行沈線文帯は，沈線施文後，ヘラミガキが行われている。第104図17～36は全て壺の破片資料である。20は連弧文の施文された口縁部で，連弧交点にはコブが付けられ，口端，沈線間には植物茎(カナムグラ)の回転施文が行われている。19・34も，同一個体と思われ渦文モチーフの沈線間には一区画おきに植物茎の回転施文が充填されている。この偽似縄文施文部外の沈線間は，沈線施文後にミガキ調整が行われている。17は，体部文様帯直下の体部破片で，２種類の縄文が施文されている。文様帯直下には，細い縄文，それ以下には，太い縄文が施文され，縄文原体は共に直前段多条LR(３本撚り)である。24・29は体部上端部の破片で，渦文間の空白部には，三角文が充填されている。35は長頸壺の頸部で，雷文のモチーフを有し，それぞれの単位文様が，２本の沈線により連結されている。36の底部には布痕を有し，外面から内面へかけての穿孔による剝離痕を有する。（芳賀）

55代土坑墓　(第17図，第43図１・２，第105図１～10)

Ｃ区南半中央で56号土坑墓と並んで検出され，長軸1.41ｍ，短軸0.82ｍ，深さ32㎝を測り，長楕円形を呈する。土坑墓西端部は１号溝によって上半部が壊されている。弥生土器は，西半部の

土坑内堆積土上部に集中して出土しており，56号土坑墓のものと接合するものがある。第43図１は，体部球形を呈する壺で，体部上半には渦文が施文され，渦文部の沈線間は交互にミガキ・ナデとなっている。体部下半部には直前段多条の縄文が施文されている。２は，口縁部に56号土坑墓出土の破片が接合したもので，く状に外反する口縁を有する蓋で，体部上部に６条の平行沈線がめぐっている。第105図１～10のうち４は，口縁に縄文が施文された甕で，その他は壺の破片である。10の底部は穿孔が行われている。　（芳賀）

56号土坑墓　（第17図，第39図17，第43図３～５，第105図11～39）

Ｃ区で55号土坑墓と並んで検出されたもので，長軸1.40ｍ，短軸0.88ｍ，深さ38㎝を測り，長楕円形を呈し，規模，形とも55号土坑墓と似かよっている。弥生土器は，西半部の土坑内堆積土上部から中ほどにかけて集中している。第39図17は，蓋で，布痕を有し，体部末端に指頭圧痕，また体部中央には沈線が１条めぐらされている。第43図３は，無頸壺の口縁部で，３条の沈線をめぐらし，その下位に３単位の３条の沈線による連弧文を施文，さらに縦の沈線により分割している。沈線施文区画には，沈線施文後ミガキが行われ，それ以外の空間は，ナデ調整のままとなっている。４は，く状に外反する短い口縁を有する壺で，口端に縄文が施文され体部上端と，中央やや上には２段にわたって４条のヘラ描き沈線がめぐっている。沈線施文部位は，沈線を施文した後，ミガキがかけられている。口縁部及び，体部の２段の沈線文帯間は，文様施文以前のナデとなっている。５は口径25.8㎝の甕である。口縁く状に外反し，口端と体部に縄文が施文されている。体部上端には結節回転が施文されている。口縁部，及び内面の屈曲部までは，ヨコナデによる調整が行われているが，ナデによる条線は均一で，布等を用いているものと判断される。第105図11～39のうち，32・36・37は鉢，38・39は口縁部に沈線をめぐらした蓋で，その他は壺の破片である。32は，口縁部と体部との間が屈曲する鉢で，体部には重三角文を交互に組み合わせて施文している。14は，口縁部であり，４条の沈線をめぐらした下位に植物茎の回転施文を行っている。16は，口縁部にコブが付くが，沈線間には縄文が充塡されている。33は，口縁部に，縄文原体を斜回転施文して，条が縦に走るようにした資料である。体部破片では，弧状区画文(13)，渦文(12，15など)，重三角文(11，21，27，29，30)，雷文(19，26)のモチーフがあり，沈線間は，交互にナデ・ミガキとなっている。　（芳賀）

57号土坑墓　（第18図，第43図６～11，第106図，第157図83）

Ｃ区ほぼ中央で，72・82号土坑墓間で検出されたもので，長軸1.30ｍ，短軸0.82ｍ，深さ42㎝を測り，長楕円形を呈する。床面は，東から西側に向って，ゆるやかに高くなっていく。弥生土器は，西半部の土坑墓内堆積土上部から中ほどにかけて，折り重なるように出土しており，また西壁近くの床面からは，第157図83に示した，長さ1.62㎝，太さ0.41㎝の断面隅丸方形を呈する碧玉質の管玉が１点出土している。第43図７は，長頸壺の口縁部から体部上半の資料で，口縁部

に連弧文，頸部に３段にわたって沈線文帯を有している。６は，小型壺，９・11は鉢で11の体部下半には植物茎の回転施文による偽似縄文を有している。９は，偽似縄文(植物茎による)の施文された蓋である。第106図１・２・５・６・８は口縁部が受口状を呈し，ヨコナデ調整が加えられただけで，無文のものであり，８の口端には，１条の沈線を有する。４は，口端，口縁部に植物茎の回転施文による偽似縄文，頸部には沈線による連弧文を有する。20・22・23は，４の体部破片と思われ，渦文が施文され，沈線間は，一区画おきに偽似縄文が充填されている。18・28・29は，渦文の沈線間には細い細文が施文されている。24は，体部上端に結節回転が施文された甕である。26・32は，連弧文の施文された鉢，34・35は蓋で，口縁部に沈線がめぐらされているが，体部には，34は植物茎による偽似縄文，35では連弧文が施文されている。36の底部には布痕を有し，穿孔されている。　(芳賀)

58号土坑墓　(第18図，第42図１・２，第43図12～14，第107図１～23)

Ｃ区中央やや東寄りで検出され，長軸0.98ｍ，短軸0.78ｍ，深さ28㎝を測り，楕円形のプランを呈する。土坑墓の中央から東壁にかけて，土坑内堆積土の上部を中心に床面近くまで，弥生土器破片が出土している。第42図１は，口縁部に４条の沈線をめぐらし，体部に４条の沈線で連弧文を施文しており，沈線文帯はミガキ調整が行われている。２は，蓋で，沈線を連弧状に配して，重扇状文のモチーフを表出しており，沈線区画内は，交互にミガキ・ナデとなっている。第43図12は，甕の体部下半部資料で，底部に布痕を有し，穿孔されている。13は，口縁やや内湾する鉢で，片口付となる可能性があり，表面に炭化物が付着している。14は，口端に棒状具によるキザミを有し，体部に方形区画文が施文された鉢である。第107図３は沈線区画内に縄文が充填された鉢である。　(芳賀)

59・80号土坑墓　(第18図，第43図15，第107図24～33)

Ｂ・Ｃ区境で検出された土坑墓で，59号土坑墓を80号土坑墓が切っている。59号土坑墓は，長軸1.22ｍ，短軸0.73ｍ，深さ36㎝を測り，不整の長方形プランを呈している。80号土坑墓は，長軸0.72ｍ，短軸0.62ｍ，深さ31㎝の楕円形を呈している。89号土坑墓の床面は，北側から南側に向ってゆるやかに高くなっていく。第43図15は，59号土坑墓出土の壺である。口端から口縁上部にかけて縄文を施文し，口縁部には，連弧文が施文される。体部上端部には平行沈線を縦の沈線で区切った区画文を有し，それ以下は相対する渦文が施文されている。第107図24は，重三角文のモチーフを有する鉢，それ以外は，壺の破片資料である。80号土坑墓内からは，微細な弥生土器小破片が出土しただけである。　(芳賀)

60号土坑墓　(第18図，第43図16～19，第44図１，第108図，第157図82)

Ｘ区南端で検出された土坑墓である。長軸1.54ｍ，短軸0.56ｍの長楕円形を呈する。確認面から床面までの深さは55㎝を測る。堆積土は黒褐色土でパミス粒を含んでいる。長軸方向における

床面の傾きは，東側が高く西側が低い。遺物は，東側床面より太型の管玉が１点と人為的に破壊された土器片が出土している。第43図16は壺の口縁部で，横走沈線と連弧文の交わる所に瘤が付けられている。17は壺の口縁部で，口端に縄文の圧痕が施されている。18は長頸壺の頸の部分で，４本の横走沈線が上下に分かれて施され，頸部全体にミガキが施されている。19は壺の上半部で，口縁には刻目が施され，口端部内面には４本の平行沈線が横走している。口縁部にはヨコナデ調整が行われ，体部は，平行沈線が２段階に分かれ施文されている。この平行沈線の部分はミガキが施されている。第44図１は壺の体部で，体部上半は雷文様による相対する渦を形成しており，交互にミガキ・ナデが行われている。体部下端は直前段多条の縄文LRが施されている。渦文と縄文の間には，１本の沈線が横走し，上下を分けている。第108図１・27・28は壺の口縁部で，２～26・29は壺の体部，30は甕の体部と思われる。31・32は壺の底部と思われ，底部は穿孔，布痕がみられる。13・22・23はカナムグラによる磨り消しが，19は磨消縄文が行われている。第157図82は，碧玉質の太型管玉で，色は淡い緑色をしている。長さ3.14㎝，幅1.30㎝，孔径0.20～0.26㎝，重さ9.7ｇである。孔は両端からあけられている。　（小林）

61号土坑墓　（第18図，第44図，第45図１～５，第61図９，第62図５，第109図）

Ｘ区南端部60号土坑墓に近接して発見された土坑墓である。長軸1.55ｍ，短軸0.74ｍ，深さ37㎝を測り，長方形に近い長楕円形を呈する。南壁から15㎝離れたところには，直径15㎝深さ21㎝のピットがある。また北壁付近では，112号土坑墓と切りあっており，112号土坑墓の方が，61号土坑墓より古い。南壁付近及び，北壁付近の土坑内堆積土上部に弥生土器が集中して検出されている。特に第45図３の片口付の大型の鉢は，倒位で上面から発見されており，底部は，水田耕作によって欠失したものと思われる。器面の炭化物の付着が著しい。第44図２・４・５は，結節回転の施された甕で，口縁はヨコナデ調整が施されており，体部の縄文は直前段多条のLR（３本撚り）である。３は，く状に外反する短い口縁を有する壺で，体部中央部に最大幅を有する。口端に縄文を施文し，体部上端に５条の平行沈線をめぐらし，その下位は，無文部，結節回転を施文した地文の縄文となる。７は，長頸壺で，頸部に平行沈線をめぐらし，体部上半には相対する渦文を施文している。第45図１・２は渦文が施文された壺の体部上半の資料，４は，脚部に沈線をめぐらした高坏，５は，小型の長頸壺である。第61図９は，大型壺で弧状区画文が施文されているが，この部分の文様幅が右半部に比べて狭く，おそらく，渦文を４単位施文し，５単位目のところにこのようなモチーフを充塡したものであろう。第62図５は，61号土坑墓内南半部における土器集中個所から出土したものに，60・62号土坑墓出土の破片が接合した壺である。折り返し口縁を有し，口縁部には，刷毛目工具端による刺突が，羽状に施文されている。内外面とも，この工具による荒い刷毛目調整が施される。灰黄褐色を呈し，胎土中には長石を多く含んでいる。胎土・器型・特徴とも，本遺跡例では異質で，北陸系の弥生土器と思われる。第109図は，７・８・

19が鉢である他，全て壺の破片で，23～26の底部には布痕を有し，穿孔がなされている。(芳賀)

62号土坑墓　(第19図，第45図６～８，第46図１，第110図，第157図70)

Ｘ区の西端部において，62号土坑墓とともに並んで検出されたもので，長軸1.72ｍ，短軸0.91ｍの隅丸長方形を呈する土坑墓で，深さ33㎝を測り，床面は，西から東へ向ってゆるやかに高くなっている。土坑墓中央を中心に，上層部を中心に多量の弥生土器が出土しており，また，中央やや東寄りからは，第157図70に示した碧玉質の管玉が出土している。第45図６は，体部上半に沈線区画による重菱文，重三角文を組み合わせたモチーフを有し，８は，相対する渦文が施文された壺で，ともに沈線間は，交互にナデ・ミガキ調整となっている。７は，壺体発下半の資料で，底部穿孔されている。第46図１は，体部上半に，同一方向巻きの渦文が施文された大型の壺で，沈線間は，一区画おきに縄文が充塡され，遠く81号土坑墓出土の破片が接合している。破片資料は第110図に示した。４・13は，く状に外反する短い口縁部を有する壺で，体部上部に平行沈線が施文されており，13の口端には縄文が施文されている。15・22の底部には布痕を有し，穿孔による内側への剝離痕が観察される。　(芳賀)

63号土坑墓　(第19図，第42図３・４・８，第45図９，第47図１・２，第111図)

Ｘ区で62号土坑墓に隣接して検出されており，長軸1.35ｍ，短軸0.74ｍ，深さ31㎝を測り，隅丸長方形のプランを呈する。土坑墓内堆積土上部には，土坑墓中央部を中心に多量の弥生土器が出土している。第42図３は，長頸壺の口縁部から体部上端にかけての資料で，口縁部に６単位の連弧文，その交点にコブ，頸部には２段にわたって４条の平行沈線文が施文されている。頸部の沈線文帯間，及び口縁上部の半月状区画部及び下端の沈線区画内は最終的にミガキ調整が行われている。４は，５単位の渦文が施文された小型壺，８は，北壁に接して出土した壺で，やはり５単位の渦文が施文されている。４・８ともに沈線間は交互にミガキ・ナデ調整となっている。第45図９は，口縁外反し，体部に連弧文のモチーフを有する鉢，第47図１は高坏で，体部に連弧文を施文し，沈線文帯外の空間は赤色塗彩を行っている。脚部には，４単位の切り込みを入れ，平行沈線を２段にわたって施文している。脚端部はやや外側に広がる。２は，無頸壺の口縁部で，５単位の連弧文が施文されている。第111図１は，口縁部，体部間がやや屈曲する鉢で，口縁部には連弧文，体部には縄文が施文されている。２～11・13は同一個体の破片で，沈線間に植物茎回転施文による偽似縄文を有し，２のように小突起が付加されている。17は，弧状区画文，18には同心円文が施文されている。　(芳賀)

64・69号土坑墓　(第19図，第42図５，第47図４，第112図１～16，第114図25～34)

Ｙ区東側において，64号土坑墓と69号土坑墓が接した形で検出された。64号土坑墓は，長軸1.28ｍ，短軸0.64ｍの長楕円形を呈し，確認面から床面までの深さは42㎝を測る。堆積土は黒褐色土でパミス粒を含んでいた。長軸方向における床面の傾きはほぼ水平だが，若干北東側が高い。

図示資料について説明する。第42図５は蓋で，指頭によるおさえの調整が行われている。第47図３は壺の体部上半で，口縁部には６本の平行沈線が横走し，さらにミガキが行われている。体部は，相対する渦文が施されており，渦は植物茎(カナムグラ)の施文が行われている。４は長頸の壺の頸部から体部上端にかけて，頸部は上下端に平行沈線が施され，しかも平行沈線の間はミガキが行われている。体部は相対する渦文が施され，交互にミガキとナデが行われている。第112図の１は壺の口縁部で，２～13は壺の体部上半である。14～16は甕である。69号土坑墓は，長軸1.15ｍ，短軸0.66ｍの長楕円形を呈し，確認面から床面までの深さは，45㎝を測る。堆積土は暗褐色土でパミス粒を含んでいる。床はほぼ水平である。図示資料について説明を加える。第114図の26・27は壺の口縁部である。25・28～33は壺の体部である。34は壺の底部で，穿孔されている。また布痕も有している。　(小林)

66号土坑墓　(第19図，第42図６・７，第47図５～11，第112図17～25，第113図１～13)

Ｘ区中央付近で，112号土坑墓と切り合って検出され，長軸1.82ｍ，短軸0.86ｍ，深さ39㎝を測り，隅丸長方形を呈する。北西端部付近に直径32㎝，深さ28㎝のピットを有する。ピット断面形は逆三角形を呈する。床面は南から北へ向ってゆるやかに高くなっていく。中央部部にややまとまって弥生土器の出土があった。第42図６は蓋，７は，鉢の体部下半部で，沈線による連弧文が施文されている。第47図５は，長頸壺の口縁部，頸部の資料で，口縁部に連弧文，頸部は重方形区画文を施文している。６も，連弧文の施文された壺の口縁部である。７は長頸壺の頸部で，２段にわたって平行沈線がめぐらされ，器面には，沈線文帯，無文部ともにミガキ調整が行われている。８・９は，口縁部無文の長頸壺で，ともに口縁部にはヨコナデ調整が行われ，頸部には，平行沈線文がめぐる。10は，口縁部に連弧文，体部に渦文を施文した壺で体部文様は，５分割され，２個１単位の相対する渦文を施文し，余った１区画には，縦長の渦文を単独で施文している。11は，壺の底部と思われ，外側よりの穿孔がされている。第112図17～26は，全て壺の破片資料で，20の頸部には，各単位が連結する雷文，21～25の体部には，渦文が施文され，沈線間は交互にミガキ・ナデとなっている。第113図２～４は，沈線間に植物茎による偽似縄文が施文されており，62号土坑墓出土のものと同一個体と考えられる。６・９～13は，甕であり，９では口縁部に連弧文を有し，体部には，結節回転が施文されている。６・10の口縁部には，ヨコナデ調整が行われている。　(芳賀)

67号土坑墓　(第19図，第113図14～28)

Ｘ区で，61・66・112号土坑墓の東側に検出され，長軸1.26ｍ，短軸0.74ｍ，深さ50㎝を測り，不整の長楕円形を呈している。南壁の南側約30㎝のところに，直径12㎝，深さ25㎝のピットを有する。中央部上層から弥生土器が出土しており，第113図14～28に示した。14は，蓋で，口縁部に平行沈線が施文され，体部は無文となる。15は，連弧文の施文された鉢で，連弧交点は，縦の

沈線により区切っている。25・26は，口端，体部に縄文を施した甕で，口縁部が，外側に屈曲している。28の底部には，布痕を有し，外側より穿孔されている。これ以外は，壺の口縁部，体部破片である。　（芳賀）

68号土坑墓　（第20図，第114図１～24）

Ｘ区南東端部で検出され，長軸1.49ｍ，短軸0.71ｍ，深さ23㎝の隅丸長方形を呈する。弥生土器は，南半部を中心に出土している。１は，口縁部は３条の沈線をめぐらし，それ以下に縄文を施した鉢で，片口付となる可能性がある。５は，連弧文の施文された鉢で，これ以外は全て壺の破片資料であり，13・14の体部には渦文が施文されている。　（芳賀）

70号土坑墓　（第20図，第47図12～14，第115図）

Ｃ区中央南端部で，71号土坑墓に隣接して検出され，長軸1.19ｍ，短軸0.85ｍ，深さ31㎝を測り，隅丸長方形を呈する。東南コーナーに，直径17㎝，深さ26㎝の小ピットを有する。土坑墓の床面は，西から東へ向ってゆるやかに高くなっていく。弥生土器は，東半部上層に集中して検出しており，第47図12～14は，いずれも長頸壺である。12は，頸部に上下２段にわたって平行沈線文帯をめぐらし，体部には渦文を施文している。沈線文帯及び渦文の沈線区画間は，一区画おきにミガキ調整が行われている。13は，中型の長頸壺と思われ，口端に縄文を施文し口縁部には連弧文，頸部には，平行沈線文を施文しており，連弧文の交点にはコブが付加されている。14は，大型の長頸壺で，頸部上下２段にわたって平行沈線文帯，体部上半には，弧状区画文が施文されている。弧状区画文は，５単位施文されており，２単位一組で対弧文としており，余った１単位は，独立して施文されている。体部下半には，直前段多条の縄文LRが施文されている。第115図のうち，４は，く状に外反する短い口縁を有すぐ壺で，体部上端部に平行沈線がめぐらされ，口端には縄文が施文されている。８は，頸部破片で，舌状の突起を有する。32・34の底部には布痕を有する。　（芳賀）

71号土坑墓　（第20図，第46図２，第48図１～７，第116図，第157図76～81）

Ｃ区南半において70号土坑墓に隣接して検出されており，長軸1.48ｍ，短軸0.92ｍ，深さ42㎝を測り，隅丸長方形を呈する。西壁に接して直径18㎝，深さ27㎝のピットがある。ピット断面は逆三角形を呈する。床面は東から西へ行くに従い，高くなっている。弥生土器は，西半部を中心として集中して出土しており，西壁付近の床面からは，第157図76～81に示した淡緑色の碧玉質管玉が６点まとまって出土している。第46図２は，壺の体部上半部の資料で，相対する渦文が施文され，沈線間は交互にナデ・ミガキとなっている。第48図１・２は，壺の口縁部で連弧文と三角文が組み合わさっており，２の連弧文交点にはコブが付加されている。３は，体部上半部に相対する雷文が施文された壺で，沈線間は交互にミガキ・ナデとなっている。４・５は、長頸壺の頸部で，平行沈線がめぐらされ，４では，平行沈線を縦の沈線によって区切り，長方形区画文を

表出している。４・５とも沈線文帯，区画文内には，沈線施文後にミガキ調整が加えられている。７は，重三角文を組み合わせたモチーフを有する壺で，やはり沈線間は交互にミガキ・ナデとなっている。第116図30・31は，体部に連弧文のモチーフを有する鉢で，33は，渦文の施文された鉢で，内面に３条の沈線をめぐらし，口端にはヘラ状工具によるキザミを有している。26～28は，口端に縄文を施し，体部上端に結節回転を有する甕で，29は蓋，その他は壺の破片資料である。

（芳賀）

72号土坑墓　（第20図，第42図11，第117図１～13，第158図22）

Ｃ区中央やや南寄りで57・71号土坑墓間で検出され，長軸1.08ｍ，短軸0.77ｍ，深さ30㎝の楕円形プランを呈する。底面はほぼ平担であるが，西側の方がやや高くなっている。弥生土器は中央やや西寄りにかけて出土している。第42図11は土坑内堆積土上部で出土した長頸壺で，口縁部に連弧文を有し，連弧交点にはコブが付加されている。頸部には鍵形の区画文を有し，区画内は交互にミガキ調整が行われている。第158図22は，床面より５㎝ほど上位で出土した大型の甕であり，一部55・56号土坑墓出土の破片が接合している。推定口径40㎝ほどと考えられ，口端に縄文と部分的にキザミが施され，体部には，２段の縄文原体の結節回転を施し，体部全面にわたって直前段多条の縄文(LR)が施文されている。口縁部にはヨコナデによる調整が行われ，内面上端部には縄文と沈線が１条施文されている。第117図１～13のうち，６・11が甕である他，全て壺の破片である。３の沈線間には細い縄文が充塡されている。（芳賀）

73・75号土坑墓　（第20図，第42図10・12・13，第48図８～16，第49図１～５，第117図14～34，第118図，第120図１～16，第157図84～103，第158図１～15）

Ｃ区北西端部で検出されたもので，75号土坑墓を73号土坑墓が切って作られている。73号土坑墓は，長軸2.00ｍ，短軸0.62ｍ，深さ24㎝の隅丸長方形プランを呈する。75号土坑墓は，長軸1.31ｍ，短軸0.61ｍ，深さ22㎝の長楕円形を呈する。73号土坑では土坑墓を覆うように多量の弥生土器の出土があったが，東半にやや集中する傾向がある。床面は，西から東へ向ってやや高くなっており，東半部の床面からは，第157図84～103，第158図１～15に示した35点の管玉が密集して出土している。色調は全て淡緑色で，大変脆い特徴がある。したがって欠損しているものは，埋葬時の人為的な破損ではなく，調査時の欠損と考えられる。第42図10は，無文の鉢で，底部には外側よりの穿孔が行われている。東壁近くの床面から出土している。12は，指頭圧痕を残す蓋，13は，体部に植物茎による偽似縄文を施文し，底部が穿孔された鉢である。第73図８は，長頸壺で，口縁受口状を呈し，器面は，ヨコナデによる調整が加えられ，頸部には上下２段にわたって４条の平行沈線を施し，沈線文帯は，ミガキ調整が行われている。９は，体部に渦文が施文された甕である。口端に棒状具によるキザミを有し，体部上部には長方形区画文を有している。渦文部の沈線間は，交互にミガキ・ナデとなり，ナデの部分には，赤色塗彩が施されている。また，内面に

も４条沈線をめぐらしている。10・14は連弧文のモチーフを有する鉢で，10の内面には３条の沈線が施文されている。11は長頸壺であり，口縁部に連弧区画文，頸部には，長方形区画文と雷文，体部には渦文を施文している。体部の渦文は，相対する渦文となり，沈線間は交互のミガキ・ナデとなり，ナデの部分には赤色塗彩が施されている。同様に12・13・15の沈線間のナデの部分にも赤色塗彩が施されている。16は，体部に１号住居跡出土の破片が接合した壺で，相対する渦文のモチーフを有している。第49図１は，壺の体部下半部の資料で，文様帯には渦文が施文され，文様帯直下は，植物茎による偽似縄文，それ以下は直前段多条の縄文となる。底部は穿孔されている。２は，長頸壺で，頸部に２段の沈線文帯を有しており，５は，渦文のモチーフを有する壺で，沈線間のナデの部分には赤色塗彩が施される。３・４は，壺の体部下半であり，底部には布痕を有し，穿孔されている。第114図19～21は，同一個体の壺で，方形区画のモチーフを有し，区画外には，細い縄文が充塡されている。22は，重三角文のモチーフを有する壺の体部で，沈線間には，１区画おきに，植物茎の回転施文が行われている。24～26・29は壺の同一個体で，文様帯直下には植物茎による偽似縄文が施文され，それ以下は，縄文となっている。27は，く状に外反する短い口縁を有する壺で，体部上半部には２段にわたって鋭い沈線をめぐらし，上下の沈線文帯間に，等間隔に縦の沈線を施文している特徴あるものである。第118図14～16，18～20は，口端に縄文を施文し，体部に結節回転を有する甕で，17は，同様な施文を有する壺である。23～26の底部は，外面より穿孔されている。75号土坑墓出土の弥生土器は，第120図１～16に示した。全て壺の破片であり，４の口縁部には，植物茎による偽似縄文が施文されている。

（芳賀）

74号土坑墓　（第21図，第42図14～18，第49図６～８，第119図）

Ｃ，Ｘ区境で，73号土坑墓に隣接して検出されており，99号土坑墓と切り合っている。長軸は現存長で，1.38ｍ，短軸0.84ｍ，深さ36㎝を測り，長楕円形プランを呈している。74号土坑墓は，99号土坑墓より古く，後者が前者を切っている。弥生土器は，土坑内堆積土上部を中心に出土している。第42図14・15は，坩状を呈する鉢である。14では，上半部に沈線区画による雷文のモチーフを有している。沈線区画のナデの部分には赤色塗彩が施されている。16は，く状に外反する口縁を有する壺で，口端には縄文が施文されている。17は，小型の長頸壺の頸部で，２段にわたり，平行沈線が施文されており，沈線間は，ミガキ調整が行われている。18は，蓋で，口縁部に平行沈線をめぐらし，底部近くには，指頭圧痕がめぐっている。底部は高台状となり無文となっている。第49図６は，壺の口縁部で，口端，口縁部に全面にわたって縦方向の植物茎による偽似縄文を施文している。７・８は壺の口縁部で沈線による連弧文が施文されており，沈線間は交互にミガキ・ナデとなっている。第116図は破片資料である。このうち，23・27・31は口端に縄文，体部に結節回転を施文した甕であり，その他は壺の破片である。１・２は，壺の口縁部で，連弧文

が施文されている。体部モチーフとして渦文が顕著に認められ，沈線間は交互にミガキ・ナデ調整となっている。37・38は底部で布の圧痕を有しており，外内より，内面への穿孔による剝離痕を有している。（芳賀）

76号土坑墓　（第21図，第62図１，第120図17～41，第121図）

Ｃ区北東端部で検出したもので，長軸1.92ｍ，短軸0.72ｍ，深さ34㎝を測り，隅丸長方形プランを呈する。床面は，短軸断面では平坦であるが長軸断面では東から西へ向って傾斜しており，東側が高く，西側が低い。弥生土器は，土坑墓全体を覆うように出土している。幾分東半部に集中する傾向がある。床面での完形土器の副葬は観察されなかったが，西壁際の土坑内堆積土上部において完形小型壺の出土があった。図版(44)の５に示したもので，く状に外反する径の狭い口縁を有し，体部上半部には３単位の重三角文のモチーフを有している。重三角文の沈線区画内の一区画おき，及び体部下半部には植物茎(カナムグラ)による偽似縄文が施文されている。底部には布痕があり，口縁部は一部欠損しているが，欠損面は磨滅している。土器の出土状況を観察してみると，ほぼ正立した状態で置かれており，供献されたものと判断される。第62図１は，壺の口縁部から体部上半にかけての資料で，口縁部には連弧文と三角文を組み合わせたモチーフを，体部上半には渦文が施文されている。口縁部，体部上半ともに沈線間は一区画おきに赤色塗彩が行われている。第120図17～41，第121図は弥生土器の破片資料である。第120図17～41は壺の口縁部，頸部である。口縁部には連弧文，頸部には平行沈線文を施文したものが多い。19～22の連弧文交点にはコブが付加され，19の沈線間，27の口端には，植物茎による偽似縄文が施文されている。第121図27は，結節回転の施文された甕，28は蓋でありその他は壺の破片である。体部モチーフとしては，鍵状区画文(3)，渦文(19)，同心円文(５・12)がある。25・29・30の底部には，布痕を有し，体部下端部にヘラナデによる調整が施され，また穿孔されている。（芳賀）

77号土坑墓　（第21図，第42図19・20，第49図９，10，第50図１，第122図）

Ｘ区北端で検出されたもので，長軸1.94ｍ，短軸0.81ｍ，深さ39㎝を測り，隅丸長方形プランを呈する。東壁から約15㎝離れたところに直径17㎝，深さ25㎝のピットを有する。床面は、傾斜しており，西側より東側の方が高い。弥生土器は東半部に集中して発見されている。第50図１は，小型壺で，上半部が77号土坑墓の東壁近くの床面から，下半部が，78号土坑墓の東壁近くの床面から出土して互いに接合したものである。口縁部に５条の平行沈線文をめぐらし，体部上半部には３単位の連弧文によるモチーフを有する。文様帯下部や，体部下半には，植物茎による偽似縄文が施文されている。第42図19・20は蓋で，20の体部には植物茎による偽似縄文が施文されている。第122図１～５は，小波状の口縁を有し，内・外面に沈線を施した鉢である。６～９は，器形としては，く状に外反する短い口縁を有する壺の体部上半部の資料で，体部上端部と中央やや上に平行沈線文をめぐらし，その両者間に縦方向の沈線を配している。その他，24が蓋，30が鉢

の体部下半の資料である。　（芳賀）

78号土坑墓　（第21図，第50図１，第123図）

Ｘ区東北部で，77号土坑墓に隣接しており，長軸1.60ｍ，短軸0.81ｍ，深さ37㎝の長楕円形を呈する。東端部で99号土坑墓と切り合っているが，新旧関係は不明である。弥生土器は，東半部に集中して発見されている。床面では前述したように77号土坑墓床面出土のものと接合する小型壺の下半部（第50図１）が出土している。第123図は26の鉢を除いて全て壺の破片資料である。体部モチーフとしては３・４のような弧状区画文の他，渦文が一般的である。25では，体部文様帯直下に植物茎による偽似縄文が施文されている。　（芳賀）

79号土坑墓　（第21図，第49図11，12，第50図２～８，第51図１～７，第52図，第124図）

Ｃ，Ｘ区境で検出され，99・104号土坑墓と切り合っている。新旧関係は99・104号土坑墓より79号土坑墓の方が古い。長軸1.04ｍ，短軸0.86ｍ，深さ31㎝を測り，楕円形プランを呈している。土坑内堆積土上部から床面近くまで多量の弥生土器の検出があった。第49図11は，壺の体部上半の資料で渦文が施文されている。12は長頸壺で，口縁部にヨコナデを施し，頸部には，上下端に２段にわたって沈線文帯をめぐらし，体部には渦文を施文している。第50図３は長頸壺，４・５はく状に外反する短い口縁を有する壺で，口端に縄文が施文され，体部上端部には４が５条，５が３条の沈線をめぐらしている。７・８は長頸壺で，７は，口縁部，頸部に平行沈線をめぐらしたのち，縦の２本の沈線で分断して長方形区画文を表しており，区画内は沈線施文後にミガキ調整が行われている。８は口縁部にヨコナデ調整の施された長頸壺で，頸部には２段にわたって沈線文帯をめぐらしている。２は，長頸壺で，頸部に平行沈線をめぐらし，体部上半には渦文，下半部には，植物茎による偽似縄文を施文している。第51図２～４は鉢である。２・４ともに体部には連弧文が施文され，４の口端にはキザミを有する。５は，連弧文の施文された高坏である。第52図１は，口縁部にヨコナデ調整がなされ，頸部に長方形区画文を施文した長頸壺，２は，渦文が施文された壺体部上半部の資料である。３は，外反する短い口縁部を有し，体部には，縄文と結節回転を施文した壺である。４・５の体部下半部の資料では，底部に布痕を有し，穿孔は認められない。７は，同心円文のモチーフの中心に弧状区画文を有しており，10の渦文と同様に赤色塗彩が行われている。９は長頸壺であり，口縁部に連弧文，頸部に平行沈線文，体部に渦文を施文している。口縁部から体部上端部にかけての沈線間には，植物茎による偽似縄文が充填されているが，渦文間の偽似縄文の施文は認められない。第124図26・27は甕，29・30は鉢，31～33は蓋の破片である。その他は全て壺の破片資料であり，21・25はく状に外反する短い口縁部を有し，体部上半部に２段にわたって沈線文帯をめぐらした壺と考えられる。28・34は底部は穿孔されている。　（芳賀）

82号土坑墓　（第22図，第53図９，第126図１～26）

Ｃ区中央で57号土坑墓に隣接して検出されており，長軸0.81ｍ，短軸0.66ｍ，深さ21㎝を測り，楕円形プランを呈する。一部，１号溝によって壊されている。弥生土器は中央やや東寄りで若干出土している。第53図９は甕であり，口端と体部上端部に縄文を施文し，体部上端には結節回転を施文している。第126図１～20のうち14は片口付の鉢であり，12も別個体であるが鉢で，やはり片口が付くと思われる。この２点以外は全て壺であり，３の沈線間には，植物茎による偽似縄文が施文されている。（芳賀）

83・107号土坑墓　（第22図，第51図８～12，第53図10・11，第54図１・２，第127図）

Ｃ区のほぼ中央部で，83号土坑墓が107号土坑墓を切った形で検出された。83号土坑墓は，長軸約0.86ｍ，短軸約0.65ｍの不整楕円形を呈するものと思われ，確認面から床面までの深さは約37㎝を測る。堆積土は黒褐色土でパミス粒を含んでいた。長軸方向における床面の傾きは，東側が高く西側が低い。次に図示資料について説明する。第51図８・12は長頸壺で，８は口縁端に縄文の圧痕が施されている。８・12共に頸部全体にミガキが行われている。９～11は無頸壺で，９は「エ」字文のモチーフが口縁部に施され，10は口縁端にキザミが施されている。11は，口縁部に平行沈線，体部に相対する渦が施文されている。13は高坏である。第53図10・11は長頸壺で，体部上半に「Ｃ」と「コ」の組み合わせによる文様を施している。第54図１は小型の甕で体部上半は三角文と「Ｄ」文が組み合わさって施されしかも磨消縄文法がとられている。２は甕の口縁部である。107号土坑墓は長軸1.10ｍ，短軸0.64ｍの長方形を呈し，深さ42㎝を測り床面は，ほぼ水平である。（小林）

84号土坑墓　（第22図，第54図３～５，第128図）

Ｃ区中央部南寄りで検出された土坑墓である。長軸1.07ｍ，短軸0.75ｍの長楕円形を呈する。確認面から床面までの深さは35㎝を測り，堆積土は黒褐色土でパミス粒を含んでいた。長軸方向における床面の傾きは，やや東側が高く，西側が低くなっている。次に図示資料について説明する。第54図３は長頸壺の体上半部で，頸部は上下端に分かれて沈線が横走し，体部は雷文における相対する渦文を形ち造っている。４は口縁部に連弧文のモチーフと扇形を組み合わせた文様を施文し，口縁部と頸部の境に長方形を施文，頸部は雷文による相対する渦文を施した壺の口縁部から頸部にかけての資料である。３・４共に文様はミガキとナデが交互に行われている。第128図１～９，11～13・17・32・36は壺の口縁部で，10・14～16，18～24，26～29，31・34は壺の体部，35・36は壺の底部，25・30は甕の口縁部，33は甕の口縁である。30は小型の甕もしくは鉢になる可能性もある。（小林）

85号土坑墓　（第22図，第51図14～16，第54図６～10，第129図）

Ｃ区南西部で検出されたもので，長軸1.10ｍ，短軸0.68ｍ，深さ39㎝で楕円形プランを呈し西

壁中央やや南寄りに直径26㎝，深さ16㎝のピットを有する。弥生土器は，北半部を中心として出土している。第51図14は，連弧文のモチーフを有する鉢で，区画的に縄文が充填されている。15は，重三角文のモチーフを有する壺で，体部には偽似縄文が施文されている。６は，体部に，縄文を充填した同じ方向巻きの渦文を７単位施文した長頸壺で，体部には，上下に細いものと太いものの２種類の縄文原体を用いている。７は，雷文の施文された壺，８～10は，長頸壺の頸部から上の資料である。（芳賀）

86号土坑墓　（第22図，第130図１～19）

Ｃ区南西部で検出された上面は長辺0.75ｍ，短辺0.58ｍの隅丸方形の土坑墓である。深さは24㎝である。床面は長軸0.61ｍ，短軸0.42ｍの楕円形である。長軸は東北東から西南西へ延びている。プラン上面からは弥生土器の出土があったが，土坑墓内では，ほとんど検出されなかった。第130図１～19は，86号土坑墓出土弥生土器である。１～４・８は壺の口縁部である。１は，無文でヨコナデが施されている。頸部には横走する３本の沈線を有する。口唇部にはミガキがある。２は，口縁が直立した器形となる。口端には縄文を有し，３本の沈線と，５条の柵状文によって文様が構成されている。３・４は，連弧文を有する。８は，括れが浅く，口縁部が立ち上がる。６本の横走する沈線を有する。15は，甕の口縁である。口唇部には，縄文を有し，頸部には結節縄文によって体部を画する。７は体部で軟体状の馬蹄形文を有する。14・16は，口縁が外反する型の壺の体部で，横走する集合沈線により，縄文部を画する。17は鉢で，連弧文を有する。19は，体部下半で，底部穿孔がなされている。底部には布痕を有する。（丹野）

87号土坑墓　（第22図，第130図20～31）

Ｃ区中央部南側で検出された土坑墓である。長軸0.75ｍ，短軸0.60ｍの不整円形を呈する。確認面から床面までの深さは34㎝を測る。堆積土は黒褐色土でパミス粒を含んでいた。床面の傾きは，東側が若干高く，西側が低くなっている。堆積土上面で約20㎝×10㎝の河原石が出土しており，その石のまわりから土器片も出土している。この河原石が意識的に入られたものか偶然的なものかは明確ではないが，Ｄ区の26号土坑墓からも出土している（床面で出土）ことから，検討していかなければならないものである。次に遺物について説明する。第130図21は甕の口縁部で，口縁端に縄文の圧痕が施されている。23・26・27は壺の口縁部で，26は口縁部に縄文・弧文の中にも縄文が施されている。20・22・24・28～31は壺の体部で，20・25・29は細かい縄文を用いた充填縄文が見られる。（小林）

88号土坑墓　（第23図，51図17，第54図11・12，第55図１～５，第57図１～５，第131図）

Ｙ区東北端部で89号土坑墓と並んで検出され，長軸1.89ｍ，短軸0.82ｍ，深さ41㎝を測り，隅丸長方形プランを呈する。南壁から約15㎝離れたところに直径15㎝，深さ28㎝のピットがある。床面は短軸断面では平坦であるが，長軸断面をみると傾斜しており，南の方が北より高い。南壁

から約20㎝離れた床面から第51図17の完形小型壺が出土している。高さ15㎝ほどの大きさで，口端に縄文を施文し，重三角文のモチーフを組み合わせて施文し，沈線間には縄文が充塡されている。これ以外の弥生土器は，堆積土上半より密集して出土している。第54図11・12は，ともに似た器形の壺で，口縁部に連弧文のモチーフを有しており，体部には渦文されている。第55図１は，渦文を有する壺で，口縁部の連弧文間及び，渦文の沈線間には赤色塗彩が施されている。また体部には直前段多条の縄文原体(LR)を用いた縄文が施文され，底部には布痕を有し穿孔されている。２・３は長頸壺で，受口状の口縁部には３条の沈線がめぐり，頸部には，２では長方形区画文，３では，上下２段の沈線文が施文されている。４は，渦文の施文された壺，５は，重三角文も組み合わせたモチーフを体部上半部に施文した壺で，文様単位は，この種のモチーフの場合に一般的な３単位である。沈線間は，交互にミガキ・ナデとなっており，ナデの部分には赤色塗彩が施されている。第57図１は体部上半に重三角文のモチーフを有する壺で沈線間には縄文が充塡されている。２は連弧文を施文した鉢であり，赤色塗彩が施されている。第131図では，29・30・33が鉢，25～27・31・34が甕であり，その他は壺の破片資料である。22の沈線区画内に植物茎による偽似縄文を充塡した壺は，40号土坑墓出土の第61図11と同一個体のものと判断される。また，６・７・1～14でも，沈線間のナデの部分に，植物茎による偽似縄文が施文されている。

（芳賀）

89号土坑墓　（第23図，第46図３，第55図６～９，第56図，第132図，第133図）

Ｃ区南西端で検出された上面が，長軸1.73ｍ，短軸94㎝の方形に近い長楕円形土坑墓である。長軸は，南東から北東に延びている。南東部施に，上面径18㎝のピットがある。土坑墓の深さは，42㎝で床面が、やや上げ底気味に高くなる。床面形は，長楕円形で長軸1.51ｍ，短軸0.73ｍである。弥生土器は，上面でプランが確認困難なほど多量に出土し，土坑墓内では東南部に偏って発見された。第46図１は，中型の長形壺である。頸部は横走する２本の沈線と，縦の短い沈線によりアミダ状を呈している。一間隔ごとにミガキを有する。体部は渦文である。第55図６・７は長頸壺である。横走する沈線と連弧文により文様が構成される。６は５単位，７は７単位で，瘤と三角文を有する。８は高坏で，４本の横走する沈線を有し，ミガキが施されている。内部は，台部まで空洞となっている。９は無頸壺で，口縁に横走する４本の沈線を有する。体部は渦文で構成され，間を三角文と２本の平行沈線でつないでいる。第56図３・４・９は甕である。３・４は口縁が外反し，口端に縄文を有する。頸部はヨコナデ，結節縄文で，体部縄文施文部を画する。縄文は直前段多条の縄文LRである。９は口縁部が内湾する。口端には，縄文が施される。体部はすべて縄文が施されている。１・８・10・12は壺の体部である。１・10・12は渦文を有しそのうち１・12は，ミガキと赤彩が交互に施される。10は一つおきにミガキが施される。渦文は相対している形態で，10は６単位，12は５単位である。８は「コ」状文や「ヨ」状文の組み合わせにより，

幾何学文様を構成する。文様は赤彩され，その間は磨きが施されている。５・７は壺の口縁である。５は赤彩が施され，横走する４本の沈線による柵状文が，４単位施されている。６は高坏で赤彩されている。７は高坏状の土器で，基部に横走する３本の沈線，台部外側に，渦文を思わせる円弧文が施される。基部の沈線には，ミガキを有する。第68図６は，小型の無頸壺で，体部は５単位の渦文で構成されている。７は長頸壺の口縁で，口唇部には縄文を有し，７単位の連弧文と平行沈線によって文様を構成している。８は小型の壺で，４本の横走する沈線による連弧文と柵状文，平行沈線文を混成して６段に構成している。第58図１は長頸壺で，４単位の連弧文により構成される。連結部は瘤を有する。頸部は，４単位の重四角文が施される。第89図１～22は口縁部である。２・７・17は口端に縄文を有し，18はキザミを有する。口縁部文様は，連弧文と様走する沈線文により構成されている。第132図25～33は，体部上半である。26は方形状の渦文で，一本おきにミガキを有する。29は頸部に，相対する方形状渦文が２単位構成されている。第133図１～10も体部上半である。４・６は方形による幾何学文で，一つおきに縄文が施されている。５・７・９は，縄文施文部との境目であり，植物茎による施文を有する。11～15・17・18は甕の口縁である。14・15・17・18の口端は縄文が施され，頸部と縄文施文部を，結節縄文で画する。13は口端近くに結節縄文を有し，片口鉢と思われる。16・19・21・23・24は，鉢である。19は連弧文を有し，その間に三角文を施している。23・24は，４本の沈線による連弧文を有する。21は口端にキザミが有り，その直下に４本の横走する沈線を有する。25は蓋で，裾に４本の沈線を有する。22・26～28は，体部下半から底部である。26・28は穿孔されている。底部はすべてに布痕を有する。（丹野）

90号土坑墓　（第23図，第58図２～４，第134図）

Ｄ区北端で検出された長軸1.41ｍ，短軸0.68ｍの隅丸方形の土坑墓で，長軸が東南東から西南西に延びている。深さは40㎝である。土坑墓隅に，ピットが付随する。上面径は，約30㎝の不整円形で，断面は逆三角形である。第58図２は鉢である。口端にはキザミがあり，内面には２本の沈線が横走する。体部は，同方向の渦文が施される。３・５は小型壺で，頸部に５本一組の平行沈線が２段に施されている。３の体部は５単位の渦文で施文されていると推定される。第134図１～４は口縁部である。１は無文で口端を磨いている。２は連弧文を有し，口端部にキザミがある。３は植物茎による施文を有し，頸部に２本の沈線がまわる。４は頸部に相対する雷文があり，体部上半は重三角文が施されている。17・21は鉢で，17は連弧文，21は雷文が施されている。22は壺の体部上半で，左右に相対する重「Ｃ」字状文が施される。24・25・28は底部で，28は穿孔され，布痕を有する。（丹野）

91号土坑墓　（第23図，第57図６，第135図１～17）

Ｃ区南端で検出された長軸0.77ｍ，短軸0.66ｍの楕円形土坑墓で，長軸は北東から南西に延び

ている。深さは34cmである。北東端にピットがある。上面径約15cmの不整円形で、土坑墓と切り合っている。破砕土器集中が，ほぼ中央に見られた。床面は，ピット方向に上傾している。第57図１は，高坏の脚部である。棒状を呈し，接地面がややふくらむ。４本一組と３本一組の平行沈線文が，３組あり，ミガキが施される。沈線文間は赤彩されている。第135図１～17は，92号土坑墓出土土器である。１・７は，壺の口縁である。１は，植物茎による施文らなされている。７は，口端付近には，３本の沈線が横走する。２～６・８～12は体部上半である。11は，体部下半の縄文部との境で，沈線の上に縄文を施している。16は鉢で，連弧文を有する。13・15は体部下半で，直前段多条の縄文LRである。14・17は，底部で，穿孔されている。　（丹野）

92・100号土坑墓　（第23図，第46図４，第57図７～10，第58図５～11，第59図１～４・５，第135図18～37，第136園）

Ｘ区東端からＣ区西端にまたがる位置で検出され，西面は，長軸1.72ｍ，短軸0.89ｍの楕円形の土坑で，100号土坑墓に北端を切られている。深さは39cmで，床面は，平坦である。南端に，この土坑に附随すると考えられるピットがある。上面径は40cmの不整円形で，断面は，円錘形である。ピット内堆積土は，黒褐色土で，炭化物を含んでいる。92号土層内の中方で，弥生土器の集中が見られる。100号土坑墓は，上面の長軸1.17ｍ，短軸0.72ｍ，深さ38cmの，不整楕円形の土坑である。長軸は，南東から北西に延びている。床面は，南東がやや高く傾斜している。100号土坑墓内の層は１層で，砂質の暗褐色土である。第58図５～10，第135図18・37，第136図は，92号土坑墓出土土器である。第58図５は口縁部が外反した壺で，口端には，太い棒状の施文具でキザミを施している。内面は，３本一組の平行沈線によって３分割されている。また，頸部には指による押圧痕が残っている。体部には，上段が，５本一組，下段が６本一組の平行沈線を縦走の沈線によって，分割されている。体部は，全面にミガキがかけられている。６は甕である。口端に縄文が施され，結節縄文により頸部と体部を画する。体部縄文は，直前段多条の縄文である。口縁部内面を磨いている。７～８・10は壺である。口縁部は，連弧文を有し，連結部には瘤を貼りつけている。７は，４本一組の連弧文で文様は４単位ある。８は，４本一組，５単位である。口端部は，太い棒状施文具によるキザミがある。10は，連弧文が２段になっており，間を三角文が埋める。５単位である連弧文には，植物茎による施文があり，その間は磨かれている。９は，体部下半で，縄文は直前段多条の縄文LRで，一部赤彩痕が見られる。11は，無文の小型の壺であり，体部全面を磨いている。第135図，第136図１～２・４～12は，壺の口縁部である。第135図35は，外反する小型壺で，頸部に横走する３本の沈線がめぐる。１～２・７・９・10は，連弧文である。弧線と弧線の間を三角文で埋めている。１・９は，連結部に瘤を有する。７の口端には，植物茎による施文が見られる。９は口端にキザミがある。８は，３本一組の集合沈線による連弧文である。４・11は，植物茎による施文で，頸部に４本の沈線が走る。５は，４本一組横走

する沈線文で，縦走する２本の沈線によって分割されている。沈線部は磨かれており，他は植物茎によって施文されている。６は，瘤にキザミを有する。12は，３本の等間隔の平行沈線によって施文されている。口端は布によるナデが残る。３は，鉢で３本一組の集合沈線による連弧文と４本一組の平行沈線により文様が構成されている。13～24は体部上半である。13・15～17・19～22は渦文で，一つおきに磨かれている。14は，５本一組の平行沈線文を２段有する。17・18は，平行沈線を，２本一組の縦走する沈線によって区画した幾何学文様を有する。24は，重三角と逆三角の連携文である。25～27は甕である。26・27は，口端に縄文を施している。27は，頸部を結節縄文で体部と画している。28～30は底部で布痕がある。28は小型壺，29・30は大型壺である。大型壺は底部を穿孔されている。第57図７・９は蓋形土器である。７は裾で３本の沈線が廻り，その間を磨いている。約40度で立ち上がっている。体部は無文で，底部横に指頭による押圧痕がある。８は，小型の無頸壺で，口端にはキザミを有する。口縁部には，５本の沈線を有し，うち４本までミガキがかけられている。体部には４本の沈線が廻り，うち３本まで磨かれている。第46図４，第59図１～３・５，第141図１～22は，100号土坑墓内出土土器である。第46図４は，壺の体部である。体部上半は，相対する５単位の渦文，下半部は縄文が施されている。渦文の間には，三角文で埋められている。渦文及び三角文は，磨かれている。第59図１は，無文の大型壺で，底部穿孔されている。口縁部は，４単位の連弧文と三角文により文様が構成されて，口端より赤彩とミガキが交互に施されている。口縁のくびれた所には，４本一組の平行沈線が廻り，沈線間は磨かれている。体部上半は，５単位の相対する渦文があり，赤彩と磨きが交互に施される。体部中央は，渦と渦の間に三角文その下に２本の平行沈線を施し，下半部の縄文と，その区画している平行沈線直下の縄文の部分には，赤彩が横走している。２～３は長頸壺である。２の頸部は，３本一組と４本一組の横走する沈線を２本一組の縦の沈線により分割され，その隙間を植物茎によって施文されている。体部は，５単位の渦文である。３の頸部は、相対する２つの方形の渦文が，一組となって文様を構成しており，それが２単位有する。体部は５単位である。５は，大型壺の体部で，４単位の渦文を有する。渦と渦との間は，重三角が埋まる。第141図１・２・４・５は，壺の口縁である。１の口端は，キザミを有し，外側は連弧文が施されている。２は，口端に植物茎によって施文され，下に３本の沈線が横走する。４～５は，口端に縄文が有り，下に４本の沈線がめぐる。６～22は，体部である。大半が渦文であるが，19は重三角文を連結して文様を構成しており，21は，方形の相対する渦文による構成である。（丹野）

94号土坑墓　（第24図，第138図１～11）

Ｂ区北端で検出された。上方は長軸1.17ｍ，短軸0.74ｍの楕円形である。深さは18㎝と浅い。長軸は北西より南東に延びており，床面は南東部がやや高く傾斜している。プラン確認面上面で，土器片を多少検出している。第138図１～11が94号土坑墓出土土器である。１は小型壺の口縁で，

４本の平行沈線を有する。２～７は，体部上半で，２・５～７は渦文であり，一つおきに磨かれている。３は，３本一組の集合沈線による三角連係文で，４は重三角係文である。８～11は体部下半で，縄文は直前段多条の縄文LRである。（丹野）

95号土坑墓（第24図，第58図12，第138図12～36）

Ｘ区東半部において，検出した土坑墓である。長軸1.70ｍ，短軸0.90ｍ，深さ36㎝を測り，長楕円形を呈する。北壁東端部近くに直径18㎝，深さ24㎝のピットを有する。第58図12は体部に渦文を施文した壺である。第138図18・27は，文様帯直下に植物茎による偽似縄文を施文した壺で，32・33は鉢，35は甕である。（芳賀）

96号土坑墓（第24図，第58図13・14，第139図１～16）

Ｘ区に東端部において，15号土坑墓に接して検出されたもので，長軸0.77ｍ，短軸0.48ｍ，深さ32㎝を測り，楕円形を呈する。第58図13は，口縁部に連弧文を有し，体部上半には平行沈線文下半部には植物茎による偽似縄文を施文した鉢，14の底部には布痕を有する。第139図は，11が鉢，13が甕である他，全て壺の破片で７の文様帯下端には，植物茎による偽似縄文が施文されており，95号土坑墓第138図18・27と同一個体と考えられる。（芳賀）

97号土坑墓（第24図，第139図17～28）

Ｂ区東端で検出された。上面は長軸1.42ｍ，短軸0.71ｍの隅丸長方形のプランを呈する。深さは57㎝である。弥生土器は，長軸南東部隅に集中して出土しており，床面もやや高く傾斜している。壁面は緩やかに立ち上がっている。第139図17～28は，97号土坑墓出土土器である。18は，壺の口縁である。３本の沈線がめぐっている。19～23・25・28は，壺の体部で渦文が施されている。22・25は，渦の間を２本の弧状の沈線で結んでいる。24は，小型壺の頸部で４本の沈線を有する。26・27は鉢である。26の口唇部には，植物茎による施文を有する。口縁には，４本一組の平行沈線と３本一組の連弧文が施され，その間を植物茎による施文によって埋められている。27は，口端にキザミを持ち，連弧文を重三角文の連係文が，２段に施されている。（丹野）

98号土坑墓（第24図，第58図17・18，第140図１～18）

Ｘ区東隅に位置し，96号土坑墓によって東端を切られている。上面プランは不整楕円形を呈し，長軸1.26ｍ，短軸0.58ｍ，深さは32㎝である。プラン上面では，多量の弥生土器に覆われていた。土坑内ℓ1層の，土器集中は東隅に偏る。床面は東隅が高く傾斜しており，西隅の壁面は，緩やかに立ち上がっている。第58図15・17，第140図１～18は，98号土坑墓出土土器である。第58図15は，小型の長頸壺である。口縁部に４本一組，頸部に，７本一組と11本一組の平行沈線文を有し，全面が磨かれている。17は，壺の体部下半で，縄文は，直前段多条の縄文LRである。底部は布痕がある。底部直上と縄文の間は，ミガキが施されている。第140図１は，大型壺の口縁である。４本の沈線がめぐり，頸部近くに孔を有する。２～13・17・18は体部上半である。７は，

頸部で，縦の沈線に区画された４本一組の平行沈線文を有する。５・10は，外反する口縁を持つ壺で，５は，３本一組，10は４本一組の平行沈線文を有する。沈線間は，磨かれている。３・４・６・11・12・18は，渦文で一つおきに磨かれている。14・16は，甕で，口端には，縄文が施されている。結節縄文によって頸部と体部を画している。（丹野）

99号土坑墓　（第21図，第58図16，第140図19～25）

Ｘ線東端で74・79号土坑墓と切り合って検出される。74号土坑墓より長軸1.11ｍ，短軸0.66ｍ，深さ36㎝を測り，楕円形を呈する。第58図16は，長頸壺で，口縁部，頸部に長方形区画文を施文しており，区画内は沈線施文ののちにミガキ調整が行われている。第140図19～25は全て壺の破片資料で，沈線による渦文が施文されており，沈線間は，交互にミガキ調整が行われており，23ではモミの圧痕を有する。（芳賀）

101号土坑墓　（第24図，第57図10，第61図12，第141図23～29）

Ｃ区西半部で49号土坑墓に近接して検出されており，長軸0.99ｍ，短軸0.64ｍ，深さ32㎝を測り，長楕円形を呈する。中央部付近のの堆積土下部から弥生土器が集中して出土している。第57図10は完形のコップ状を呈する鉢で，口端にキザミを有し，口縁部には孔を有するコブが４ヵ所についており，体部には，４単位の弧状区画が施文され，また四角形を呈する底部にも文様の施文が認められる。第61図12は，渦文を施文した壺で，第141図23～29のうち，38が連弧文のモチーフを有する鉢で，39が蓋である他，全て壺の破片である。27は，沈線間のナデの区画内に偽似縄文が施文されている。（芳賀）

102号土坑墓　（第25図，第57図11）

Ｃ区中央やや西寄りで検出したもので，長軸1.39ｍ，短軸0.60ｍ，深さ17㎝を測る隅丸長方形の浅い土坑墓である。東西に細長い土坑墓であり，東壁寄りの部分から口縁部を欠失した小型壺が床面から約５㎝浮いた状態で出土している。弥生土器は，この床面近くから出土した壺以外では，小さな破片が若干出土しただけである。第57図11は，床面近くから出土した壺である。口縁部が欠失しており，頸部に上下２段にわたって３条の沈線をめぐらし，体部には，重菱文と三角文の組み合わせのモチーフを４単位施文している。さらに沈線区画内は，交互にナデ・ミガキとし，ナデの部分に植物茎(カナムグラ)の回転施文による偽似縄文を施文し，赤色塗彩を施している。底部には布痕を有し，現存高は12.6㎝を測る。（芳賀）

103号土坑墓　（第15図）

Ｃ，Ｘ区境中央で検出されており，46号土坑墓と切り合っている。現存する長軸1.03ｍ，短軸0.75ｍ，深さ17㎝を測り，楕円形を呈し，東側が，46号土坑墓によって壊されている。発掘調査の際の所見では，46号土坑墓が103号土坑墓より新しいと判断された。土坑内堆積土中からは弥生土器の小破片が若干出土している。（芳賀）

104号土坑墓　（第15図，第59図４・６，第60図１，第142図１～10）

Ｃ区西端で検出されたもので，46・79・105号土坑墓と切り合っている。土坑墓の新旧関係は，古い順番より79・105・104号土坑墓となる。長軸1.12ｍ，短軸0.77ｍ，深さ37㎝を測り，楕円形を呈する。堆積土上部より弥生土器が集中して出土している。第59図４は長頸壺の口縁部から頸部にかけての資料である。口縁部は受口状を呈し，口端，口縁部全面に植物茎の回転による偽似縄文が施文されている。頸部には上下に平行沈線文をめぐらし，その間の連弧文のモチーフを施文し，沈線間には部分的に偽似縄文を施文している。６は口径43㎝ほどの大型の甕で，口縁く状に外反し，口端に縄文を施文し，口縁部は横方向のナデを施している。ナデ痕は，整然とした条線となり布を用いている可能性が高い。体部には３段の結節回転施文を行い，それ以下には縄文を施文している。第60図１は片口付鉢である。推定口径31㎝ほどと思われ，口端に縄文が施文され，体部には縄文が施文され，上端には結節回転が施文されている。第104図１～10は全て壺の破片資料である。（芳賀）

105号土坑墓　（第15図，第142図11～21）

Ｃ区西端部で検出された104号土坑墓と切り合っている。長軸1.28ｍ，短軸0.79ｍ，深さ16㎝を測る。土坑墓の中央部を中心に弥生土器破片資料が若干出土している。第142図11～21のうち17・20は口端にキザミを有し，体部に連弧文を施文した鉢である。それ以外は全て壺であり，渦文を施文したものが多く，21の布痕を有する底部は穿孔されている。（芳賀）

106号土坑墓　（第25図，第57図12）

Ｃ区中央で検出され，102号土坑墓に隣接している。長軸0.82ｍ，短軸0.54ｍ，深さ33㎝を測り，小型の隅丸長方形を呈している。東北コーナー付近の床面から第57図12に示した完形壺が出土している。高さ22.2㎝，口縁径7.3㎝，体部最大径約20㎝，底部5.8㎝を測る。口縁部やや受口状を呈し，４条の平行沈線文がめぐっている。口端には，３ヵ所にキザミを有し，口縁上部には植物茎による偽似縄文が施文されている。体部中央に最大幅をもち，その上半部に文様帯を有している。上段より３本の平行沈線，重三角文，４本の平行沈線，重三角文，３本の平行沈線となる。上段の重三角文は５単位，下段の重三角文は10単位の文様割り付けとなる。中段，下段の平行沈線及び体部下半部には植物茎による偽似縄文が施文されている。重三角文の部分は沈線間が展開図に示した様に，交互にミガキ・ナデとなっている。底部には布痕を有する。この他，若干の微細な弥生土器が出土しただけである。（芳賀）

108号土坑墓　（第25図，第142図22～27）

Ｙ区東北端で検出され，長軸0.82ｍ，短軸0.60ｍ，深さ41㎝を測る楕円形を呈する土坑墓である。堆積土上半部から若干の弥生土器が出土している。第142図22～27はいづれも壺の破片で，24が長頸壺の頸部で雷文が施文されており，その他は渦文の施文された体部破片である。文様帯

下端に植物茎による偽似縄文を施し，それ以下に縄文を施文している。25は，渦文間の空白部に重扇文を充塡したものである。（芳賀）

109号土坑墓　（第25図）

Ｘ区南西端部で検出されたもので，108号土坑墓に隣接している。長軸0.89ｍ，短軸0.60ｍ，深さ41㎝を測る。堆積土の状況は108号土坑墓と近似している。小破片の弥生土器が若干出土しただけで図示できる遺物はなかった。（芳賀）

110号土坑墓　（第15図，第60図３～12，第61図10，第62図２・３，第63図１・２，第143図１～20）

Ｃ区西端部において46号土坑墓と切り合って検出されている。現存する部分の長軸0.95ｍ，短軸0.80ｍ，深さ21㎝を測り，楕円形を呈する。土坑墓の西南端部に上面径32㎝，深さ14㎝の断面Ｖ字形のピットがある。土坑墓内からは，上面を中心に床面近くまで多量の弥生土器が出土している。第63図１は，堆積土上面から出土した完型の坩形を呈する鉢である。口縁径7.6㎝高さ10.8㎝を測り，口縁部に４条の平行沈線をめぐらし，それ以下連弧文，平行沈線，連弧文となる。連弧文の文様単位は上下とも４単位となり，沈線文帯は，施文後にミガキ調整が施されそれ以外はナデ調整となる。２は完形の蓋で，口縁部に３条の平行沈線をめぐらしている。第60図２は，口縁く状に外反し，体部上半を無文にして結節回転を施文した壺，３・４は，長頸壺の頸部である。５は，口縁部受口状を呈し４本の沈線がめぐり，体部上半には３単位の重扇状文が施文されている。６は，口縁部から体部上部にかけての資料で，受口状を呈する口縁部には，直前段多条の縄文LRが施文され，頸部には上下２段にわたって平行沈線がめぐり，体部には５単位の渦文が施文されている。８も体部に渦文の施文された壺であり，７及び第61図10は共に短く外反する口縁を有する長頸壺で，頸部に平行沈線がめぐっている。10は長頸壺であり，体部に雷文を施文し，頸部，体部の沈線間には偽似縄文が施文されている。12は，体部上半の無文部に上下２段にわたって平行沈線をめぐらした壺で，口縁は，く状に外反するものと考えられる。第143図１～20は破片資料であり，19・20が蓋である他は全て壺である。（芳賀）

111号土坑墓　（第25図，第143図21～39）

Ｘ区北端で検出された。上面プランは，長軸1.11ｍ，短軸0.55ｍ，深さは37㎝の隅丸方形である。弥生土器は，上面ではプランを覆うが，ℓ1層内部では北隅に偏る。床面の傾斜は，土器集中部の方がやや高くなっている。第143図21～39は，111号土坑墓出土の弥生土器である。22～29，33～39は体部上半渦文主体である。21は表頸壺で頸部に，横走する３本の沈線を有し，体部は５単位の渦文が施される。33は，小型壺で，２つの渦を，２本の短い平行沈線で結んでいる。30は，壺の口縁で，２本の横走する沈線を有する。（丹野）

112号土坑墓　（第25図，第61図１・２，第144図１～17）

Ｘ区中央で61・66号土坑墓と切り合って検出されている。112号土坑墓は，調査時の所見によると，61・66号土坑墓より新しい。長軸1.97ｍ，短軸0.68ｍ，深さ41㎝の隅丸長方形を呈する土坑墓である。床面は，西から東へ向ってゆるやかに傾斜しており，西側が低く，東側が高い。弥生土器は，東半部に集中して検出された。第61図１は小型の長頸壺で，く状に外反する短い口縁部を有し，口端にはキザミを有し，頸部には11条の沈線が施文されている。２は，体部に渦文を施文した壺で，口縁部には連弧文を有する。第144図１～17は破片資料である。12が甕である他，全て壺の破片であり，８は，体部上部を無文として結節回転を施文した壺である。壺の体部破片には渦文を施文したものが多い。　（芳賀）

土坑墓上面の土器

表土を除去し，遺構検出作業に取りかかると，表土直下に弥生土器が密集して出土する状況が各所に発見された。このうち，土坑墓確認面より上位に浮いた状況で出土したものを土坑墓上面の弥生土器として取り上げた。以上説明を加える。

〔Ｃ区西半集中〕　46号土坑墓などが位置する部分に各土坑墓を覆うように密集して検出されている。第66図１・２・５～13はＣ区西半集中部分から出土した弥生土器である。このうち５はく状外力する短い口縁部を有する壺で，体部上半部には５条の沈線がめぐっている。６は高坏の台部，７は小型壺の口縁部である。８は鉢で文様帯上下の沈線間に連弧文が施文されている。９・10は体部に渦文を施文した壺であり，沈線間は交互にミガキ・ナデとなっており，渦文は相対する渦文と考えられる。12は体部に結節回転を施文した甕で，11の布痕を有する底部は外側から穿孔がされている。第153図から第156図は破片資料である。第153図のうち16が甕である他は全て壺である。１・５の口縁部，９の沈線間，14の口端，20・27の文様帯直下には，偽似縄文が施文されている。体部破片では渦文のモチーフを有するものが多く，18ではコブ状の突起が付加されている。第154図のうち，11～13は連弧文のモチーフを有する鉢であり，15・16・18・19は，口縁部に沈線をめぐらした蓋である。体部破片の多くは渦文のモチーフを有するが，３は弧状区画文を組み合わせたものであり，９は長頸壺の頸部で方形区画文が施文されている。第155図１～20・34は壺の口縁部である。また33・38～40・42は鉢であり連弧文が施文されている。３・23・32・34～37の沈線間には偽似縄文が，また21・22・25・26の沈線間には縄文が充填されている。第156図１～６は壺の体部破片で渦文が施文されており，また７・８・11では重三角文が施文されている。15～19・21・22は，甕の口縁部で，口端に縄文が施文され，体部上部には結節回転施文が行われている。24・25の布痕を有する底部は，外側よりの穿孔が行われている。

（芳賀）

〔１・２・３号土坑墓上面〕　第74図１～３は甕の口縁部で，口端に縄文が施文されている。４～

６は壺の同一個体で，文様帯下端部に結節回転が施文されている。７～13は，体部破片で，縄文原体は全て直前段多条の縄文LRである。14～26の底部の多くは外側よりの穿孔が観察される。第75図のうち35が鉢である他，全て壺である。１は他の例よりやや太い棒状工具による沈線区画を施文し，その外側には木口によると思われるハケ目を施文している。こうした例は本遺跡では唯一であり，系統の異なる弥生土器と判断される。この他壺の体部には渦文のモチーフが多用され，36の文様帯直下には偽似縄文が施文されている。（芳賀）

〔61号土坑墓上面〕　第65図６は小型壺で口縁又口状を呈し，体部には沈線による連弧文のモチーフと，扇状区画文を組み合わせている。７～９は口縁部から体部上部にかけての資料で，それぞれ赤色塗彩がなされている。10は，く状に外反する短八口縁部を有する壺で，体部丸みをおび，体部上半の無文部に長方形区画文を３段施文している。体部下半部には結節回転を施文し口端にはキザミ，また口縁内面には長方形区画文を施文している。11は底部穿孔された体部下半部の資料である。第109図は全て壺の破片資料である。１～10・12・14・15は口縁部資料であり，沈線によって平行沈線文や連弧文が施文されている。16・17・20～22は渦文のモチーフを有する体部破片で，沈線間は交互にミガキ・ナデとなっている。23～25の底部は，いずれも布痕を有し，穿孔されている。（芳賀）

〔62・63号土坑墓上面〕　調査区の西端部で検出されたもので，62・63号土坑墓を覆うように弥生土器が密集して出土している。第65図５は長頸壺の口縁部で連弧の区画文が施文されており区画内はミガキ調整が行われている。12は受口状の口縁を有する壺で，口縁には連弧文のモチーフを有し，体部には渦文が施文されている。13は長頸壺で，口縁にヨコナデを施し，頸部には上下２段にわたって平行沈線を施文している。第147図のうち20・22・23は連弧文を施文した鉢，19・26・28～31は甕，21・24・25は蓋であり，その他は壺と考えられる。19は，口端にキザミを有し，口縁部に平行沈線をめぐらし，内面に沈線による区画文を施文した特徴ある甕である。12は文様帯直下に植物茎による偽似縄文を施文したもので，27の底部には布の圧痕を有する。第148図のうち19・23が甕，24・25・28は蓋，27・19は鉢でありその他は全て壺と考えられる。（芳賀）

〔66号土坑墓上面〕　66号土坑墓の北半部から調査区北端部にかけて検出されたものである。第63図６は，連弧文と三角形区画文を４単位施文した蓋，７は７単位の連弧文を施文した高坏である。７の連弧文交点には縦の交点が付加されている。また口端にはキザミが施文されている。第149図のうち23～25が体部に結節回転を有する甕であり，それ以外は壺である。体部には沈線によって渦文を施文したものが多く。18の体部文様帯直下の資料では細い原体と太い原体の２種類の縄文が施文されている。（芳賀）

〔77号土坑墓上面〕　77号土坑墓の西半部を中心に土坑墓を覆うように検出された。第63図５は坩状を呈する鉢で，体部に連弧状と三角文を施文し，沈線間を交互にミガキ・ナデとし，ナデの部

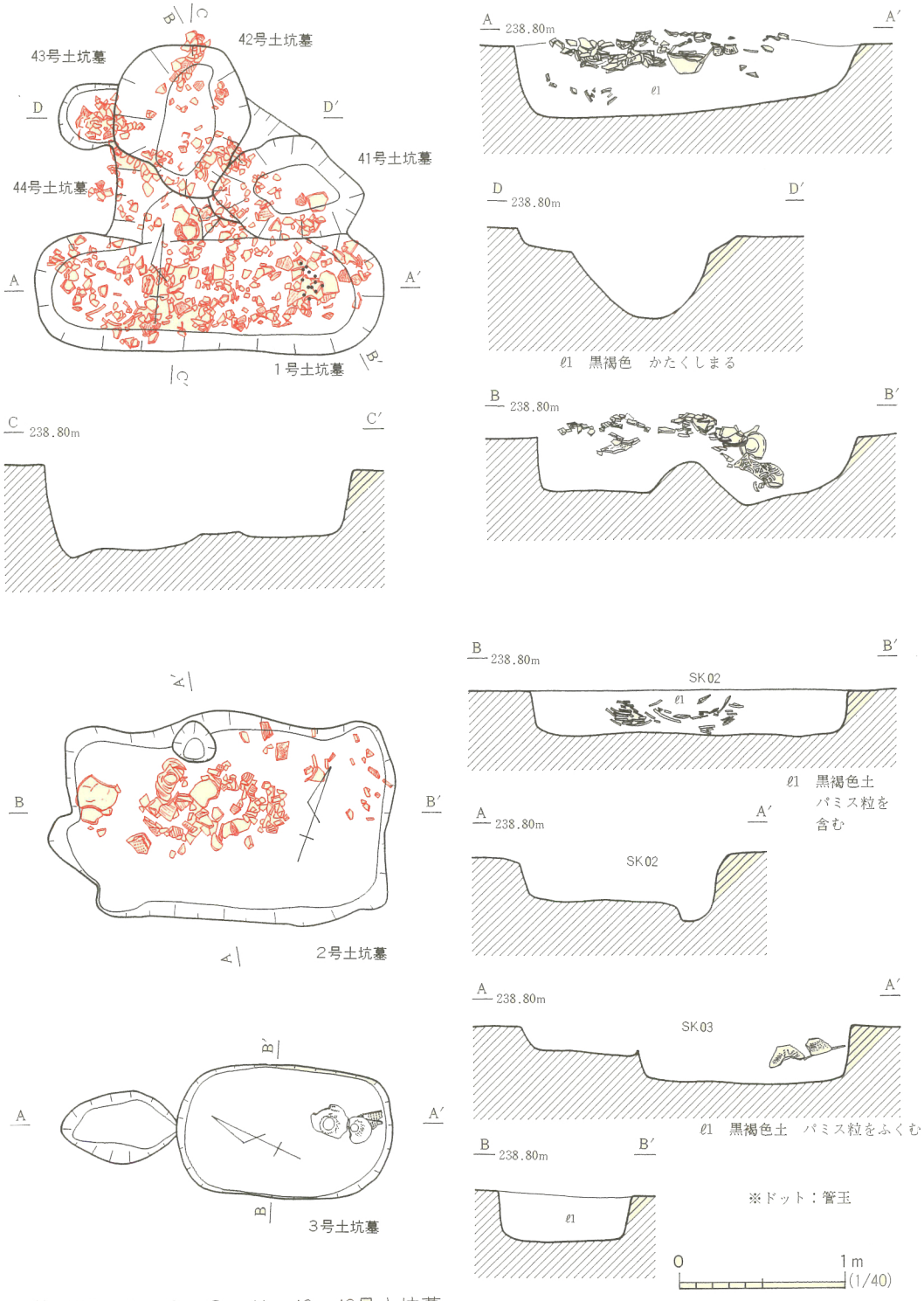
分には赤色塗彩が施されている。底部は四角で糸巻状を呈し，一対の弧状区画文が施文されている。第64図１はく状に外反する短い口縁部を有する壺で，口端に縄文が施文され，体部上部の無文部には上下２段にわたって平行沈線文が施文されている。３は無文の高坏である。４・13・14は甕であり，13・14の体部には結節回転が施文されている。４は口端にキザミを有し，口縁部，及び内面に平行沈線をめぐらし，体部には連弧状と重三角文を施文している。２は長頸壺で，口縁部に連弧区画文，頸部に長方形区画文が施文され，区画内はミガキ調整が行われている。５～８は壺の口縁部，９は連弧文と扇状区画文の施文された蓋である。12の長頸壺は頸部中央断面三角形の隆帯を有し，口縁部には連弧文，頸部には平行沈線と長方形区画文が施文され，区画文外には偽似縄文が充塡されている。第150図のうち，19は体部上部に長方形区画文を施文した甕，24は結節回転を有する甕，20・21・25は鉢で，それ以外は全て壺である。壺の体部には渦文が多用されるが，８のように沈線間が交互にナデ・ミガキとなり，また22のように渦文の変形と思われるフック状のモチーフもみられる。（芳賀）

〔78号土坑墓上面〕　78号土坑墓の西半部から調査区境にわたって検出された。第64図１は，前述したが，一部この地区出土の破片が接合している。第151図のうち，12が連弧文を施文した鉢である他全て壺である。１～15は口縁部で，８・９はヨコナデが施されており，11の全面及び３の沈線区画内には偽似縄文が施文されている。体部モチーフは壺文が多用されているが，21では対となる弧状区画文が施文されている。27・28・30の底部には穿孔が行われている。（芳賀）

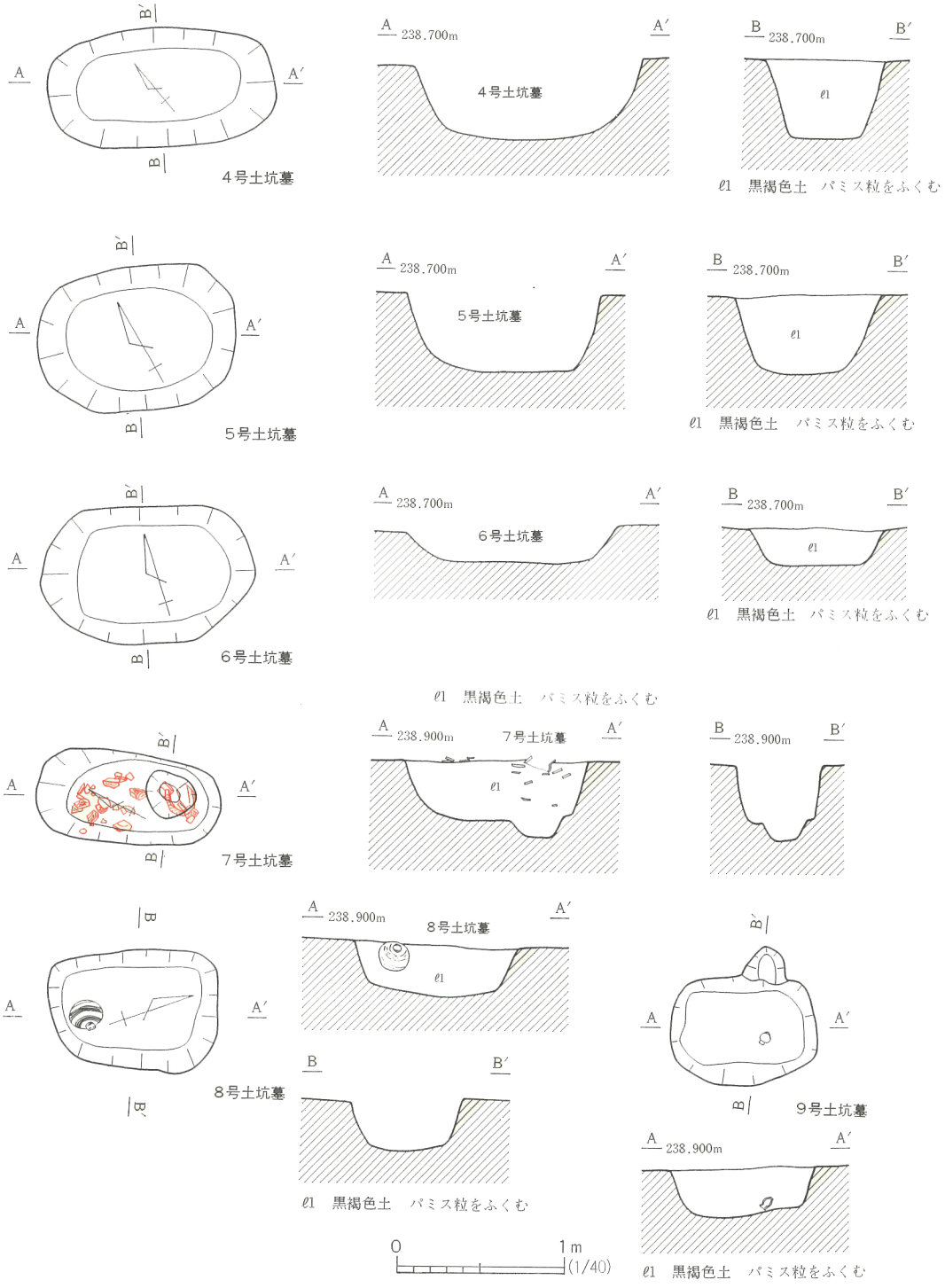
〔95号土坑墓上面〕　95号土坑墓の西半部上面に検出されたものである。第152図にこの部分から出土した資料を示した。30・34～36は鉢で，連弧文が施文されている。38・40は，体部に結節回転を施文した甕である。その他は壺の破片資料で，１の口縁部には，文様交点にコブが付加されている。体部モチーフは渦文となる場合が多く，18のように沈線間を交互にミガキ・ナデとしている特色がある。（芳賀）

杭　　列（第27図）

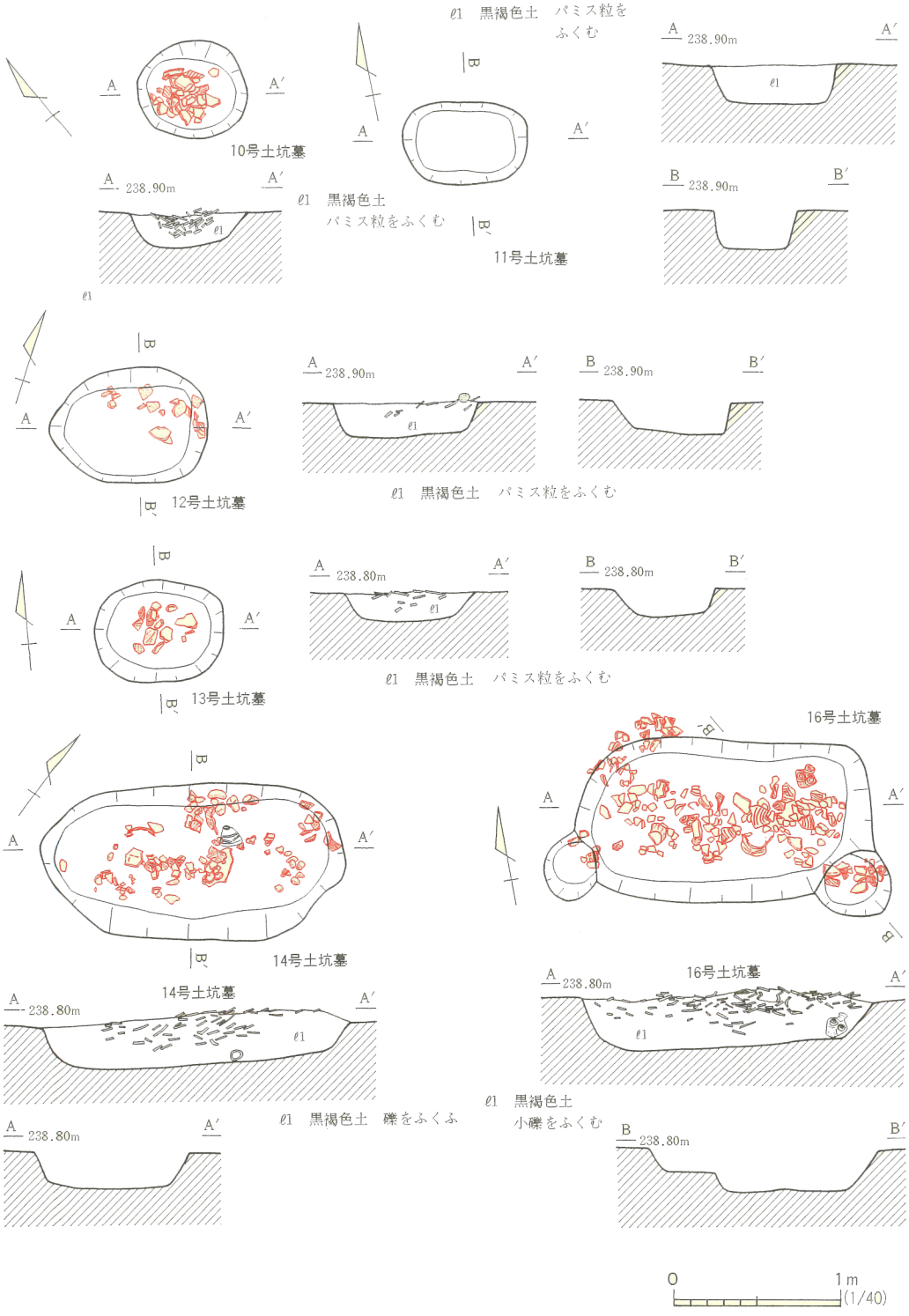
Ｄ区南端部において，20ヵ所のピットが検出された。ピットには２種類あり，直径20㎝弱で深さ20～25㎝，断面Ｖ字状を呈するものと，直径20～30㎝，深さ15～20㎝で断面Ｕ字状を呈するものがある。前者は土坑墓に組み合わさって検出されるピットと形，土層堆積状況が近似しており，弥生土器の所産と考えられた。分布をみてみると，土坑墓群の南端部を取り囲むように位置しており，墓域の境界を示す杭列と判断された。P_8以後の連続は調査によって確認できず，墓域を全周するものではないものと思われる。後者のピットの一部からは中世陶器が検出されており，その項の所産と考えられる。（芳賀）



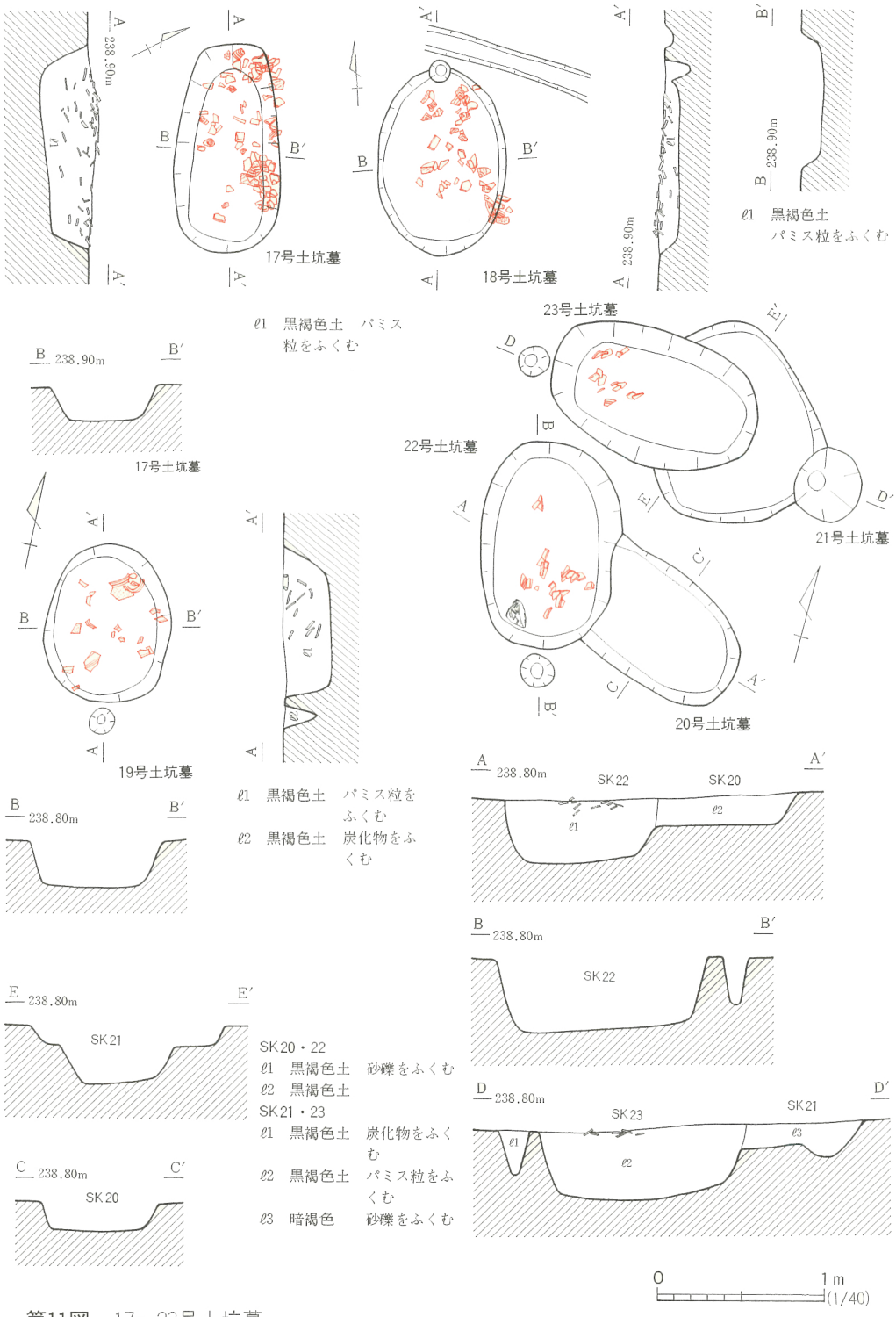
第８図　１・２・３・41・42・43号土坑墓


A
A′
B
B′
4号土坑墓
A 238.700m
A′
4号土坑墓
B 238.700m
B′
ℓ1
ℓ1　黒褐色土　パミス粒をふくむ
5号土坑墓
A 238.700m
A′
5号土坑墓
B 238.700m
B′
ℓ1
ℓ1　黒褐色土　パミス粒をふくむ
6号土坑墓
A 238.700m
A′
6号土坑墓
B 238.700m
B′
ℓ1
ℓ1　黒褐色土　パミス粒をふくむ
ℓ1　黒褐色土　パミス粒をふくむ
7号土坑墓
A 238.900m
7号土坑墓
A′
ℓ1
B 238.900m
B′
8号土坑墓
A 238.900m
8号土坑墓
A′
ℓ1
B
B′
ℓ1　黒褐色土　パミス粒をふくむ
9号土坑墓
A 238.900m
A′
ℓ1　黒褐色土　パミス粒をふくむ
0
1 m
(1/40)

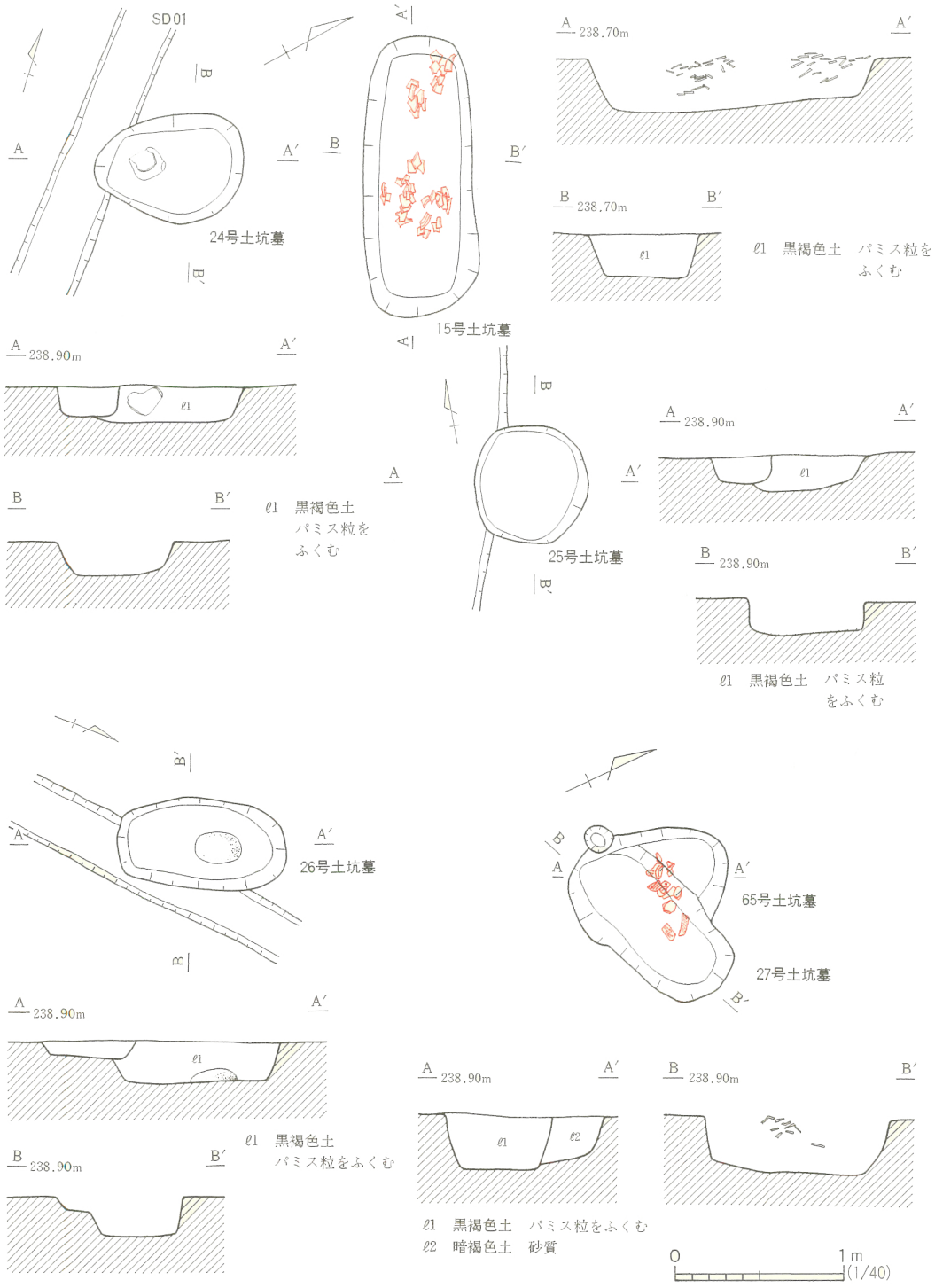
第９図　４～９号土坑墓



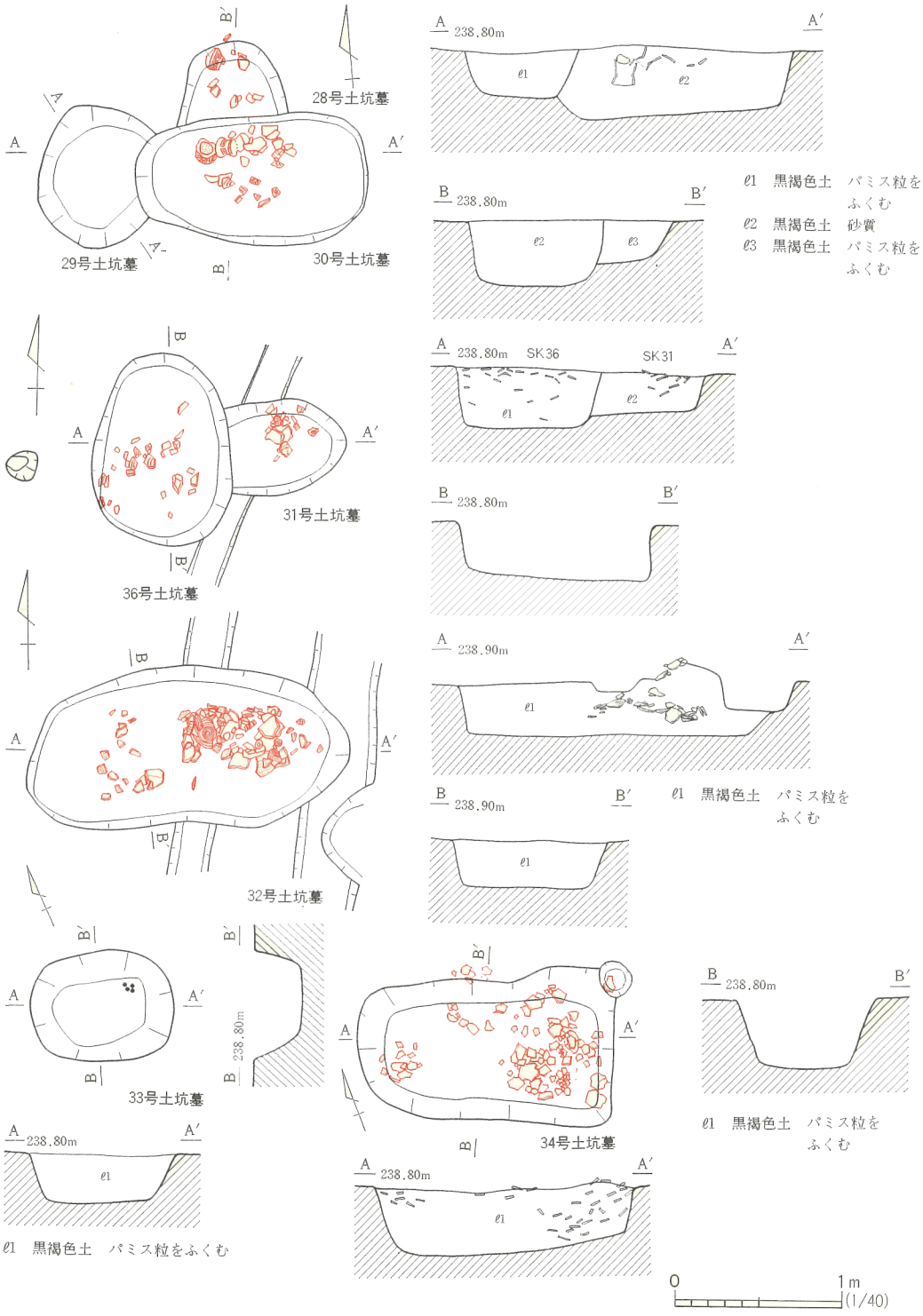
第10図　10～14・16号土坑墓



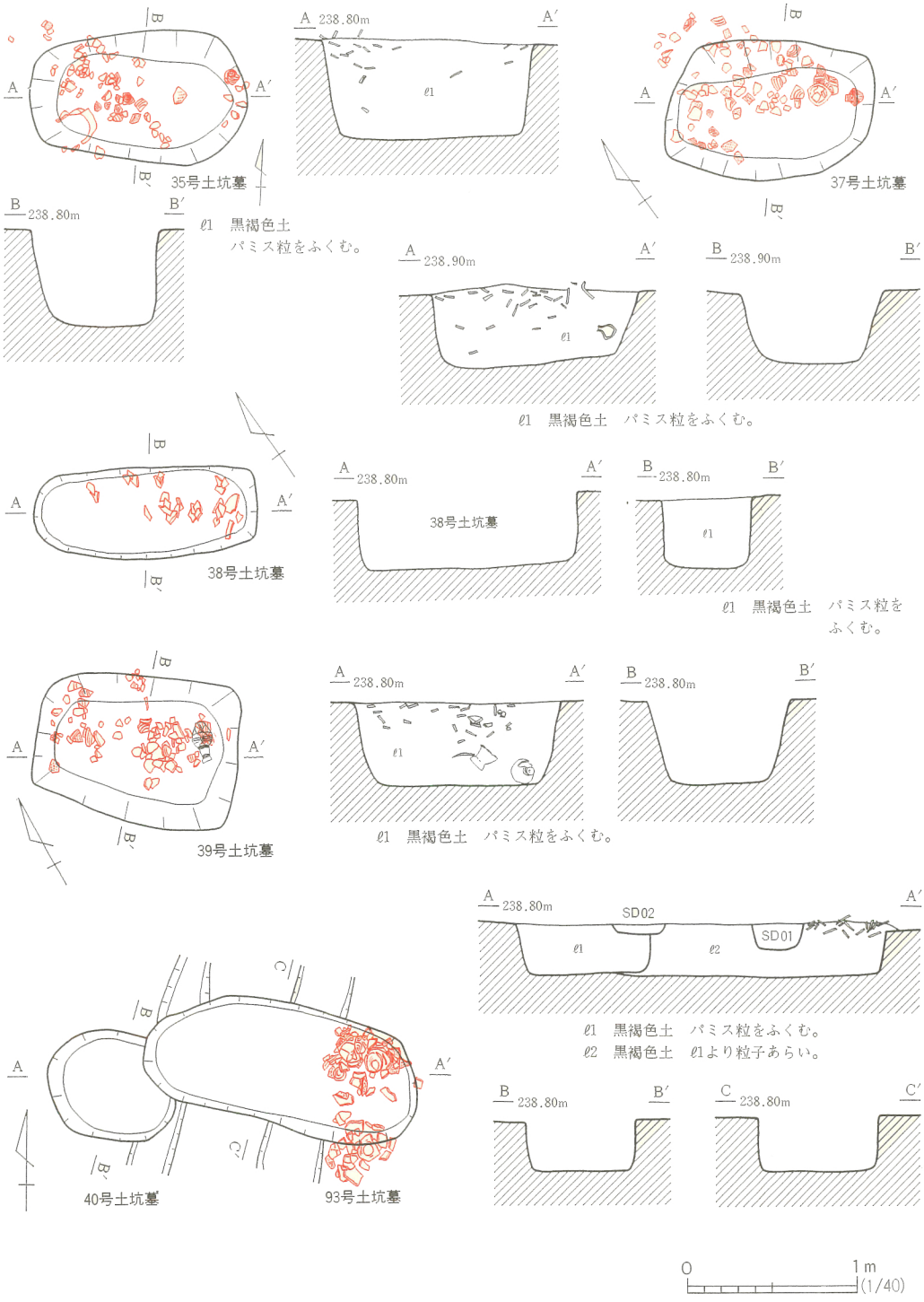
第11図　17～23号土坑墓



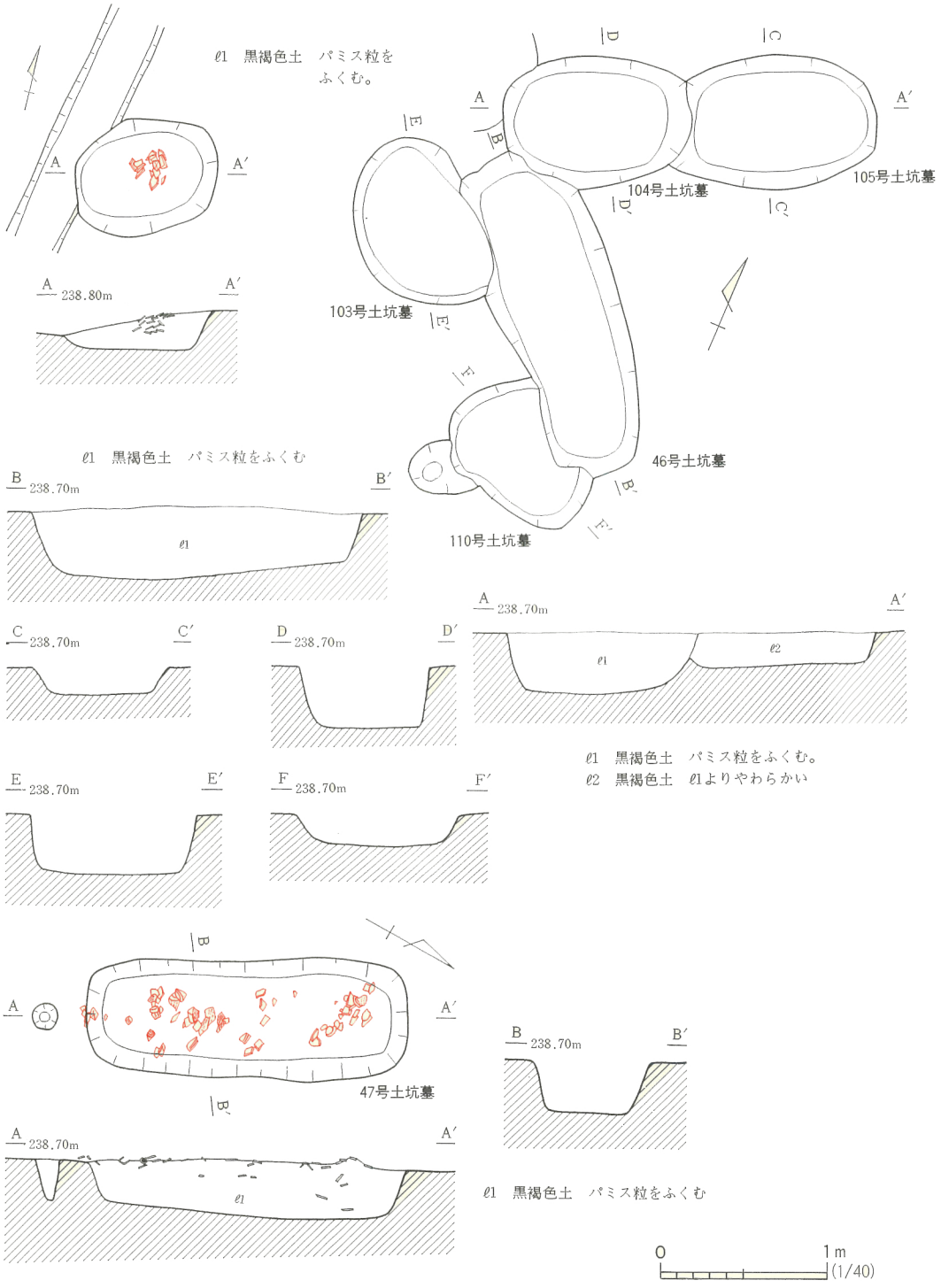
第12図　15・24～27・65号土坑墓



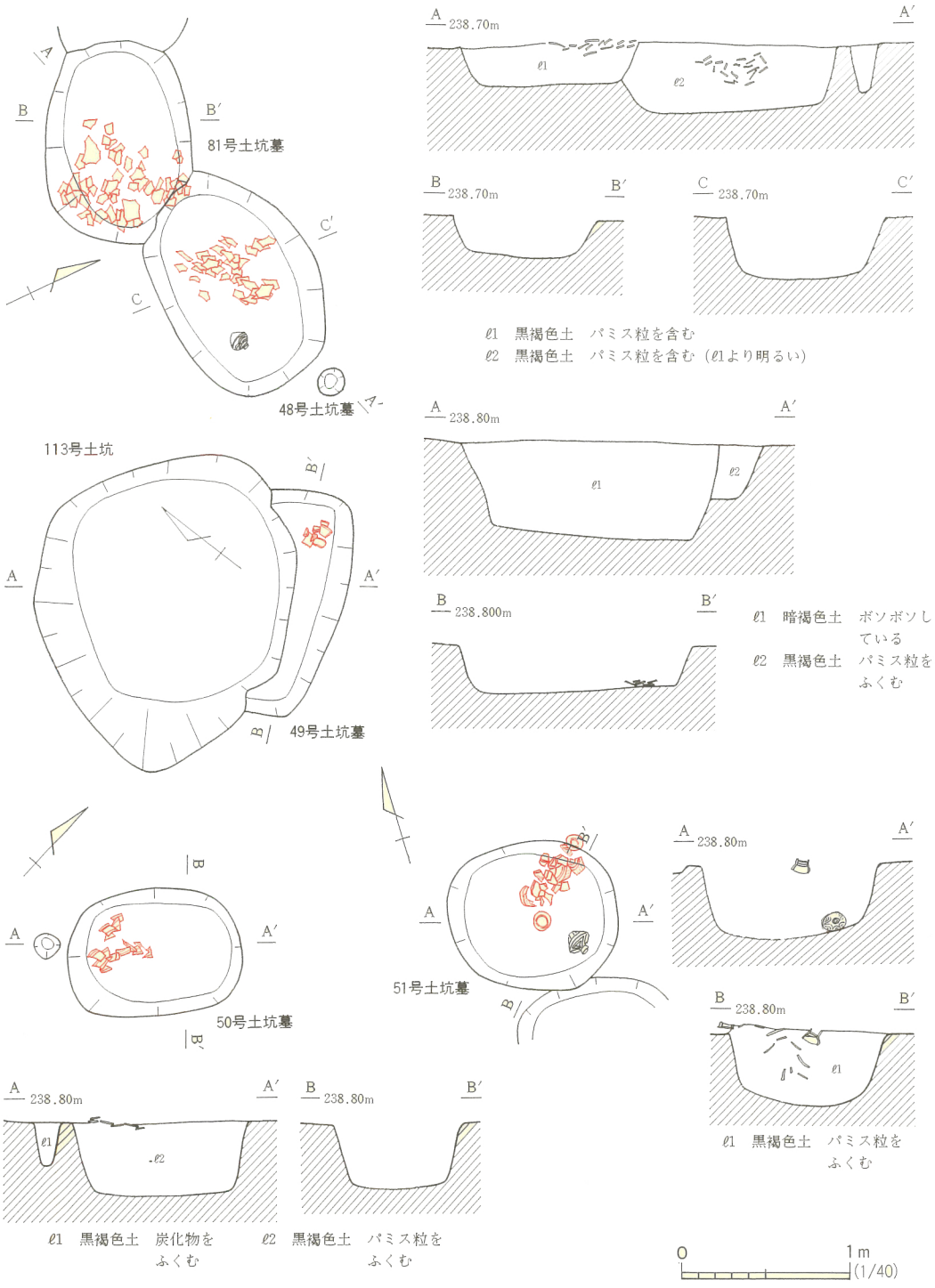
第13図　28～34・36号土坑墓



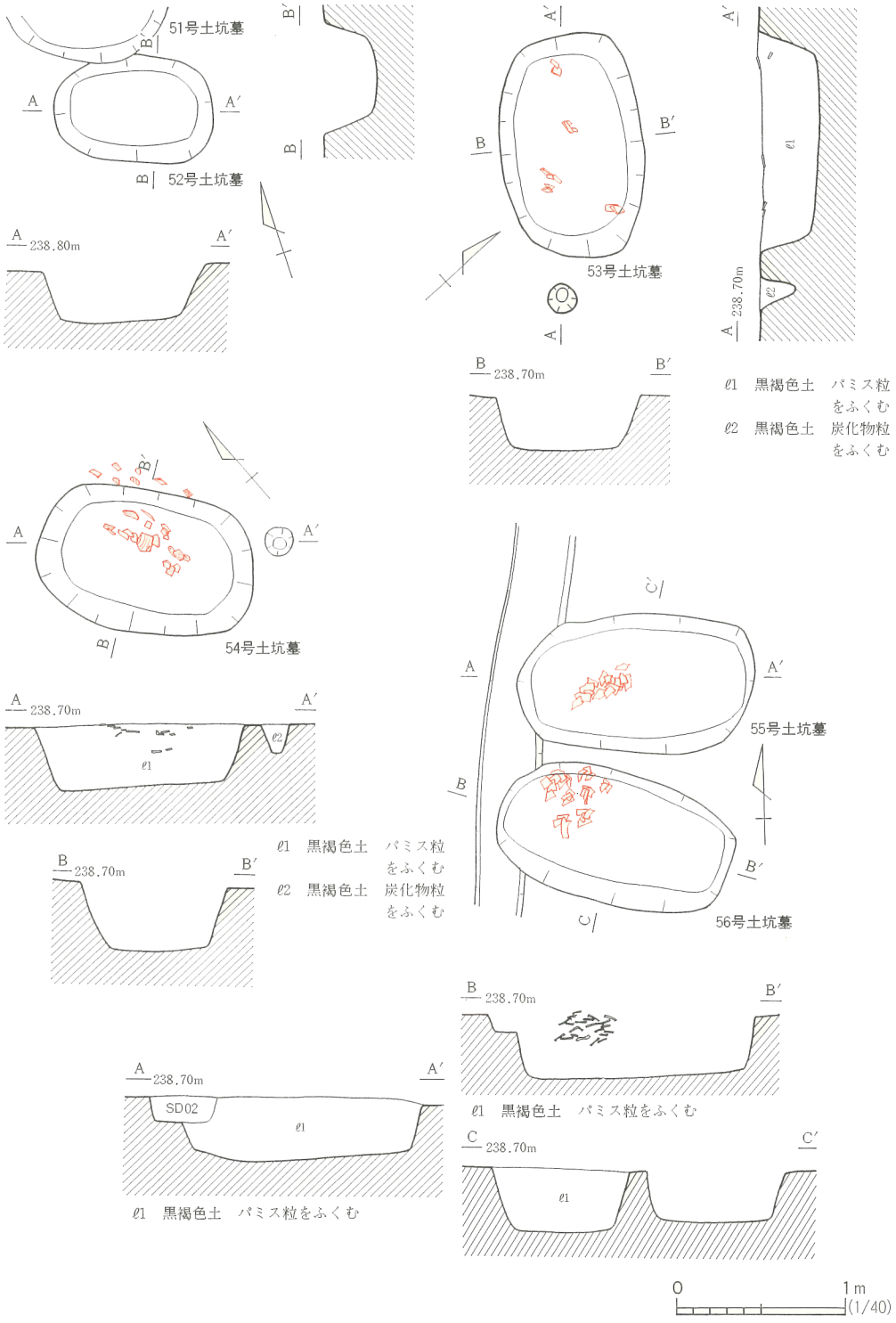
第14図　35・37～40・93号土坑墓



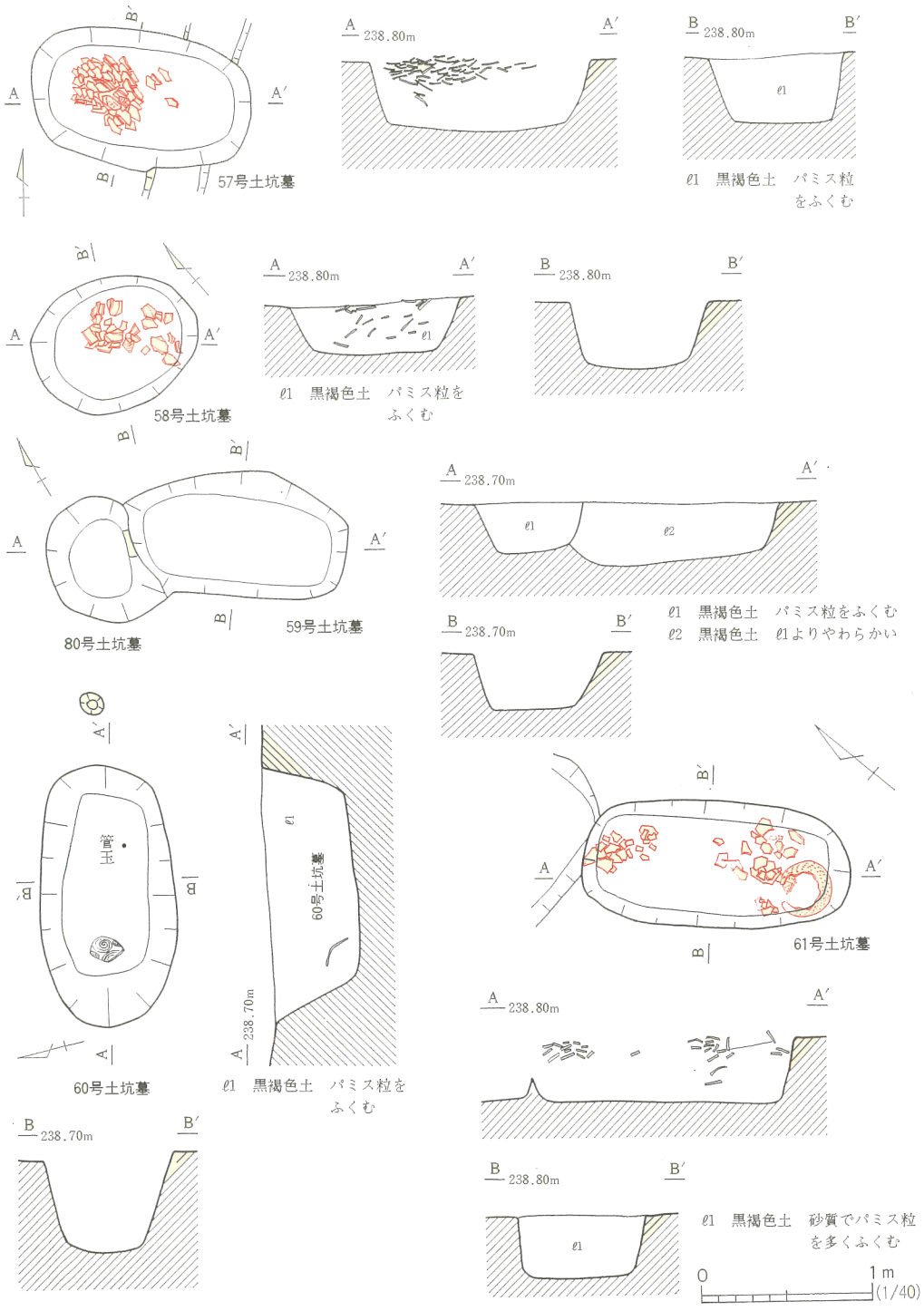
第15図　45～47・103～105・110号土坑墓



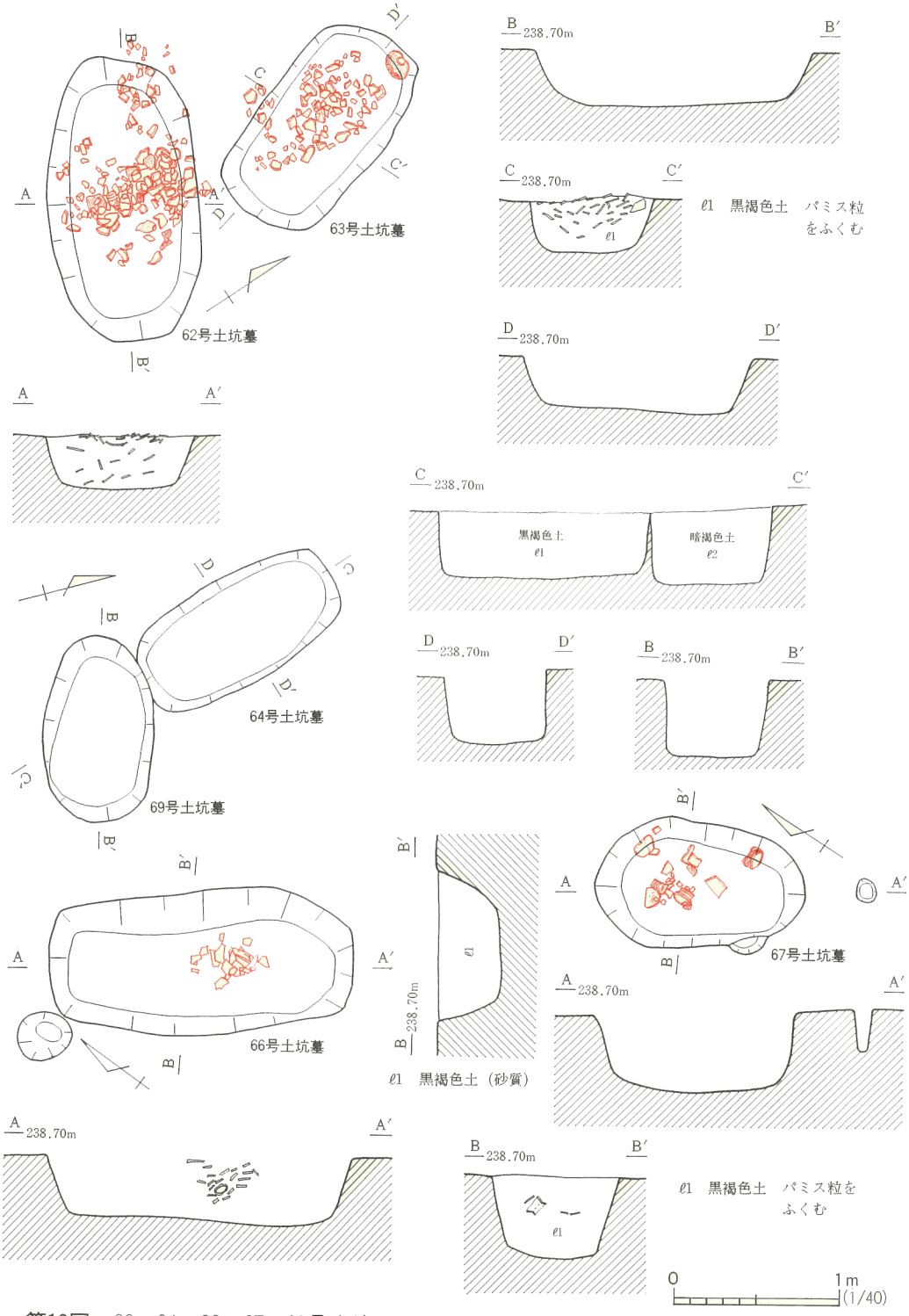
第16図　48～51・81・113号土坑墓



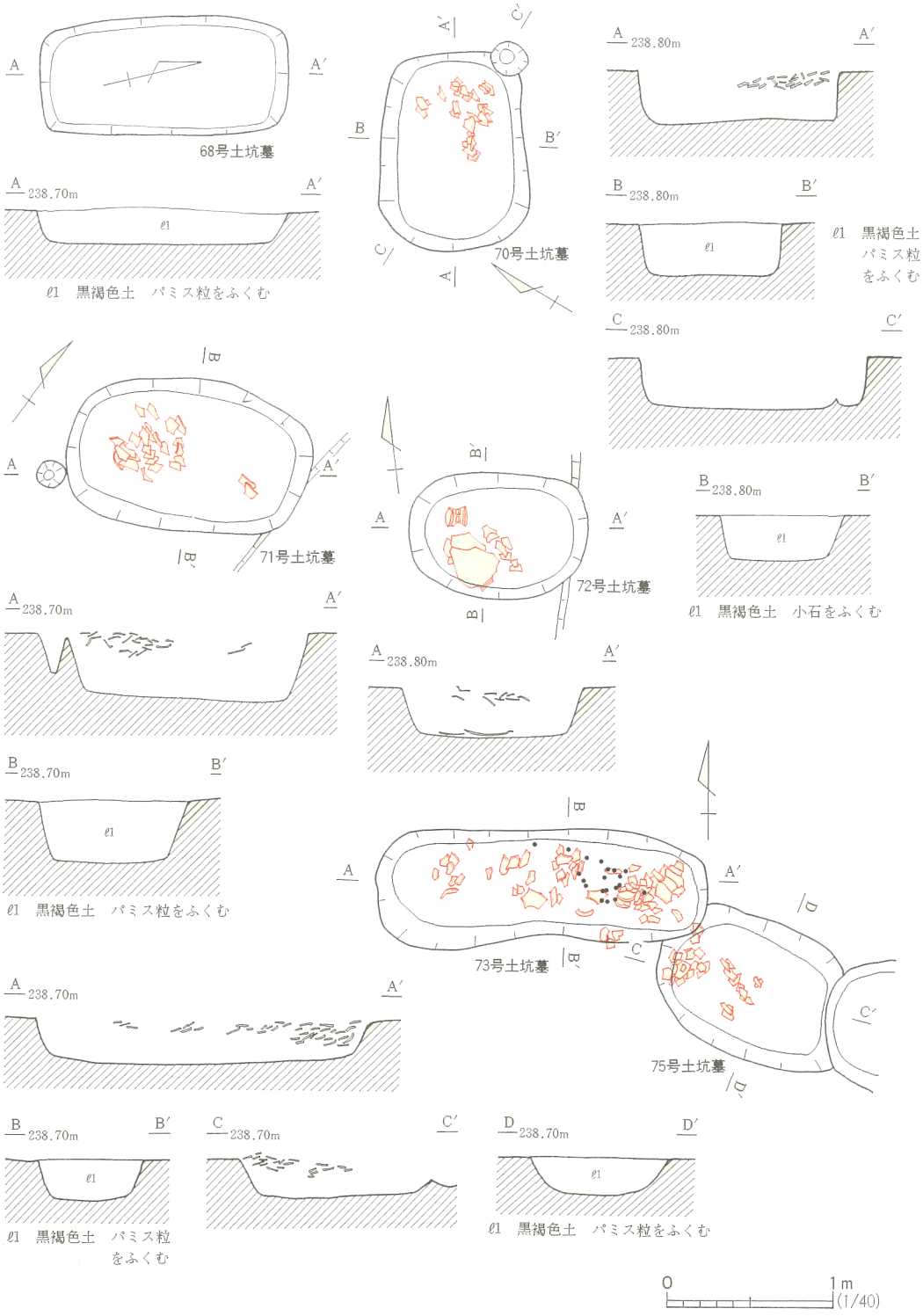
第17図　52～56号土坑墓



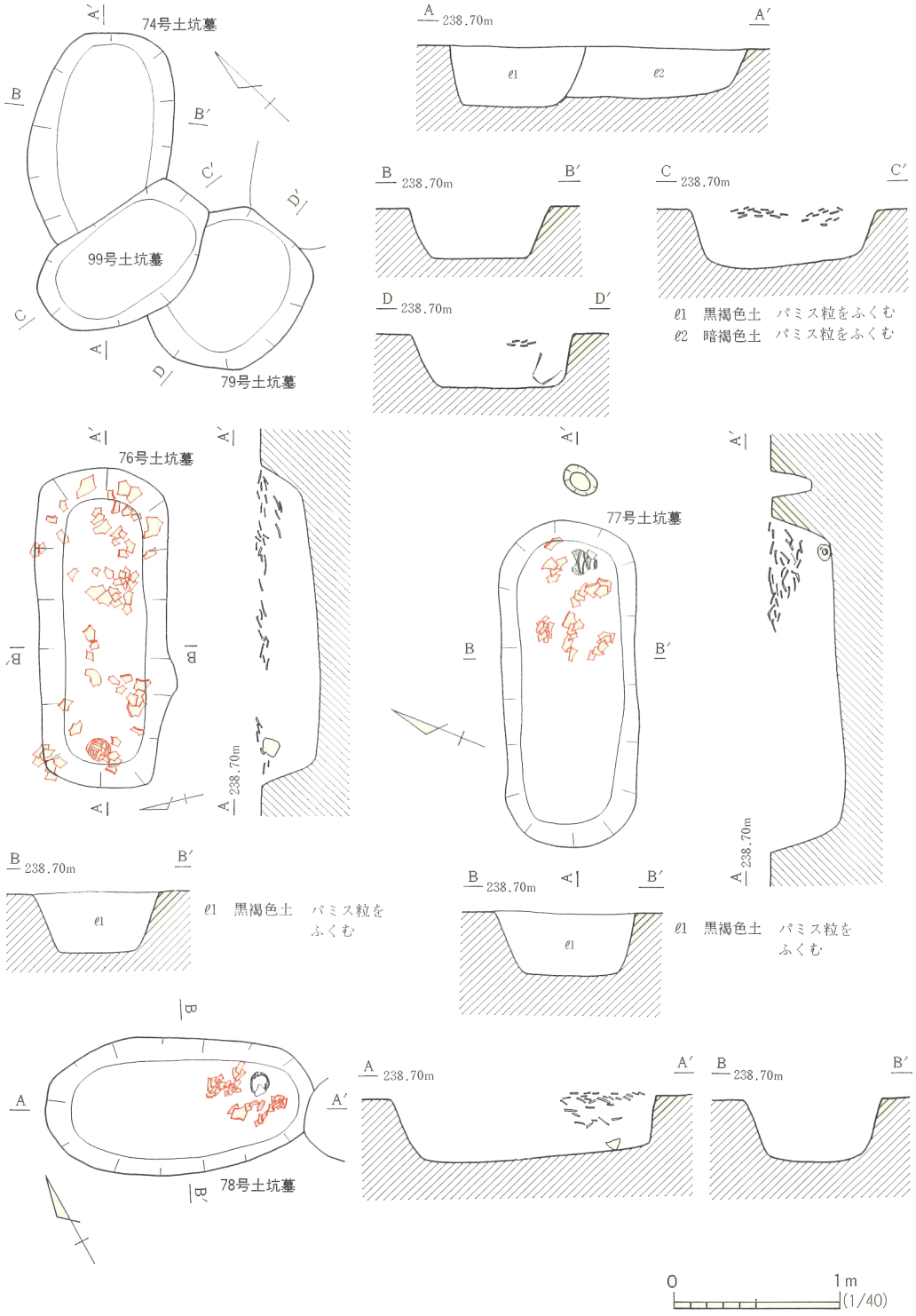
第18図　57～61・80号土坑墓



第19図　62～64・66・67・69号土坑

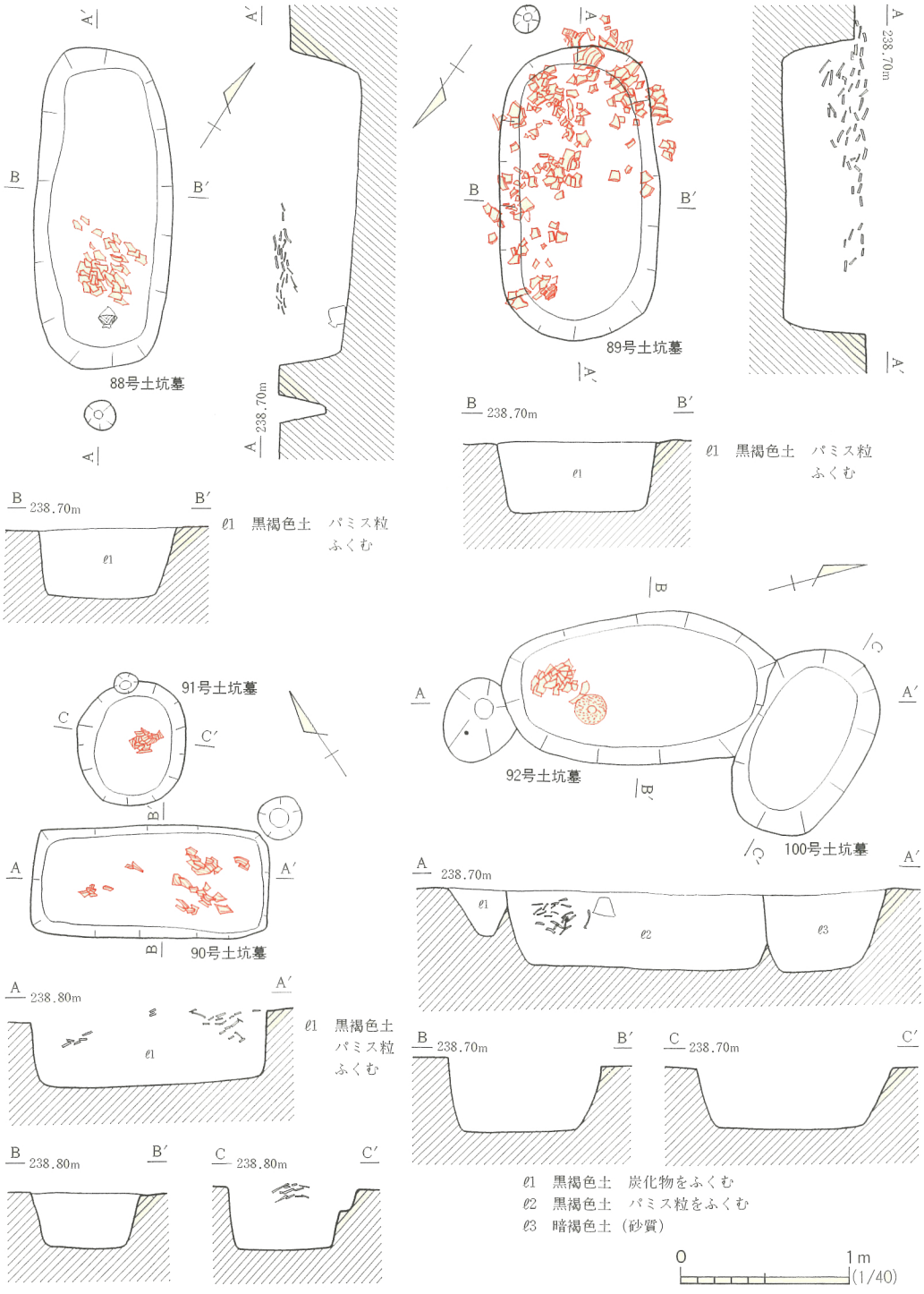


第20図　68・70～73・75号土坑墓

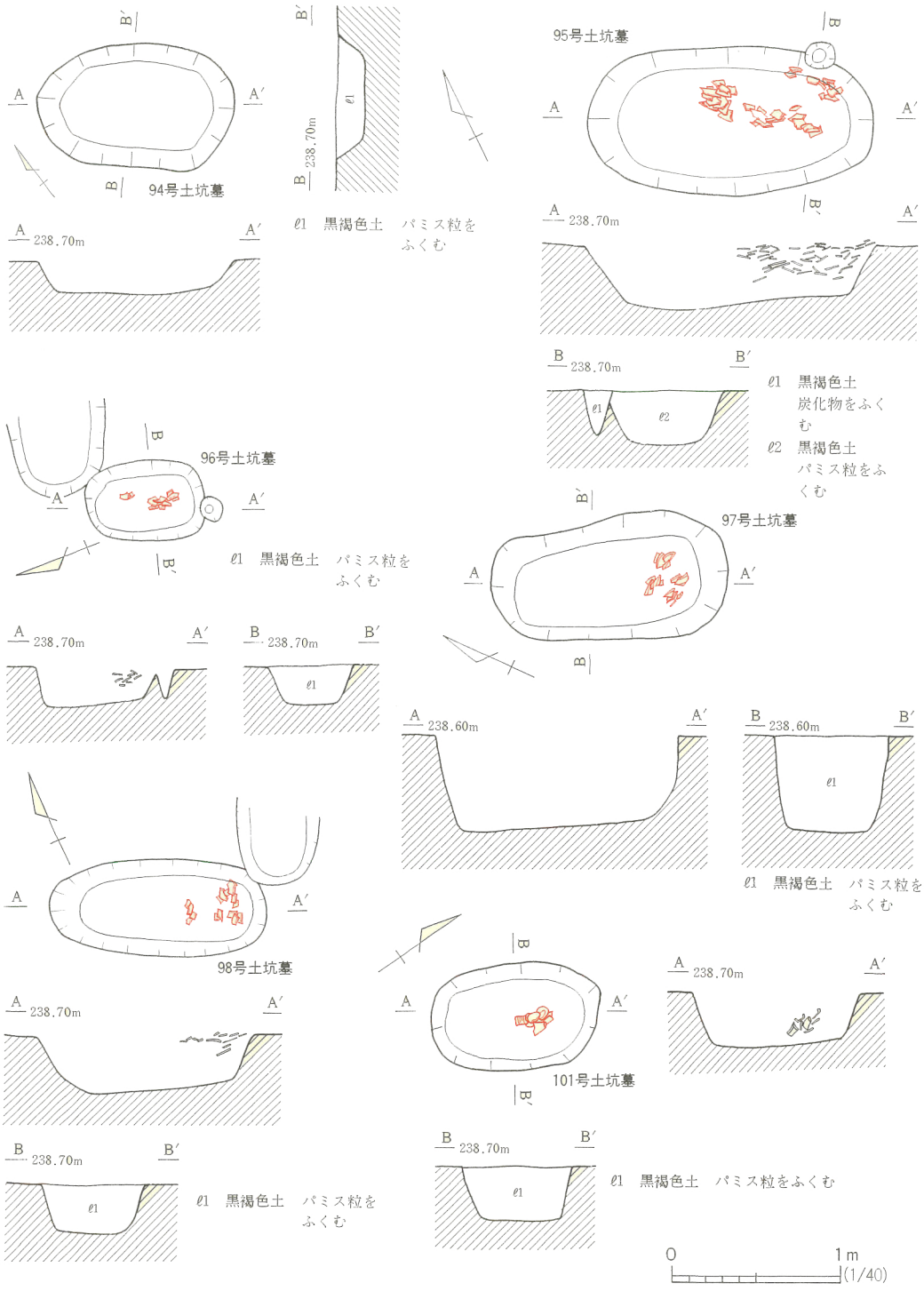


第21図　74・76～79・99号土坑墓

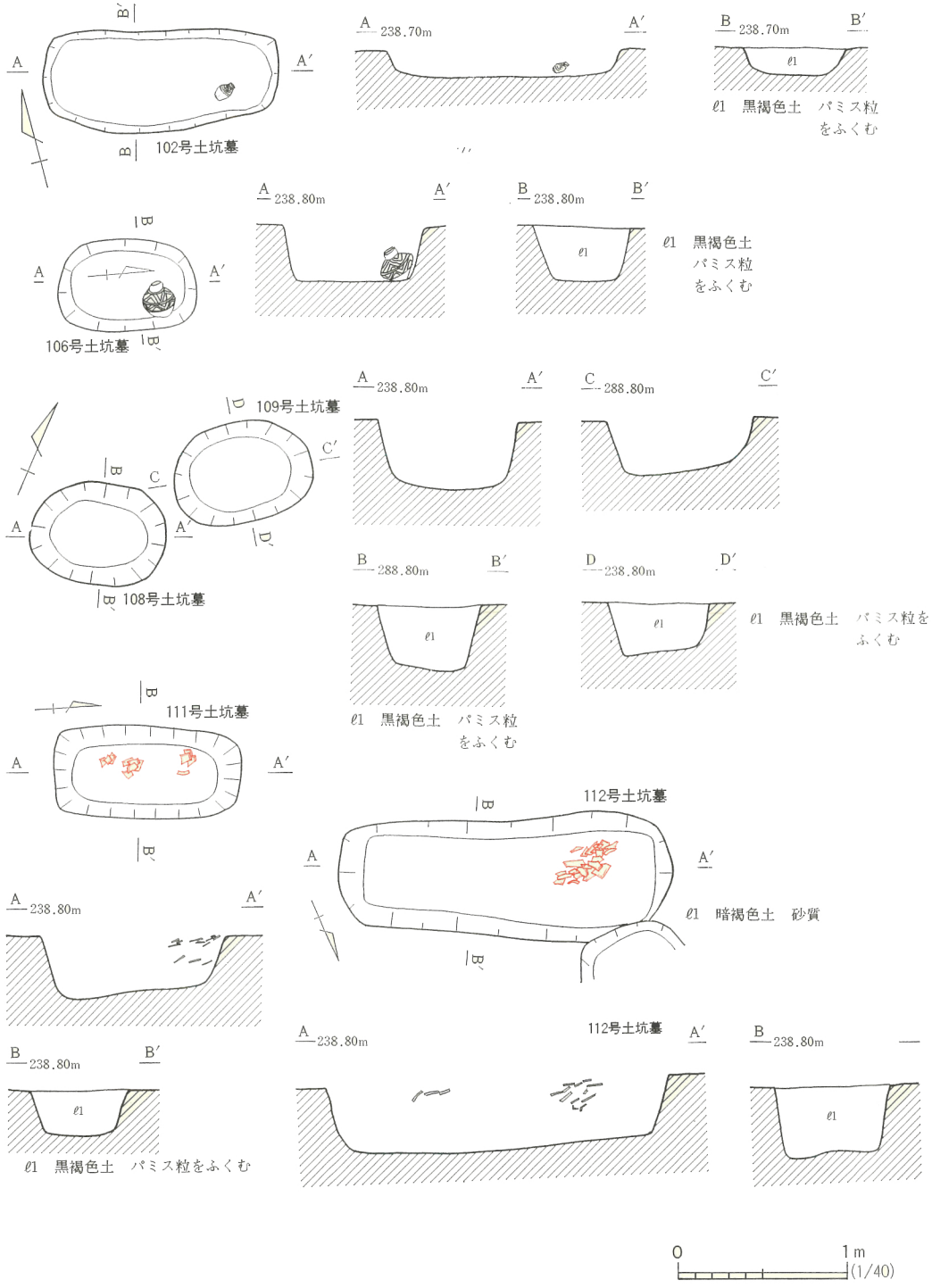
第22図　82～87号・107号土坑墓



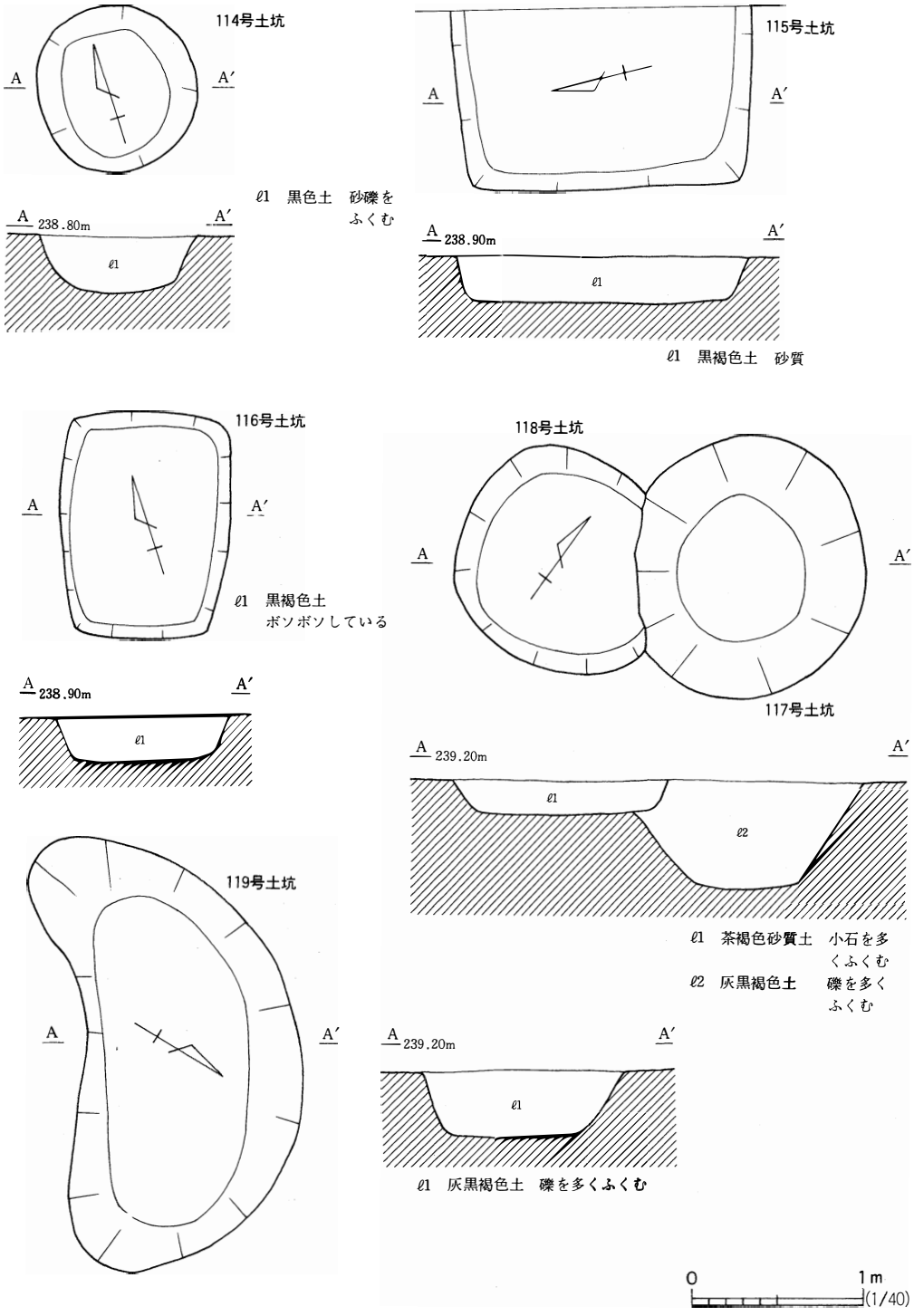
第23図　88～92・100号土坑墓



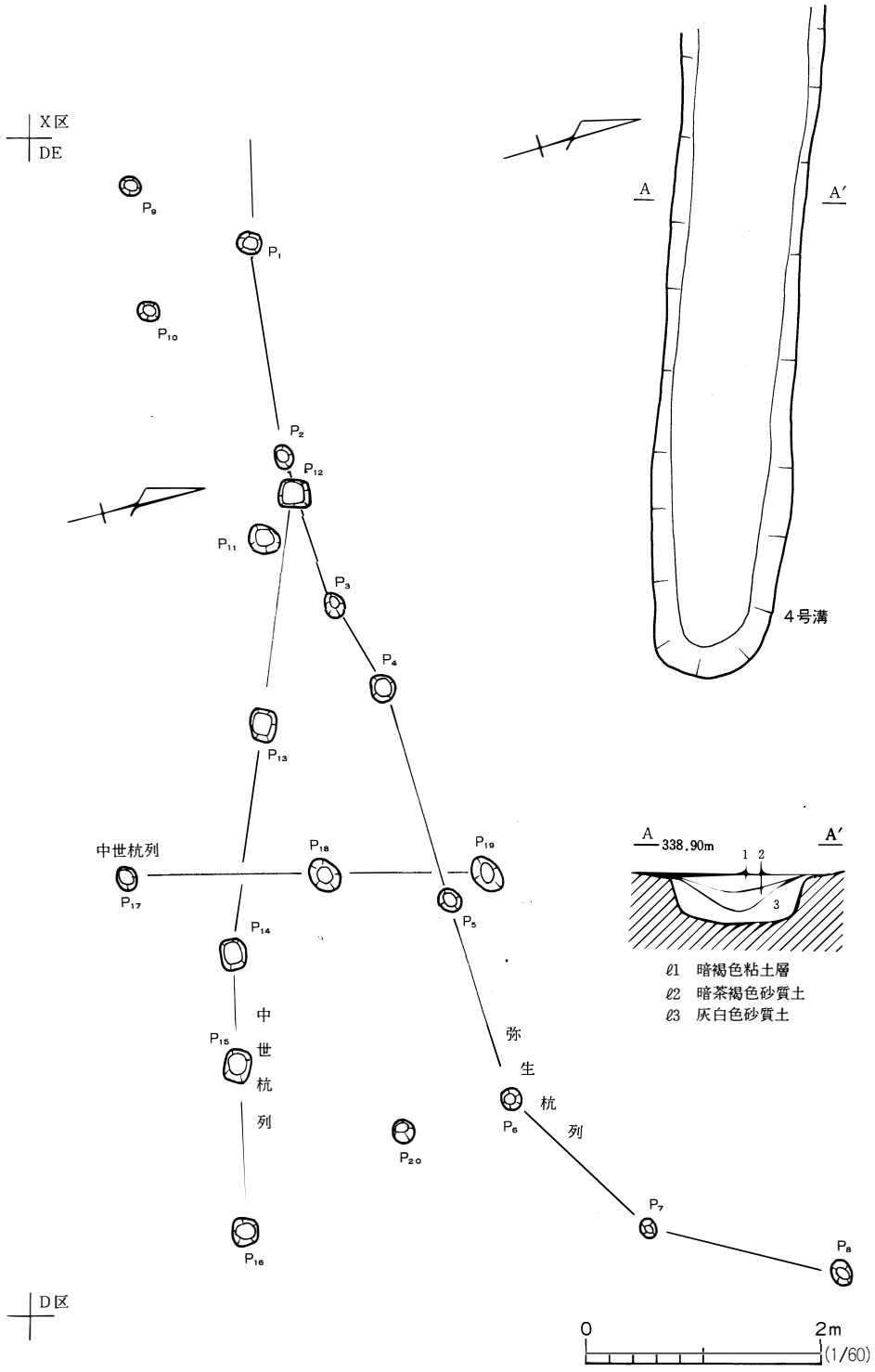
第24図　94～98・101号土坑墓



第25図　102・106・108・109・111・112号土坑墓



第26図　114～119号土坑


X区
DE
P9
P1
P10
P2
P12
P11
P3
P4
P13
中世杭列
P18
P19
P17
P5
P14
中世杭列
P15
弥生杭列
P6
P20
P7
P8
P16
D区
A
A′
4号溝
338.90m
1
2
3
ℓ1 暗褐色粘土層
ℓ2 暗茶褐色砂質土
ℓ3 灰白色砂質土
0
2m
(1/60)

第27図　杭列・溝跡